中国西部大地震被害に対する
国際緊急援助隊救助チーム・医療チーム
活動報告書

平成 21 年 4 月
（2009）

独立行政法人国際協力機構
国際緊急援助隊事務局

序　　文

平成 20 年 5 月 12 日中国時間 14 時 28 分に中国四川省で発生した地震は、各地に甚大な人的及び物的被害を及ぼしました。

日本政府は中国政府からの支援要請を受け、国際緊急援助隊救助チーム及び医療チームの派遣を決定し、現地の被災者の救出と支援に当たりました。本報告書は両チームの災害援助活動を報告するものです。

救助チームは派遣決定から約 6 時間という短時間で本邦を出発し、極めて迅速な派遣がとなりました。また第 1 陣が出発した翌日には、第 2 陣が国際緊急援助隊初となるチャーター便により派遣されました。救助チームは中国政府や現地救助機関と連携し、生存者の救出にはいたらなかったものの、計 3 箇所で 16 名のご遺体の発見と収容を行いました。

医療チームの活動拠点は、被災地域のニーズや中国政府との協議の結果、被災地域から重症患者が集中的に搬送され、診療が行われる拠点である四川大学華西病院としました。病院内に本部テントを設置し、医療隊員は救急外来を始め、ICU、透析、産科、放射線科、薬剤科等、病院内の部署において病院側との協力により、被災者を支援するというこれまでに例のない新しい試みを行いました。またこれら活動を通じて、日本の医療事情や医療チームの活動事例を紹介し、日中の相互理解を深めました。

今後、中国側による一日も早い復旧･復興と被災者の暮らしの安定と幸福を心よりお祈りいたします。

平成 21 年 4 月

独立行政法人国際協力機構
理事　永塚　誠一

活動写真
（１）救助チーム

山岳地帯の移動	現地の重機を活用しての捜索活動
廃材等も活用した柱の除去	救助犬による捜索
中国側救助隊と協力しての救助活動	簡易照明による夜間捜索活動

被災家屋周辺の捜索	遺体の収容活動
画像探査装置による被災建物の捜索	ロープワークによる瓦礫の移動
救助現場での関係者との作戦会議	怪我をした救助犬の治療（縫合）

（２）医療チーム

本部テント前での取材対応

救急外来班によるＸ線写真の確認

救急外来班による処置

ICU 班による患者の洗髪

臨時 ICU 班による処置

透析機器の使用方法の指導

放射線班による指導

産科での沐浴方法の指導

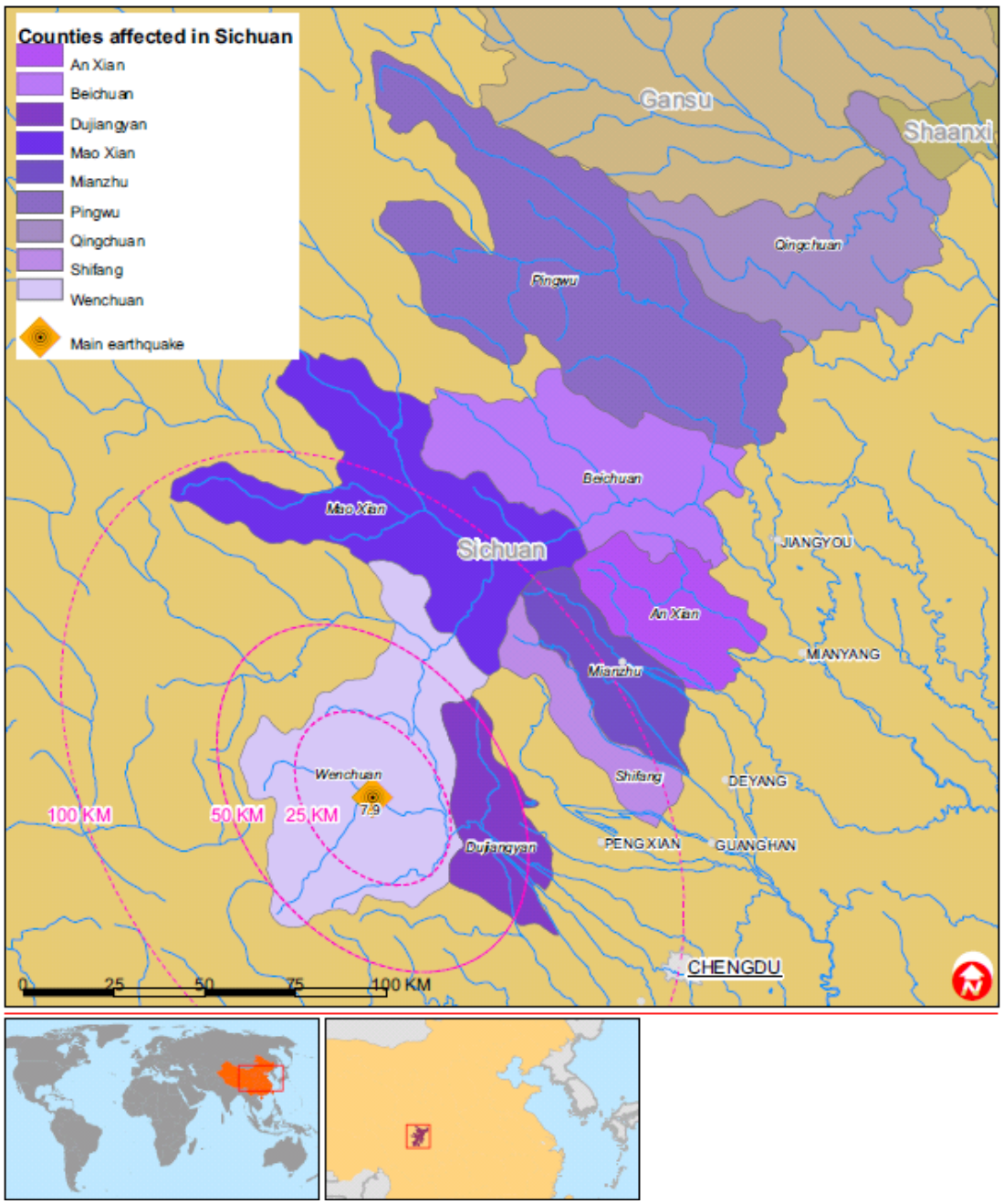
薬剤班による患者との交流

本部テントの作業風景

第四病棟の前に本部を設置

過去の JDR 活動記録の展示

被災地　地図

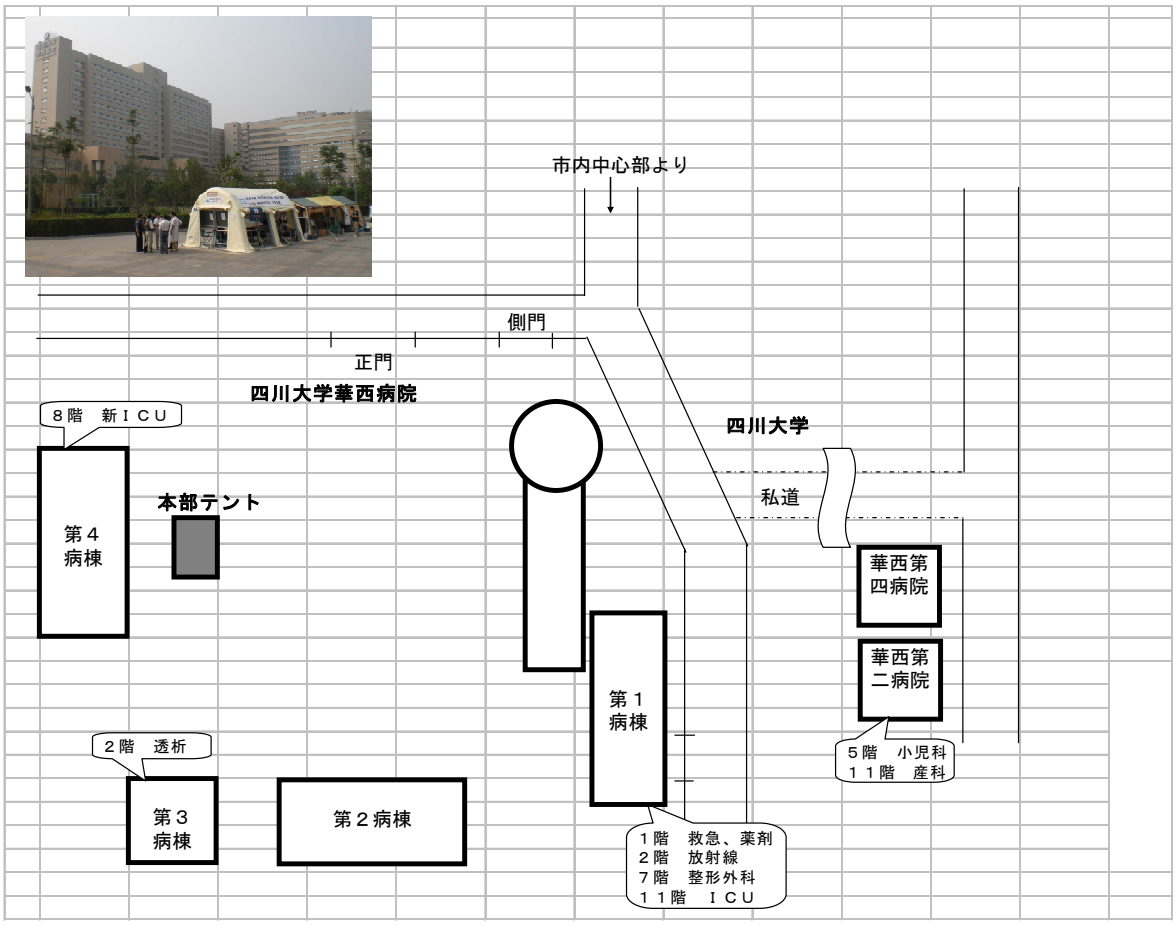


（出典：ReliefWeb）

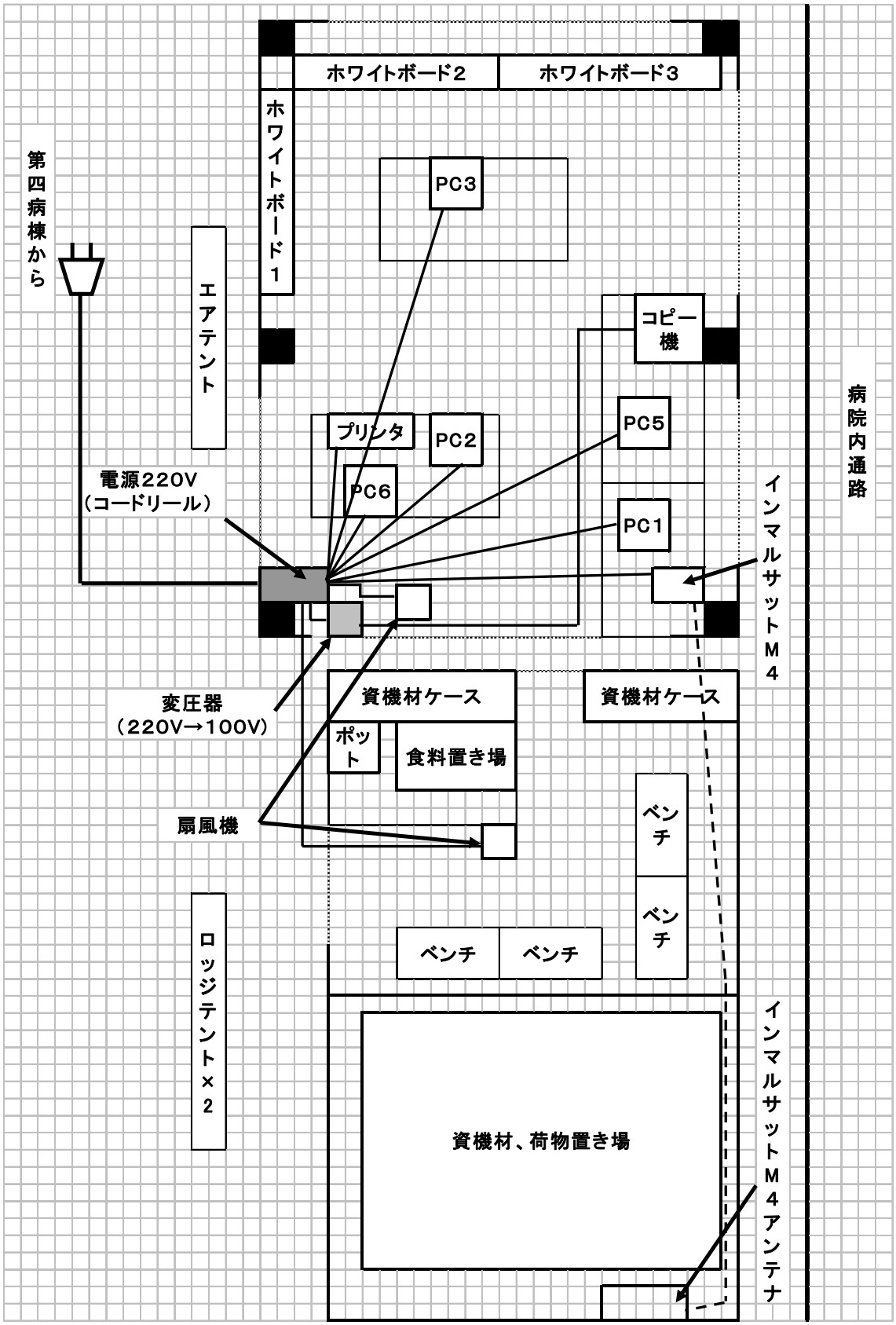
救助チーム派遣地　地図

（出展：中国旅行情報局より作成）

医療チーム派遣地　地図


市内中心部より
側門
正門
四川大学華西病院
８階　新ＩＣＵ
第４
病棟
本部テント
四川大学
私道
華西第
四病院
華西第
二病院
第１
病棟
５階　小児科
１１階　産科
２階　透析
第３
病棟
第２病棟
１階　救急、薬剤
２階　放射線
７階　整形外科
１１階　ＩＣＵ

医療チーム本部内レイアウト



目　　次

序文
活動写真
地図
目次

第一章．災害概要 **1**
１．災害概要 2
（１）災害の概況 2
（２）中国政府の対応 2
（３）各国の支援状況 2
（４）わが国の対応 8

第二章．救助チーム **9**
1.活動日程 10
2.チーム構成 11
（１）メンバーリスト 11
（２）小隊編成 13
3.団長総括 14
4.活動記録 16
5.医療班報告 18
6.ロジスティックス 20
7.携行資機材 21
8.中国政府への報告書 22

第三章．医療チーム **27**
1.活動概要 28
（１）活動日程 28
（２）チーム構成 30
2.活動報告 36
（１）団長総括 36
（２）広報・メディア対応 37
（３）活動の特徴 39
（４）救急外来班 40
（５）胸部外科 ICU 班 47
（６）臨時 ICU 班 53
（７）透析班 56
（８）放射線科 61
（９）薬剤班 63
（１０）産科班 65
（１１）業務調整員 69
3.医療チーム添付資料 71
（１）全体ミーティング議事録 71
（２）現地活動報告書 90
（３）供与資機材リスト 94
（４）資機材の供与に関する受領書 96

付録　報道記事 101

第一章．災害概要

１．災害概要

（１）災害の概況

2008 年 5 月 12 日（月）14 時 28 分（現地時間）、中国西部の四川省の省都である成都から北西約９０ｋｍの汶川県において、マグニチュード 7.9 の大規模な地震が発生した。これにより、住宅や学校等建物倒壊などの物的被害とそれによる死者、負傷者、行方不明者の人的被害が甚大となった。

【災害状況】
マグニチュード：7.9 （※中国政府発表は当初はマグニチュード 7.8。その後 8.0 に変更）
発災日時：2008 年 5 月 12 日 14 時 28 分（現地時間）
深さ：19km
震源地：北緯 30.986°、東経 103.364°
近隣都市との距離：成都市西北西 80km
綿陽市西南西 145km
北京市南西 1545km
（出展：USGS）

【被害状況】
死者：69,227 人
行方不明者：17,923 人
負傷者：374,643 人
（新華社通信（2008 年 9 月 18 日）より）

（２）中国政府の対応

発災後、胡錦濤国家主席は、全力で被災者を救援するように指示を行い、温家宝首相をトップとする「地震災害対策本部」を設置すると共に、温首相を被災地に派遣した。人民解放軍、武装警察隊等を動員し、道路の復旧や救助活動に全力を注入するが、発災直後は地震により道路の遮断や通行止めに加え、悪天気により救援活動は難航した。

（３）各国の支援状況

- IOM を含む国際機関が援助を表明
- 香港、台湾、マカオの華僑から救援への参加、義援金、救援物資提供の意思を表明
- 英国、ルーマニア、チリ、メキシコ、アメリカ、ポルトガル、イスラエル、ＥＵ」、アフガニスタン、キプロス、スペイン、ドイツが見舞いと支援の医師を表明
  詳細は次ページ表のとおり。

表：各国の支援状況

地域	国名	救助	医療	資金協力	物的支援
アジア・大洋州	日本	61 名の国際緊急援助隊救助チームの派遣	23 名の国際緊急援助隊医療チームの派遣	・国際赤十字･赤新月社連盟を通じて総額 170 万ドルの緊急無償資金協力（食糧、毛布、調理用品）を実施 ・4790 万円相当の緊急無償資金協力（テント）を実施	・テント、毛布、プラスチックシート等約 6000 万円相当の物資を供与 ・血液透析機材、浄水器、医薬品、テント等約 2 億円相当の援助物資を供与 ･兵庫県及び愛知県が所有するテント（計 400 張）、内閣府ＰＫＯ事務局が所有するテント（700 張）、防衛省･自衛隊が所有するテント（100 張）を供与 ・地方自治体から提供されたテント（計 566 張）及び水道関連団体から提供された浄水器その関連機器、飲料水を供与
	バングラデシュ	24 名のチームの派遣			医薬品、医療器材、テント計 9.5 トンを供与
	インド				医薬品、テント、シュラフ、毛布、食料品計 152 トンを供与（5 百万ドル相当）
	韓国	44 名の緊急援助チームの派遣			テント、毛布、浄水器、医薬品、医療器材を供与（5 百万ドル）
	キルギス				テント（20 張）、120 トンの建築資材の供与（約 130 万ドル）
	マレーシア			150 万ドルの支援を表明	
	モンゴル			5 万ドルの資金協力	

	パキスタン		医師、医療従事者28名の医療チームを派遣		・テント、毛布、プラスチックマット、医薬品、飲料水の供与 ・医薬品、毛布、テントの追加供与
	シンガポール	55名の救助チームの派遣		20万ドルの資金協力	テント1300張の供与
	スリランカ		医療チームの派遣		医薬品、医療資機材（約56万ドル）、テント1250張、医療、茶（約56万ドル）の供与
	タイ			約3.7万ドルの支援を表明	
	トルクメニスタン				40トンの緊急援助物資の供与
	ベトナム			20万ドルの支援を表明	
	オーストラリア				IFRCにテント、毛布、給水タンク、浄水タブレットを供与
	ニュージーランド			IFRCに約98万ドルの支援を表明約38万ドルの支援を表明	
	サモア			10万ドルの資金協力	
	トンガ			5万ドルの資金協力	
北米	米国			USAID－OFDAに管理面での支援（約17万ドル）	・IFRCに緊急援助物資の供与（50万ドル） ・特殊捜索･救助機材の供与（約81万ドル） ・緊急援助物資の供与（約160万ドル）
	カナダ			IFRCに約98万ドルの支援を表明	
中南米	キューバ		医療チームの派遣		医薬品や医療資機材4.5トンを供与
	ブラジル				20万ドルの物資を供与

欧州	ベルギー				・MSF にプラスチックカバー、給水タンク、緊急ヘルスキット計 13.5 トンを供与 ・CARITAS にテント 1000 張を供与 ・シェルター系、衛生関連系、医療系の物資約 100 万ドルを供与
	ブルガリア			約 15 万ドルの資金協力	
	クロアチア			クロアチア赤十字に約 33 万ドルの支援を表明	
	チェコ				4.3 万ドルの物資を供与
	デンマーク			デンマーク赤十字に約 52 万ドルの資金協力	
	エストニア			中国紅十字に約 5 万ドルの支援を表明	
	フィンランド				IFRC に医薬品やシェルターを約 78 万ドル支援
	フランス				
	ドイツ		ドイツ赤十字に 120 床の野戦病院を展開（約 190 万ドル）		・テント 1900 張を供与（約 100 万ドル）
	ギリシャ			約 31 万ドルの資金協力	
	アイルランド			IFRC に約 150 万ドルの資金協力	
	イタリア		IFRC に医師 7 名、看護師 7 名の野戦病院を展開		・毛布、テント、ビスケット等を 62 トンを供与（約 55 万ドル） ・テント、野戦病院を供与（約 120 万ドル） ・IFRC に医薬品、水、衛生用品を供与（約 150 万ドル） ・テント（240 張）を供与（約 180 万ドル）

	ルクセンブルグ			・IFRC に約 77 万ドルの資金協力 ・UNICEF に約 15 万ドルの資金協力	・CARITAS にテント（2150 張）を供与（約 7.7 万ドル） ・毛布 2016 枚を供与（約 7.8 万ドル）
	モナコ			・モナコ赤十字に約 7.7 万ドルの資金協力 ・WHO に約 15 万ドルの資金協力	
	オランダ			・IFRC に約 77 万ドルの支援を表明	オランダ赤十字にテントの供与を表明（約 77 万ドル）
	ノルウェー			ノルウェー赤十字に約 38 万ドルの資金協力	
	ポーランド			中国紅十字に約 10 万ドルの資金協力	・被災者が必要とする物資を現地市場で調達の上、供与（約 2.1 万ドル）・テント 160 張を供与（約 59 万ドル）
	ポルトガル				テント、毛布、食器、衛生用品、食糧を供与（15 万ドル）
	セルビアモンテネグロ				テント 155 張の供与
	スロバキア				テント、毛布、シュラフ、ストレッチャー、発電機の供与（約 150 万ドル）
	スペイン				・5 万人×3 ヶ月相当の医薬品の供与 ・中国紅十字に医薬品、医療資機材の供与（約 150 万ドル）
	スウェーデン			・SC に保健医療、社会、教育面で約 8.2 万ドルの資金協力 ・SMR に約 16 万ドルの資金協力 ・SRSA にテントの輸送 ・スウェーデン教会に約 24 万ドルの資金協力	・SRSA に毛布の供与（約 4 千ドル） ・SRSA にテントの供与（約 3.4 万ドル） ・SRSA に毛布の輸送（やく万ドル） ・スウェーデン赤十字に医薬品、食料、日用品の供与（約 33 万ドル） ・SRSA にテントの供与（約 99 万ドル）

	スイス				・スイス赤十字にテント 1000 張の供与 ・SDC/SHA に水、シート、毛布の供与（約 96 万ドル）
	ＵＫ			CANGO に約 190 万ドルの資金協力	テント 5500 張、通信機材の供与（約 190 万ドル）
	ロシア	50 名の救助チームの派遣			・テント、毛布、マットレス、携帯用発電装置、肉、砂糖、米、医薬品を供与
	ウクライナ				テント、毛布、医薬品等 25 トン相当の供与
中東	サウジアラビア			5000 万ドルの資金協力	テント、毛布、インスタント食品の供与（1000 万ドル）
	トルコ			200 万ドルの資金協力	
	ア首連				食料、水、テント、毛布、医薬品等 40 トンの供与
アフリカ	ボツワナ			15 万ドルの資金協力	
	ガボン			50 万ドルの資金協力	
	モーリシャス			30 万ドルの資金協力	
	セネガル			50 万ドルの資金協力	
その他	ECHO			IFRC に約 310 万ドルの資金協力	
	UNICEF 香港			・約 25 万ドルの支援 ・約 100 万ドルの支援	
	UNICEF USA			・15 万ドルの支援 ・30 万ドルの支援	
	US-中国ビジネスカウンシル			3000 万ドルの資金協力	

（出典：Financial Tracking Service, ReliefWeb（2008 年 6 月 18 日現在））

（４）わが国の対応

このような状況下、中国政府は日本政府に対して、まず緊急援助物資を、その後国際緊急援助隊救助チームの派遣を、さらに医療チームの派遣を要請した。これを受け、日本政府は緊急援助物資供与に加え、救助チーム及び医療チームの派遣を決定し、実施した。概要次のとおり。

ア．物資供与

5 月 13 日（火）外務省は中国政府から緊急援助物資の支援要請を受け、JICA は同日に緊急援助物資供与を決定し、約 6,000 万円相当のテント、毛布、プラスチックシート、スリーピングマット、ポリタンク、浄水器、簡易水槽（3000L）、発電機（コードリール付）を供与した。引渡式は 5 月 18 日（日）19 時 50 分（現地時間）、四川省民政庁において実施された。

イ．救助チーム

5 月 15 日(木) 11 時（現地時間）中国政府は在中国日本大使館に対し、日本の救助チームの派遣を要請し、同日正午過ぎ（日本時間）外務省は救助チームの派遣を決定した。概要以下のとおり。

チーム構成：外務省、警察庁、消防庁、海上保安庁、医療班、JICA 等、計 61 名
派遣期間：5 月 15 日から 21 日まで（第 1 陣）
　　5 月 16 日から 21 日まで（第 2 陣）
活動内容：中国政府や関係機関と協力し、被災地での捜索救助活動を実施

ウ．医療チーム

5 月 19 日（月）14 時（現地時間）中国政府は在中国日本大使館に対し、日本の医療チームの派遣を要請し、19 日深夜外務省は医療チームの派遣を決定した。概要以下のとおり。

チーム構成：外務省、医師、看護師、薬剤師、医療調整員、JICA 等、計 23 名
派遣期間：5 月 20 日から 6 月 2 日まで
活動内容：中国政府や関係機関と協力して、被災者の負傷や疾病の治療、地域の医療機関の支援、中国政府や医療機関に対する必要な指導や助言を実施

第二章．救助チーム

（４）わが国の対応

1. 活動日程

（※時刻は、日本、中国それぞれの現地時刻）

5/12（月）	14:28	発災
5/15（木）	正午過ぎ	派遣決定
	17:00	第 1 陣結団式
	18:29	第 1 陣成田出発（JL789）
	21:05	第 1 陣北京着
	23:45	第 1 陣北京発
5/16（金）	02:23	第 1 陣成都到着
	10:00	第 1 陣青川県関庄鎮到着。活動開始
	11:30	第2陣結団式
	13:17	第 2 陣成田出発（JL8839（チャーター便））
	15:30	第 1 陣青川県喬庄鎮到着。活動開始
	17:55	第 2 陣成都到着
5/17（土）	12:20	第 2 陣青川県喬庄鎮到着、第 1 陣に合流
	13:10	青川県喬庄鎮出発
	23:45	北川県曲山鎮（北川第 1 中学）到着、調査活動開始、BoO 設営
5/18（日）	08:00	北川第 1 中学での捜索救助活動再開
	08:07	曲山鎮市街地の調査に 17 名が BoO 出発
	23:00	北川第 1 中学及び曲山鎮市街地の活動終了
5/19 （月）	18:30	北川出発、成都移動
5/21 （火）	03:18	成都発（JL8870（チャーター便））
	08:56	成田着
	09:45	解団式

2. チーム構成

（1）メンバーリスト

No.	氏名	所属先	指導科目
1	小泉　崇	外務省国際協力局無償資金・技術協力課国際緊急援助室　室長	団長
2	髙瀬　初雄	警察庁長官官房国際課　警視	副団長
3	村岡　嗣政	総務省消防庁参事官補佐	副団長
4	大河内　克朗	海上保安庁警備救難部救難課 専門官	副団長
5	藤谷 浩至	JICA 国際協力人材部	副団長
6	原　修	東京消防庁 消防司令長	中隊長
7	松井　晶範	東京消防庁　消防司令長	中隊長
8	山根　英樹	警察庁東京都警察情報通信部	通信担当
9	蟹江　伸一	警察庁東京都警察情報通信部	通信担当
10	村上　光志	警視庁警備二課	救助犬ハンドラー
11	小松　就正	警視庁警備二課	救助犬ハンドラー
12	能祖　貴洋	警視庁警備二課	救助犬ハンドラー
13	鶴川　浩司	警視庁警備二課	救助犬ハンドラー
14	齋藤　昌巳	警視庁災害対策課	救急救助（小隊長）
15	菅原　健二	警視庁災害対策課	救急救助
16	長谷川　博宗	警視庁第一機動隊	救急救助
17	井戸沼　聡	警視庁第一機動隊	救急救助
18	田村　浩一	警視庁第二機動隊	救急救助
19	本橋　茂仁	警視庁第三機動隊	救急救助
20	實川　真輔	警視庁第四機動隊	救急救助
21	山田　拓利	警視庁第五機動隊	救急救助
22	杉本　健太	警視庁第七機動隊	救急救助
23	齊藤　浩一	警視庁第八機動隊	救急救助
24	古市　達也	警視庁第八機動隊	救急救助
25	田浪　明哲	警視庁第九機動隊	救急救助
26	奥西　俊郎	警視庁特科車両隊	救急救助
27	島田　一郎	東京消防庁　消防司令	救急救助（小隊長）
28	田中　一嘉	東京消防庁　消防司令補	救急救助
29	吉樂　隆男	東京消防庁　消防司令補	救急救助
30	小野　智木	東京消防庁　消防副士長	救急救助
31	柴田　寛之	川崎市消防局　消防司令補	救急救助
32	加藤　哲	川崎市消防局　消防士長	救急救助
33	原　光生	川崎市消防局　消防士長	救急救助
34	間瀬　錦司	名古屋消防局　消防司令	救急救助
35	小石　英次	名古屋消防局　消防司令補	救急救助
36	松岡　悟	名古屋消防局　消防士長	救急救助
37	髙橋　昌樹	市川市消防局　消防士長	救急救助
38	大川　雅史	市川市消防局　消防士長	救急救助
39	橋本　智也	藤沢市消防本部　消防士長	救急救助
40	伊藤　隆宏	藤沢市消防本部　消防士長	救急救助

41	石塚　智幸	第三管区海上保安本部 羽田特殊救難基地　特殊救難隊	救急救助（小隊長）
42	中野　剛二	第三管区海上保安本部 羽田特殊救難基地　特殊救難隊	救急救助
43	中井　一陽	第三管区海上保安本部 羽田特殊救難基地　特殊救難隊	救急救助
44	横村　学	第三管区海上保安本部 羽田特殊救難基地　特殊救難隊	救急救助
45	江口　康平	第三管区海上保安本部 羽田特殊救難基地　特殊救難隊	救急救助
46	天方　直人	第三管区海上保安本部 羽田特殊救難基地　特殊救難隊	救急救助
47	野口　建太朗	第二管区海上保安本部 宮城海上保安部　巡視船くりこま	救急救助
48	阿部　直彦	第二管区海上保安本部 宮城海上保安部　巡視船くりこま	救急救助
49	内海　哲也	第三管区海上保安本部 横浜海上保安部　巡視船いず	救急救助
50	楢﨑　新	第六管区海上保安本部 呉海上保安部　巡視船みささ	救急救助
51	山下　浩輔	第十一管区海上保安本部 巡視船くだか	救急救助
52	川上　幸一郎	第十一管区海上保安本部 巡視船くだか	救急救助
53	畑　倫明	奈良県立医科大学高度救命救急センター 助手	救急医療
54	中島　康	東京都立広尾病院救命救急センター　医長	救急医療
55	川谷　陽子	愛知医科大学病院高度救命救急センター 看護師	救急医療
56	谷　暢子	大阪府済生会千里病院千里救命救急センター　看護師	救急医療
57	糟谷　良久	JICA 資金協力支援部準備室　計画課	業務調整
58	林 宏之	JICA 中国事務所　所員	業務調整
59	市原　正行	青年海外協力協会	業務調整
60	藤巻　三洋	青年海外協力協会	業務調整
61	鈴木　諭	青年海外協力協会	業務調整

注）所属先はすべて当時

（２）小隊編成

第１小隊（13 名）		
小隊長	齋藤　昌巳	警視庁災害対策課
捜索救助隊員	菅原　健二	警視庁災害対策課
捜索救助隊員	井戸沼　聡	警視庁第一機動隊
捜索救助隊員	田村　浩一	警視庁第二機動隊
捜索救助隊員	古市　達也	警視庁第八機動隊
捜索救助隊員	田中　一嘉	東京消防庁　消防司令補
捜索救助隊員	加藤　哲	川崎市消防局　消防士長
捜索救助隊員	原　光生	川崎市消防局　消防士長
捜索救助隊員	大川　雅史	市川市消防局　消防士長
捜索救助隊員	中野　剛二	第三管区海上保安本部　羽田特殊救難基地　特殊救難隊
捜索救助隊員	江口　康平	第三管区海上保安本部　羽田特殊救難基地　特殊救難隊
捜索救助隊員	野口　建太朗	第二管区海上保安本部　宮城海上保安部 巡視船くりこま
捜索救助隊員	阿部　直彦	第二管区海上保安本部　宮城海上保安部 巡視船くりこま
第２小隊（12 名）		
小隊長	石塚　智幸	第三管区海上保安本部　羽田特殊救難基地　特殊救難隊
捜索救助隊員	長谷川　博宗	警視庁第一機動隊
捜索救助隊員	本橋　茂仁	警視庁第三機動隊
捜索救助隊員	實川　真輔	警視庁第四機動隊
捜索救助隊員	山田　拓利	警視庁第五機動隊
捜索救助隊員	間瀬　錦司	名古屋消防局　消防司令
捜索救助隊員	柴田　寛之	川崎市消防局　消防司令補
捜索救助隊員	小石　英次	名古屋消防局　消防司令補
捜索救助隊員	松岡　悟	名古屋消防局　消防士長
捜索救助隊員	横村　学	第三管区海上保安本部　羽田特殊救難基地　特殊救難隊
捜索救助隊員	内海　哲也	第三管区海上保安本部　横浜海上保安部　巡視船いず
捜索救助隊員	楢﨑　新	第六管区海上保安本部　呉海上保安部　巡視船みささ
第３小隊（14 名）		
小隊長	島田　一郎	東京消防庁　消防司令
捜索救助隊員	杉本　健太	警視庁第七機動隊
捜索救助隊員	齊藤　浩一	警視庁第八機動隊
捜索救助隊員	田浪　明哲	警視庁第九機動隊
捜索救助隊員	奥西　俊郎	警視庁特科車両隊
捜索救助隊員	吉樂　隆男	東京消防庁　消防司令補
捜索救助隊員	小野　智木	東京消防庁　消防副士長
捜索救助隊員	髙橋　昌樹	市川市消防局　消防士長
捜索救助隊員	橋本　智也	藤沢市消防本部　消防士長
捜索救助隊員	伊藤　隆宏	藤沢市消防本部　消防士長
捜索救助隊員	中井　一陽	第三管区海上保安本部　羽田特殊救難基地　特殊救難隊
捜索救助隊員	山下　浩輔	第十一管区海上保安本部　巡視船くだか
捜索救助隊員	川上　幸一郎	第十一管区海上保安本部　巡視船くだか
捜索救助隊員	天方　直人	第三管区海上保安本部　羽田特殊救難基地　特殊救難隊

3. 団長総括

外務省国際協力局無償資金・技術協力課国際緊急援助室長　小泉崇

（1）総論

5 月 12 日に四川省を中心とするマグニチュード 8.0 の大地震が発生し、7 万人近い死者と 1 万 7 千人以上の行方不明者を出す大災害となった。この大地震に際し、国際緊急援助隊救助チーム（JDR）61 名が、5 月 15 日（第 2 陣は 16 日）より 21 日までの日程で中国四川省に派遣され、被災者の救助活動に当たった。後述するように、JDR は様々な困難に遭遇しながらも、一致団結して見事なチームワークの下に任務に当たり、その使命を遂行したと言えよう。残念ながら生存者の発見には至らなかったが、青川県及び北川県の計 3 カ所で合計 16 名の要救助者の救助をすることができたことは、隊員各位の昼夜を分かたぬ精力的な活動の賜であった。また、JDR の真摯な活動振りが、中国国内で高い評価を得、中国政府のみならず中国の人々から感謝の念が表明されたことは特筆すべきことと言えよう。

また、この機会に、大使館等の我が方公館及び JICA 事務所からの中国人スタッフを含む応援出張者、更に、四川省の地方政府を含む中国側関係者など、JDR の活動を陰で支援して下さった方々に心より御礼申し上げたい。

（2）評価と課題

ア．短時間での本邦出発

5 月 15 日の正午前に中国側からの要請があったが、直ちに派遣準備に入り、派遣決定後、夕方 6 時過ぎには本邦を出発した。要請受領後 6 時間ほどでの本邦出発は、これまでにない早さであった。一方、この早さを確保したが故に、隊を 2 陣に分け、第 1 陣は必要最小限の資機材のみの携行となり、主要な資機材等の物資は第 2 陣に携行を委ねざるを得なくなったという課題はあったものの、これまでにない、動員から本邦出発までの早さを確保できたことは、JDR の展開の迅速性をアピールできた点で特筆に値しよう。

イ．中国が歴史上初めて受け入れた海外からの援助隊

JDR 派遣中にも中国政府側から、「中国が歴史上初めて受け入れた海外からの緊急援助隊は、日本の援助隊である」と折に触れ強調された。この点は、何より JDR の今次派遣を特徴づけるものであり、中国側が日本からの支援受け入れを重視していたことの証左であったと言えよう。また、中国国内で、連日にわたる JDR の活動に関する報道がなされたことにより、中国国内での対日感情が著しく好転するとの現象が生じたこともあげられよう。JDR の活動の目的は、あくまでも人道支援にあるが、このように 2 国間関係に肯定的な影響を与え、特に被災国国民に感謝をもって受け入れられるような結果を残せたことは、正に不幸中の幸いというべき出来事であった。

一方問題点としては、中国国内での部内調整に時間を要したためか要請のタイミングが遅くなり、救助活動にとり重要な地震発生早期での貴重な時間を失うことになった。また、中国関係機関間（中国政府内、中央・地方間、地方政府内）で相互に情報が錯綜したのではないかと思われることから、救助活動を行うには不適当なサイトを割り当てられるなど当初混乱が生じた。この点については、大半が中国側内部の問題に起因するものと思われる反面、我が方と中国側との事前の協議・調整が不足していた面があったことは否めない。それだけの時間的な余裕がなかったことも事実であるが、今後仮に中国において累次の事態が生じた場合には、少なくとも活動サイトの選定だけでも、事前に中国側との擦り合わせを行う必要があろう。

ウ．諸困難への遭遇

今般の活動では、当初より様々な困難に遭遇した。第 1 に、情報の不足乃至は錯綜という面である。被災状況を含め中国側の内部で JDR に関する情報が十分にシェアされていな

かったと見られることなどから、活動サイトの選定を初めとして当初混乱が生じた。第 2 に移動の困難という問題があった。道路の片側が崩落していたり、大きな岩が落ちていたり、地割れにより段差ができていたりと、道路の状況が思いの外悪かった。また、軍を含め救援にあたる車両の往来によって生じる交通渋滞もひどく、移動に伴う困難は予想以上のものであった。第三は安全性の確保であった。活動地域では余震も頻繁に起こり、山がちな高地にあるため天候が変わりやすく、大雨による土砂崩れの不安や、地震により形成されたダムの突然の決壊の危険性も指摘された。こうした諸困難にもかかわらず、淡々と任務を遂行した JDR の隊員に対しては、高い評価が下されてしかるべきであろう。

エ．内外メディアの高い関心

今般の JDR の中国派遣中は内外のメディアの関心の高さが際立っていた。特に中国側については、国営の CCTV が常時救助チームに同行し、活動振りを逐一中国全土に報道するなど密着取材を行った。また、本邦の主要メディアのほとんどが西都から同行し、熱心に取材に当たっていた。団長としても、JDR の活躍を内外にアピールすべく、原則全ての取材に応じるよう努めた。

従来より指摘されているとおり、国際緊急援助隊の派遣に際しては、救助チームであれ他のチームであれ、内外のメディアに対する適切な対応は極めて重要である。メディアへの対応は主に団長の役割ではあるが、組織としてのノウハウの蓄積にも務める必要があるように思われた。

オ．機能拡充の必要性

今般の緊急援助活動の機能面で特筆すべき点として、JICA が契約してチャーター便（JAL 社）を初めて使用したことである（救助チームの第二陣の成都入りとチーム全体の成都からの帰路）。チャーター便の使用は、ここ数年来の懸案事項であったが、今般の地震災害における対応が最初の実施例となった。チャーター便の利用により、資機材の運搬を初めとして、隊の運営について従来以上に機動性が向上したものと評価できよう。一方、救助用資機材に関して言えば、中国側の援助隊（消防隊）も自国製の生命探査装置を活用する等、国際的にも技術が進歩しているところ、JDR は、先端的な資機材を使用した捜索救助を行いえるよう機能を拡充する努力が常に必要であることが痛感された。

4. 活動記録

	第 1 陣	第 2 陣
5/15（木）	17:00結団式 18:29成田発（JL789） 21:05 北京着 23:45 北京発（中国側提供チャーター便）	
5/16（金）	02:23 成都着 03:20 成都から四川省広元市青川県関庄鎮に陸路移動 10:00 四川省広元市青川県関庄鎮着 10:35 中国側現地指揮本部と協議、現場調査 12:35 当初活動予定地の東河口の調査の結果、土砂崩れ現場であり、救助チームの能力に適した活動サイトではなかったため、能力が活かせる現場を再度調査することを合意 14:30 関庄鎮から喬庄鎮に陸路移動 15:30 喬庄鎮に到着、捜索救助活動の実施、漢方学院の職員寮で行方不明の 3 名の捜索を実施	11:30結団式 13:17成田発（JL8839（チャーター便）） 17:55成都着 20:58成都から喬庄鎮に陸路移動
5/17（土）	07:25 乳児（女児）を抱いた母親の遺体を発見 07:35 中国公安確認のもと、ご遺体を遺族に引渡し 11:35 喬庄鎮での捜索救助活動終了、次活動サイトを中国政府との協議により綿陽市北川県と決定	3:30 夜間移動の危険性から一時待機 06:50 喬庄鎮に再度移動開始
	12:20 第 1 陣と第 2 陣が合流 13:10 綿陽市に陸路移動 20:45 綿陽市のインターを下り、活動サイトを四川省弁公室参事官と協議、活動サイトを北川県曲山鎮に決定 21:12 北川県曲山鎮に向け陸路移動 23:45 北川県曲山鎮の活動サイト北川第一中学校に到着	
5/18（日）	0:45 団長、副団長、中隊長 1 名、2 個小隊による現場調査兼捜索チームにより北川第一中学校状況確認 02:00 調査時に捜索活動を実施したが生体反応が得られなかったため、夜明け後活動を再開させることを決定 08:00 北川第一中学校での捜索救助活動実施、綿陽市消防局と協力し活動を	

	実施 08:07 団長以下 17 名により北川市街地の活動サイトに向け出発、捜索活動実施 09:15 北川第一中学校にて同サイト最初の遺体を発見 14:22 北川市街地により人員を割き、市街地の活動サイトは 1 個小隊で、北川第一中学は 2 個小隊で活動することを決定 20:00 夜間活動の危険性から 18 日の北川第一中学校での活動終了 23:00 上記同様 18 日の北川市街地での活動終了
5/19（月）	08:00 活動再開 08:30 安全面から北川市街地での活動中止を中国側が要望したのを受け、同サイトでの活動終了 12:10 救助チーム撤退準備開始 18:30 北川県から成都へ陸路移動
5/20（火）	11:00 四川省副省長表敬訪問、活動報告及び資機材供与 14:00-18:00 医療班による隊員のメディカルチェック
5/21（水）	03:18 成都発（JL8870（チャーター便）） 08:56 成田着 09:45 解団式

5. 医療班報告

（１）活動概要

救助チーム医療班（4 名：医師 2 名、看護師 2 名）は本邦出発から現地活動、帰国後まで救助隊員の健康管理を第 1 目的として活動を行った。本派遣では第 1 陣に医師 1 名、第 2 陣に医師 1 名、看護師 2 名に分かれて当初の活動を行った。

今回の活動はバス移動が非常に長く、車中泊が続いたことにより、隊員の健康管理やストレスマネージメントに苦慮したが、幸い大きく体調を崩す隊員はなく、医療班としての役割を十分に果たせたと考える。本派遣では、救助現場で関わった遺体が子供や若い母子であったことに加え、活動中常に帯同しているマスコミの存在により、隊員には想像以上のストレスが加わったものと考えられる。医療班内部においても、第１陣と第２陣に別れたことにより、特に第１陣に多大なストレスがかかることとなった。

本派遣では救助チーム医療班として初めて PPE としてユニフォームと赤いベストを身につけたことにより、隊としての統一感が醸成されるとともに、救助現場での隊員サポートにおいて従前より安全性が確保できたものと思われる。

なお、活動終了時に活動地域周辺の医療情報収集を行い、帰国時に成都空港にて国際緊急援助隊医療チームに申し送ることができた。

（２）治療実績

治療内容	治療人数
皮膚科疾患	5 名
整形外科疾患	2 名
消化器疾患	15 名
外傷	1 名（救助犬）
感冒様症状	1 名
酔い止め予防投与	10 名
不眠時の予防投与	22 名

（３）活動内容

以下に活動段階別に医療班の実施した業務を明示する。

ア．本邦出発から活動前まで

- 派遣前の健康状態を把握（成田で問診票の配布・記入・回収をし、成都到着までに記載内容のチェックを実施）
- 隊員と医療班の信頼関係の構築（自己紹介、こまめな声かけ、食事摂取や睡眠、衛生状態のチェック）
- 長時間の移動に対する配慮（深部静脈血栓症や睡眠不足、疲労、ストレスの状態をチェック）

イ．活動中

- 活動現場では次の業務を実施
  - ・救護所・手洗い場・トイレ・休憩所の設置
  - ・水分・栄養の補給
  - ・要救助者発見時の対応
- BoO では次の業務を実施
  - ・水分・栄養の補給
  - ・手洗い・トイレの設置（衛生環境の管理）
  - ・休憩場所・寝る場所の確保

・負傷した隊員の治療
・情報収集（現地野戦病院視察など含む）

ウ．活動終了から帰国後まで

- 帰国前に全隊員の健康チェックを実施し、健康状態に変調を来した隊員に対しては適切に対処した。
- 帰国後はアンケート調査を通して隊員の健康状態を確認。ストレスマネージメントについては「兵庫県こころのケアセンター」との協力のもとメンタルチェックを実施。

6. ロジスティックス

本派遣におけるロジスティックス活動に関し、以下の観点から活動報告を行う。

（1） 人員及び資機材の輸送・移動

ア．空路移動

第 2 陣が大部分の捜索救助資機材・医療資機材・生活資機材を携行したが、チャーター便による輸送であったため、極めて円滑な通関となった。

また、救助犬の輸出入手続きに関し、現地大使館及び JICA 事務所との連携により、問題なく手続きが実施された。

イ．陸路移動

成都から青川県までの約 500 キロの移動時には、バス及びトラックで現地警察の先導により移動した。移動時には、現地参団業務調整員保有の携帯電話及び現地調達した 10 台の携帯電話で車輌間連絡を実施した。また、夜間の山間移動は極めて危険が伴うことから、中国側と協議の上、夜間移動は避けることとした。

青川県から北川県までの約 300 キロの移動時には、バス 4 台・トラック 5 台で車列を組み移動を行った。移動時には隊員のみならず救助犬もストレスを発散できるよう休憩や排便等を行う機会を設けた。北川中学校での活動時に、付近の駐車スペースに BoO（指揮本部）を設営した。

（2） 安全管理

本派遣では中国側の治安状況に問題が無かったこと、また中国人民解放軍が活動を行っているという状況により一般治安悪化等によるセキュリティの問題は起こりえなかった。しかしながら、夜間移動のリスクや堰止湖決壊情報等による 2 次災害のリスクは常に存在しており、中国側と常に十分情報共有をした上で、活動及び移動実施の判断を行った。

（3） 業務環境整備

通信については現地携帯電話の回線が活用できたことから、携帯電話と無線により通信環境を整備した。また、本部には衛生電話、データ通信環境、飲料、食糧、休憩所の設置を行った。活動サイトには簡易トイレを設置した。

（4） 生活環境整備

飲料及び食事については、携行品及び現地調達にて十分提供することが出来た。活動サイトでの宿泊については、十字テントとロッジテントで隊員が休息できるよう環境整備を行った。

（5） 現地調達

現地においては、ガソリン・エンジンオイル、携帯電話、食糧・水、消毒薬、洗浄用水、防塵マスク、遺体袋等の調達を行った。

7. 携行資機材

今回の救助チームでは通常の中隊セット、小隊セット等を携行した。ただし、第 1 陣と第 2 陣に別れて派遣されたため、第 1 陣については活動初期で特に必要となる資機材（捜索機材、救助機材（エンジン付ものを除く)、ストレッチャー等）を携行し、残りの資機材は第 2 陣が携行することとした。

携行資機材のセット名及び主な梱包内容は次のとおり。

セット名	資機材梱包内容
中隊セット	地中音響探知機セット 削岩機セット（ピオニア、ピコ） レスキューツール（パワーユニット、スプレッダー、カッター、ラムシリンダー) 電動ハンマードリル・セット
小隊セット	ファイバースコープ ボーカメセット チェーンソーセット エンジンカッターセット 縛帯セット ワイヤー梯子 ロープセット チルホールセット 担架セット ストライカーセット 山文救助セット 投光器セット コードリール 燃料携行缶 工具セット 手袋／マスク・セット ランプセット テント 調理セット ガス検知器セット
医療班資機材セット	蘇生用資機材、外傷処置セット、衛生材料等
生活資機材	日用品セット 野営セット 折り畳み式テーブル・チェア 発電機 投光器 ガソリン缶 浄水器 ブルーシート 簡易トイレ 雨着 シュラフ 食料品セット テント（十字型テントセット、ワンタッチタープ、ロッジ型テント）

8. 中国政府への報告書

2008 年 5 月 20 日

中华人民共和国外交部
四川省人民政府

国际紧急援助队搜救队
团长　　小泉　崇

报告书

关于 2008 年 5 月 12 日 14 点 28 分发生在中国西部的大地震，日本政府经过与中国政府协商，根据国际紧急援助队派遣法，决定于同年 5 月 15 日派遣救助生命的国际紧急援助队搜救队（以下称队伍）。

在此，在同援助队活动结束之际，作如下报告。

记

１．派遣期间：　2008 年 5 月 15 日至 5 月 21 日
２．派遣队伍名及人数：国际紧急援助队搜救队 61 名（队员名单后附）
３．活动概要：

首先，我们赶往中方所指示的四川省青川县关庄镇，实际确认了受灾情况。但结果是当地由于山体滑坡，受害者都深埋在滑坡地里，因此判断本队伍在此进行活动非常困难，在对当地居民说明情况的基础上，决定从此地转移。

在转移地四川省青川县乔庄镇，对倒塌的居民住地进行了搜索活动，发现并收容 2 名（均死亡。母亲及婴儿）遗体。

之后，再次转移到四川省北川县，在北川第一中学校继续进行了搜救活动，发现并收容了 13 名（均死亡。男性 6 名，女性 7 名）遗体的同时，其他 5 名遗体的收容委托给其他队伍。还有，在同县市区的办公楼，发现 1 名（死亡。女性），在北川县医院发现 1 名（死亡。女性），收容遗体委托给其他队伍。

本次派遣的队伍是首次派遣到中国的，队伍在北川第一中学校的搜救工作中，与北京消防队及四川省绵阳市消防队，三方鼎力合作进行了救助活动，在这一点来看，认为本次搜救活动是非常有效和非常有意义的。

还有，在青川县乔庄镇彻夜进行的救助活动当中，从北京赶过来的三名青年志愿者利用自己的车辆支援搜救队员移动的情况等，与中国市民共同进行救助活动的场面是非常值得一提的。

在对本次遭到地震灾害的中国政府及中国国民表示深情的哀悼心情的同时，在中国外交部李参赞的现场指导下，对本次救助活动给予大力支持和协作的四川省人民政府外事办公室，绵阳市人民政府，青川县人民政府，以及各方面的相关人员表示衷心的感谢。

以　上

后附：国际紧急援助队搜救队队员名单

（日本語訳）

平成 20 年 5 月 20 日

中華人民共和国外交部
四川省人民政府

国際緊急援助隊救助チーム
団長　　小泉　崇

報告書

2008 年 5 月 12 日 14 時 28 分に発生した中国西部大地震につき、日本国政府は中華人民共和国政府と協議の上、国際緊急援助隊派遣法に基づき、同年 5 月 15 日、人命救助にかかる国際緊急援助隊救助チーム（以下チーム）の派遣を決定した。

今般、同援助隊の活動終了に当たり、以下のとおり報告する。

記

１．派遣期間：　2008 年 5 月 15 日より 5 月 21 日まで
２．派遣チーム名及び人数：国際緊急援助隊救助チーム 61 名（メンバーリスト別添）
３．活動概要：

まず、中国側から指示のあった四川省青川県関庄鎮へ急行したが、被災状況を実際に確認した結果、大規模な土砂崩れにより被災者が地中深くに埋まっていることから、当チームによる活動展開は困難と判断し、その旨を地元住民へも説明の上、同所から転進した。

転進先の、四川省青川県喬庄鎮において倒壊した住居跡を捜索し、2 名（いずれも死亡。母親と乳児）を発見・収容した。

その後、四川省北川県へ更に転進し、北川第一中学校において捜索・救助活動を継続し、13 名（いずれも死亡。男性 6 名、女性 7 名）を収容するとともに、他５名の収容を他隊へ依頼した。また、同県市街地のオフィスビルにおいて１名（死亡。女性）、北川県病院において１名（死亡。女性）を発見し、収容を他隊へ依頼した。

今回のチーム派遣は中国に対する初めての派遣であるとともに、北川第一中学校においては北京消防隊および四川省綿陽市消防隊との三方が力を合わせて救出活動を展開することができた点においても、非常に効果的かつ意義深い活動であったと考える。

また、青川県喬庄鎮における夜を徹しての救助作業に際しては、北京から駆けつけた青年ボランティア 3 名が自らの車を用いて隊員の移動支援を行うなど、中国市民との共同活動の場面が見られたことも特筆すべき点である。

今回の地震に見舞われた中国政府および中国国民の皆様に対し、心より哀悼の意を表するとともに、中国外交部李参事官の現場指導の下、今回の救助活動に対して多大な支持・協力をいただいた四川省人民政府外事弁公室、綿陽市人民政府、青川県人民政府等、各方面の関係者に対して心より感謝申し上げる。

以　上

別添：国際緊急援助隊救助チームメンバーリスト

報告書別添

日本国際緊急援助隊派遣者名簿

	所属	氏名	性別	任務
1	外務省	小泉　崇（ｺｲｽﾞﾐ　ﾀｶｼ） KOIZUMI　TAKASHI	男	団長
2	国際協力機構（JICA）	藤谷　浩至（ﾌｼﾞﾔ　ｺｳｼﾞ） FUJIYA KOJI	男	副団長
3	青年海外交流協会（JOCA）	鈴木　諭（ｽｽﾞｷ　ｻﾄｼ） SUZUKI SATOSHI	男	業務調整員
4	都立広尾病院	中島　康（ﾅｶｼﾞﾏ　ﾔｽｼ） NAKAJIMA YASUSHI	男	救助チーム 医療班
5	奈良医科大学	畑　倫明(ﾊﾀ　ﾐﾁｱｷ) HATA MICHIAKI	男	救助チーム 医療班
6	愛知医科大学病院	川谷　陽子（ｶﾜﾀﾆ　ﾖｳｺ） KAWATANI YOKO	女	救助チーム 医療班
7	千里救命救急センター	谷　暢子(ﾀﾆ　ﾏｻｺ) TANI MASAKO	女	救助チーム 医療班
8	JICA	糟谷　良久（ｶｽﾔ　ﾖｼﾋｻ） KASUYA YOSHIHISA	男	業務調整員
9	JOCA	市原　正行（ｲﾁﾊﾗ　ﾏｻﾕｷ） ICHIHARA MASAYUKI	男	業務調整員
10	JOCA	藤巻　三洋（ﾌｼﾞﾏｷ　ﾐﾂﾋﾛ） FUJIMAKI MITSUHIRO	男	業務調整員
11	JICA 中国事務所	林　宏之（ﾊﾔｼ　ﾋﾛﾕｷ） HAYASHI HIROYUKI	男	業務調整員
12	警察庁	髙瀬　初雄（ﾀｶｾ　ﾊﾂｵ） TAKASE HATSUO	男	副団長
13	警察庁	山根　英樹（ﾔﾏﾈ　ﾋﾃﾞｷ） YAMANE HIDEKI	男	通信担当
14	警察庁	蟹江　伸一（ｶﾆｴ　ｼﾝｲﾁ） KANIE SHINICHI	男	通信担当
15	警視庁	菅原　健一（ｽｶﾞﾊﾗ　ｹﾝｲﾁ） SUGAHARA KENICHI	男	救助隊員
16	警視庁	齊藤　昌巳（ｻｲﾄｳ　ﾏｻﾐ） SAITO MASAMI	男	小隊長
17	警視庁	村上　光志（ﾑﾗｶﾐ　ﾐﾂｼ） MURAKAMI MITSUSHI	男	ハンドラー
18	警視庁	小松　就正（ｺﾏﾂ　ﾅﾘﾏｻ） KOMATSU NARIMASA	男	ハンドラー レスター号
19	警視庁	能祖　貴洋（ﾉｿ　ﾀｶﾋﾛ） NOSO TAKAHIRO	男	ハンドラー クラム号
20	警視庁	鶴川　浩司（ﾂﾙｶﾜ　ｺｳｼﾞ） TSURUKAWA　KOJI	男	ハンドラー ハデバルト号
21	警視庁	長谷川　博宗（ﾊｾｶﾞﾜ　ﾋﾛﾑ） HASEGAWA HIROMU	男	隊員
22	警視庁	井戸沼　聡（ｲﾄﾞﾇﾏ　ｻﾄｼ）	男	隊員

		IDONUMA SATOSHI		
23	警視庁	田村　浩一（ﾀﾑﾗ　ｺｳｲﾁ） TAMURA KOICHI	男	隊員
24	警視庁	本橋　茂仁（ﾓﾄﾊｼ　ｼｹﾞﾋﾄ） MOTOHASHI SHIGEHITO	男	隊員
25	警視庁	實川　真輔（ｼﾞﾂｶﾜ　ｼﾝｽｹ） JITSUKAWA SHINSUKE	男	隊員
26	警視庁	山田　拓利（ﾔﾏﾀﾞ　ﾋﾛﾄｼ） YAMADA HIROTOSHI	男	隊員
27	警視庁	杉本　健太（ｽｷﾞﾓﾄ　ｹﾝﾀ） SUGIMOTO KENTA	男	隊員
28	警視庁	齊藤　浩一（ｻｲﾄｳ　ｺｳｲﾁ） SAITO KOICHI	男	隊員
29	警視庁	古市　達也（ﾌﾙｲﾁ　ﾀﾂﾔ） FURUICHI TATSUYA	男	隊員
30	警視庁	田浪　明哲（ﾀﾅﾐ　ﾒｲﾃﾂ） TANAMI MEITETSU	男	隊員
31	警視庁	奥西　俊郎（ｵｸﾆｼ　ﾄｼﾛｳ） OKUNISHI TOSHIROH	男	隊員
32	消防庁	村岡　嗣政（ﾑﾗｵｶ　ﾂｸﾞﾏｻ） MURAOKA TSUGUMASA	男	副団長
33	消防庁	原　修（ﾊﾗ　ｵｻﾑ） HARA　OSAMU	男	中隊長
34	消防庁	松井　晶範（ﾏﾂｲ　ｱｷﾉﾘ） MATSUI AKINORI	男	中隊長
35	消防庁	島田　一郎（ｼﾏﾀﾞ　ｲﾁﾛｳ） SHIMADA ICHIRO	男	小隊長
36	消防庁	田中　一嘉（ﾀﾅｶ　ｶｽﾞﾖｼ） TANAKA KAZUYOSHI	男	隊員
37	消防庁	吉樂　隆男（ｷﾁﾗｸ　ﾀｶｵ） KICHIRAKU TAKAO	男	隊員
38	消防庁	小野　智木（ｵﾉ　ﾄﾓｷ） ONO　TOMOKI	男	隊員
39	消防庁	柴田　寛之（ｼﾊﾞﾀ　ﾋﾛﾕｷ） SHIBATA HIROYUKI	男	隊員
40	消防庁	加藤　哲（ｶﾄｳ　ﾃﾂ） KATO　TETSU	男	隊員
41	消防庁	原　光生（ﾊﾗ　ﾐﾂｵ） HARA　MITSUO	男	隊員
42	消防庁	間瀬　錦司（ﾏｾ　ｷﾝｼﾞ） MASE KINJI	男	隊員
43	消防庁	小石　英次（ｺｲｼ　ｴｲｼﾞ） KOISHI EIJI	男	隊員
44	消防庁	松岡　悟（ﾏﾂｵｶ　ｻﾄﾙ） MATSUOKA SATORU	男	隊員
45	消防庁	高橋　昌樹（ﾀｶﾊｼ　ﾏｻｷ） TAKAHASHI MASAKI	男	隊員

46	消防庁	大川　雅史（ｵｵｶﾜ　ﾏｻｼ） OKAWA MASASHI	男	隊員
47	消防庁	橋本　智也（ﾊｼﾓﾄ　ﾄﾓﾔ） HASHIMOTO TOMOYA	男	隊員
48	消防庁	伊藤　隆宏（ｲﾄｳ　ﾀｶﾋﾛ） ITO TAKAHIRO	男	隊員
49	海上保安庁	大河内　克郎（ｵｵｶﾜﾁ　ｶﾂﾛｳ） OKAWACHI KATSURO	男	副団長
50	海上保安庁	石塚　智幸(ｲｼﾂﾞｶ　ﾄﾓﾕｷ) ISHIZUKA TOMOYUKI	男	小隊長
51	海上保安庁	中野　剛二(ﾅｶﾉ　ｺｳｼﾞ) NAKANO KOJI	男	隊員
52	海上保安庁	中井　一陽(ﾅｶｲ　ｶｽﾞｱｷ) NAKAI KAZUAKI	男	隊員
53	海上保安庁	横村　学(ﾖｺﾑﾗ　ﾏﾅﾌﾞ) YOKOMURA MANABU	男	隊員
54	海上保安庁	江口　康平(ｴｸﾞﾁ　ｺｳﾍｲ) EGUCHI KOHEI	男	隊員
55	海上保安庁	天方　直人(ｱﾏｶﾀ　ﾅｵﾋﾄ) AMAKATA　NAOHITO	男	隊員
56	海上保安庁	野口　建太朗（ﾉｸﾞﾁ　ｹﾝﾀﾛｳ） NOGUCHI KENTARO	男	隊員
57	海上保安庁	阿部　直彦(ｱﾍﾞ　ﾅｵﾋｺ) ABE NAOHIKO	男	隊員
58	海上保安庁	内海　哲也(ｳﾁｳﾐ　ﾃﾂﾔ) UCHIUMI TETSUYA	男	隊員
59	海上保安庁	楢崎　新(ﾅﾗｻﾞｷ　ｱﾗﾀ) NARAZAKI ARATA	男	隊員
60	海上保安庁	山下　浩輔(ﾔﾏｼﾀ　ｺｳｽｹ) YAMASHITA KOSUKE	男	隊員
61	海上保安庁	川上　幸一郎(ｶﾜｶﾐ　ｺｳｲﾁﾛｳ) KAWAKAMI KOICHIRO	男	隊員

現地支援

1	在中国日本国大使館	山本　恭司（ﾔﾏﾓﾄ　ﾔｽｼ） YAMAMOTO YASUSHI	男	現地支援要員
2	在中国日本国大使館	又平　　広（ﾏﾀﾋﾗ　ﾋﾛｼ） MATAHIRA HIROSHI	男	現地支援要員
3	在中国日本国大使館	西島　和彦（ﾆｼｼﾞﾏ　ｶｽﾞﾋｺ） NISHIJIMA KAZUHIKO	男	現地支援要員
4	在香港日本国総領事館	丸山　浩一（ﾏﾙﾔﾏ　ｺｳｲﾁ） MARUYAMA KOICHI	男	現地支援要員
5	JICA 中国事務所	藤本　正也（ﾌｼﾞﾓﾄ　ﾏｻﾔ） FUJIMOTO MASAYA	男	現地支援要員
6	JICA 中国事務所	林　哲浩（ﾘﾝ　ｼﾞｬｰﾊｵ） LIN ZHEHAO	男	現地支援要員

第三章．医療チーム

1.活動概要

（1）活動日程

月　日	時間	活動内容	場所
5月20日　(火)	18:25 22:50 23:25	成田発(JL8879) 成都着 空港待合室にて救助チーム医療班との意見交換	成都
5月21日　(水)	0:20 1:20 10:50 13:45 15:00 16:30 22:15 22:45	ホテルに移動(四川賓館) 中国側と協議 成都市第一人民病院の見学、意見交換 全体ミーティング 中国側との協議 全体ミーティング 四川大学華西病院の見学（一部隊員による） NGO海外災害援助市民センターとの意見交換 全体ミーティング（活動場所を華西病院に確定）	成都
5月22日　(木)	9:20 10:40 11:10 12:40 14:00 15:45 18:20 20:00	華西病院との会議 華西病院内の見学 ＩＣＵ見学 活動拠点を四川大学華西病院に決定 医療チームの活動開始 本部テント立ち上げ 活動終了 全体ミーティング	成都
5月23日　(金)	8:00 9:00 12:00 ごろ 16:00 18:00 19:00	活動開始 記者ブリーフィング（田尻団長、小倉副団長） JICA中国事務所　藤本次長撤退 記者ブリーフィング（田尻団長、長谷川隊員） 活動終了 全体ミーティング	成都
5月24日　(土)	8:00 9:00 10:00 10:10 12:00 ごろ 14:20 15:30 16:00 18:00 18:50	活動開始 病院側担当者と打合せ 記者ブリーフィング（田尻団長） 院内巡回 四川賓館内の詰所撤収→本部テントに集約 JICA中国事務所桑内、馬理所員撤退、植村、李所員と交代 NHK取材対応（長谷川隊員、石井隊員） 温家宝首相会見 記者ブリーフィング（田尻団長、疋田隊員） 活動終了 全体ミーティング	成都

5月25日　(日)	8:00 12:00 ごろ 14:30 16:00 18:00 18:50	活動開始 JICA中国事務所　邢軍所員撤退 院内巡回（小倉副団長） 記者ブリーフィング（田尻団長、高田隊員、家田隊員） 活動終了 全体ミーティング	成都
5月26日　(月)	7:30 8:00 9:00 10:25 10:50 11:45 16:00 18:00 19:35	透析、放射線班活動開始 活動開始 透析室にて症例検討会(小倉副団長) 院長代理との協議（団長、副団長、石井、佐藤） 加藤副団長、小倉医師、打出医師整形外科にて打ち合わせ 供与資機材仕分け（市原、石井） 衛生局員との打合せ(団長) 四川省外事弁公室、唐宏副主任来訪 活動終了 全体ミーティング	成都
5月27日　(火)	7:30 8:00 9:30 14:20 14:40 18:00 19:00	透析、放射線班活動開始 活動開始 団内ミーティング（団長、副団長、小倉、等々力、森野、佐藤） 供与資機材に関する団内打ち合わせ 供与資機材に関する胡担当看護師と打ち合わせ 活動終了 全体ミーティング	成都
5月28日　(水)	8:00 10:20 11:10 12:45 18:00 18:30 20:20 20:30	活動開始 団内ミーティング（団長、副団長、小倉、等々力、森野、佐藤） 団内ミーティング（団長、副団長、小倉、森野、石井、佐藤、西） 高強衛生部副部長と面談（団長、小倉） 都江堰への視察（団長、森野、打出、石井、日下部、佐藤） 　１）ドイツ赤十字活動サイト 　２）市内避難所 活動終了 四川大学華西病院主催の海外医療チーム向け食事会 ホテル着 全体ミーティング	成都
5月29日　(木)	8:00 15:30 18:00 19:00 19:40	活動開始 5/30の講演の事前打合せ 活動終了 全体ミーティング 都江堰視察報告	成都

5月30日　(金)	8:00 9:00 9:55 14:15 15:00 18:00 19:20	活動開始 院長とのミーティング（団長、副団長、小倉） 楊外交部長来訪 講演会場準備 「災害時における日本の急性期医療」講演（森野、石井）第二病棟３Ｆ会議室１ 活動終了 ボランティア通訳慰労会	成都
5月31日　(土)	8:00 9:30 18:00 19:00	活動開始 資機材引渡しに関する胡副教授との打合せ 活動終了 全体ミーティング	成都
6月1日　(日)	9:00 10:00 10:30 17:30 18:00 20:30 21:00	報告会準備 中国側への活動報告、資機材の引渡し式 テント撤収 資機材引渡し 四川省側への活動報告 四川省招待の食事会 記者会見 日本への返送機材積み込み	成都
6月2日　(月)	6:00 8:00 10:30 11:20 12:00 13:10 16:20 20:20 21:00 21:50	ホテル発 成都発(CA4113) 北京着 大使公邸へ移動 昼食会 空港へ移動 北京発(JL782) 成田着 解団式 解散	

※全体ミーティングのほか、各班で個別のミーティングを適宜開催。

（2）チーム構成

ア．メンバーリスト

No.	氏名	所属先	指導科目
1	田尻　和宏	外務省アジア大洋州局中国課	団長
2	加藤 俊伸	独立行政法人国際協力機構　東・中央アジア部東アジア課	副団長（業務調整）
3	小倉　健一郎	相原第二病院	副団長（救急医療）
4	打出　啓二	下地診療所	救急医療
5	長谷川　泰三	大阪府済生会千里病院千里救命救急センター	救急医療
6	森野　一真	山形県立救命救急センター	救急医療
7	石井　美恵子	社団法人日本看護協会　看護研修学校	救急看護（チーフナース）

8	家田　由美子	埼玉医科大学総合医療センター	救急看護
9	大山　太	高崎健康福祉大学	救急看護
10	高田　洋介	兵庫県立大学	救急看護
11	高野　博子	国立長野病院	救急看護
12	疋田　直子	水戸済生会総合病院	救急看護
13	宮本　純子	兵庫県災害医療センター	救急看護
14	森田　加南	狭山神経内科病院	薬剤管理
15	藤本　幸宏	国立国際医療センター	医療調整
16	金子　万幾子	独立行政法人国立病院機構災害医療センター	医療調整
17	日下部　雅之	香取広域市町村圏事務組合消防本部	医療調整
18	佐々木　恒太	医療法人社団母恋日鋼記念病院	医療調整
19	山﨑　裕章	医療法人雪ノ聖母会　聖マリア病院	医療調整
20	佐藤　仁	独立行政法人国際協力機構　国際緊急援助隊事務局　研修・訓練課	業務調整
21	市原　正行	社団法人青年海外協力協会	業務調整
22	野田　祐作	社団法人青年海外協力協会	業務調整
23	鈴木　由亮	社団法人青年海外協力協会	業務調整

イ．隊員配置表

	救急 (第１病棟 1F)	ICU (第１病棟 11F)	新 ICU (第４病棟 8F)	透析 (第３病棟 2F)	産科 (第２病院 11F)	放射線 (第１病棟 2F)	薬剤 (第１病棟 1F)	整形外科 (第１病棟 7F)	本部
5月22日	打出(D) 森野(D) 大山(N) 宮本(N) 森田(M) 藤本(CM) 金子(CM) 日下部(CM) 山崎(CM)	家田(N) 高田(N)		高野(N) 佐々木 (CM)	長谷川 (D)(小児 科) 疋田(N)				田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)
	李　忠金 王　俊	李　清 楊　海燕		張　振喜 胡　翎	万　紅 薫　広芳				劉　暉
5月23日	打出(D) 森野(D) 大山(N) 宮本(N) 森田(M) 藤本(CM) 金子(CM) 日下部(CM) 山崎(CM)	家田(N) 高田(N)		高野(N) 佐々木 (CM)	長谷川 (D)(小児 科) 疋田(N)				田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)
	李　忠金 王　俊	李　清 楊　海燕		張　振喜 胡　翎	万　紅 薫　広芳				劉　暉

5月24日	打出(D) 森野(D) 大山(N) 宮本(N) 藤本(CM) 金子(CM) 森田(M) 日下部(CM) 山崎(CM)	家田(N) 高田(N)		長谷川(D) 高野(N) 佐々木 (CM)	疋田(N)	藤本(CM) 金子(CM)	森田(M)		田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)
	李　忠金 劉　愛民 王　俊 薫　広芳	李　清 楊　海燕		張　振喜 宋　之乙 胡　翎	万　紅	賴　明	于　殿文		劉　暉 李　達章
5月25日	打出(D) 森野(D) 日下部(CM) 山崎(CM)	家田(N) 高田(N)	大山(N) 宮本(N)		疋田(N)	藤本(CM) 金子(CM)			田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)
	李　忠金 劉　愛民 王　俊 呂　旭 張　振喜 (AM) 于　殿文	李　清		宋　之乙	万　紅	賴　明			劉　暉 李　達章
5月26日	打出(D) 森野(D) 日下部(CM) 山崎(CM)	家田(N) 高田(N)	大山(N) 宮本(N)	長谷川(D) 高野(N) 佐々木 (CM)	疋田(N)	藤本(CM) 金子(CM)	森田(M)		田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)
	李　忠金 王　俊 呂　旭	李　清	董　広芳 楊　海燕	張　振喜 宋　之乙 (AM)	万　紅	賴　明	于　殿文	宋　之乙 (PM)	劉　暉 李　達章

5月27日	打出(D) 長谷川(D) 日下部(CM) 山崎(CM)	家田(N) 高田(N)	大山(N) 宮本(N)	高野(N) 佐々木(CM)	疋田(N)	藤本(CM) 金子(CM)	森田(M)	小倉(M) 森野(D)	田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 石井(N)　野田(C) 鈴木(C)
	李　忠金 王　俊 呂　旭	李　清	董　広芳 楊　海燕	張　振喜 李　達章	万　紅	賴　明	于　殿文		劉　暉
5月28日	森野(D)	長谷川(D)		高野(N) 佐々木(CM)	疋田(N)	藤本(CM) 金子(CM)	森田(M)		田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)
		宋　之乙		張　振喜 李　達章	万　紅	賴　明	于　殿文		劉　暉
5月29日	打出(D) 森野(D) 日下部(CM) 山崎(CM)	長谷川(D) 家田(N) 高田(N)	大山(N) 宮本(N)	高野(N) 佐々木(CM)			森田(M)		田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)
	李　忠金 王　俊	李　清 宋　之乙	董　広芳 楊　海燕	張　振喜 李　達章			呂　旭		劉　暉
5月30日	打出(D) 森野(D) 日下部(CM) 山崎(CM)	長谷川(D) 家田(N) 高田(N)	大山(N) 宮本(N)	高野(N) 佐々木(CM)	疋田(N)	藤本(CM) 金子(CM)	森田(M)		田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)
	李　忠金 王　俊 呂　旭	李　清	董　広芳 楊　海燕	張　振喜 李　達章	万　紅	賴　明	于　殿文		劉　暉 宋　之乙
5月31日	打出(D) 森野(D) 日下部(CM) 山崎(CM)	長谷川(D) 家田(N) 高田(N)	大山(N) 宮本(N)	高野(N) 佐々木(CM)	疋田(N)	藤本(CM) 金子(CM)			田尻団長　佐藤(C) 加藤副団長　市原(C) 小倉(M)　野田(C) 石井(N)　鈴木(C)

	李　忠金 王　俊 呂　旭 于殿文	李　清	董　広芳 楊　海燕	張　振喜 李　達章	万　紅	頼　明			劉　暉 宋　之乙

（D：医師、N：看護師、M：薬剤師、CM：医療調整員、C：業務調整員、上段：隊員　下段：通訳）

2. 活動報告

（１）団長総括

団長　外務省中国課　田尻和宏

５月１２日、中国四川省で発生した大地震による負傷者救済のため派遣された国際緊急援助隊医療チームは、被災地に近い場所で初期治療を行うという従来の活動スタイルとは異なり、中国側の要望を踏まえて、被災地から離れた成都市の大規模病院（四川大学華西病院）の中で活動を行うことになった。それに伴い、医療チームとしての能力を十分に発揮することができるのか、中国側医療スタッフとの間でしっかりとしたコミュニケーションがとれるのか、日本側医療スタッフはどの分野でどの範囲までの医療活動を行うことが出来るのか等につき、当初、心配もあったが、各隊員の高い志気とチームワークにより、また、中国側、特に華西病院側の積極的な協力もあり、その任務を達成することが出来た。他方で、中国側のニーズを事前に的確に把握し、本邦出発前に活動サイトが決まっていれば、より迅速、効果的な活動を行うことが出来たものと考えられる。

医療チームの隊員は、救急外来、放射線、ＩＣＵ、血液透析、産科、薬剤等の分野に分かれて中国側医療スタッフを支援する形で１１日間にわたって活動を行ったが、救急医療の高い技術と豊富な知識及び誠実な活動振りは患者及びその家族、病院関係者等から高い評価を得た。

活動期間中、慰問のため華西病院を訪れた温家宝総理、楊潔チ外交部長等より、医療チームの派遣について日本政府及び国民に対して謝意表明があった。また、毎日、多数の市民が病院敷地内に設置した後方支援用テントを訪れて感謝と激励の言葉を述べた。

今次活動に対しては、日中両国の多数のメディアにより積極的な取材活動が行われたが、中国においては中国が困難な時期に日本が国際緊急援助隊を派遣してくれた等の肯定的な報道が多くなされ、救助チーム及び医療チームの派遣・活動が日中両国民間の相互理解・相互信頼の強化及び中国国民の友好的な対日感情の醸成に資したとの評価が高まった。

今次活動の中で、多くの中国側関係者の積極的な協力を得た。外交部から派遣された参事官は、医療チームと四川省政府等との間のリエゾンとして活躍し、華西病院の院長、看護部長及び連絡役の副教授等は、医療チームの活動が円滑に行われるようにいろいろと配慮してくれた。また、ボランティアを含めた中国人通訳の貢献にも大きなものがあった。

医療チームは、最後まで全員が一致協力し合って活動することができたが、その中で、JICAの加藤副団長は、チームの活動全体に対する細かい目配りをし、また、日中両国のメディアの取材、ブリーフのアレンジ等をこなし、活動への多大な貢献を行った。また、小倉副団長は、緊急医療活動についての豊富な経験を有し、通常の医療業務をこなす一方、チーム内の医療関係者の中心的存在としての役割を果たした。医療関係隊員は、それぞれの活動現場で日々努力を重ねて中国側スタッフ及び患者との間で信頼関係を築き上げて活動の範囲を拡げ中国側からも高い評価を得た。最後に、業務調整隊員のプロ意識に基づいた精力的な仕事ぶりに対して、心から感謝したい。

（2）広報・メディア対応

副団長　加藤　俊伸

中国への国際緊急援助隊の派遣については日本及び中国のマスメディアの関心が非常に高かった。多数の日本のメディアから活動の進捗等について取材希望があり、活動の進捗や要望に合わせて記者ブリーフ、現場テント前での団長取材、団員の活動報告、病院内の代表取材、地方紙などの個別取材、活動状況の貼り出しなど、多様な対応を日に数回実施した。また、中国側要望の患者への配慮などから病棟内の取材は２度の代表取材にて対応を行ったが、敷地内についてはとくに制限がなかったことから、団員や中国側関係者への取材も多数行われた。中国のメディアについては、テントへの飛込み取材が日に３～５件程度あり、比較的分散されて実施された。

ア．広報

活動数日後から、緊急援助隊のイラン、パキスタンでの活動や華西病院での活動の写真をテント前に掲示するとともに、中国での緊急援助隊の活動概要を中国語文書で作成し、テント前で関心のある中国の人々に広報した。後半には日に百人程度の人々が関心を持って写真を見ていく状況が続き、激励や感謝の言葉をいただいた。

イ．日本のメディアへの取材対応

（ア）　現場（成都）取材に訪れた日本メディア

プレス　共同通信、時事通信、日本経済新聞、朝日新聞、読売新聞、産経新聞、東京新聞、毎日新聞、北海道新聞、西日本新聞

テレビ　NHK、日本テレビ、TBS、テレビ朝日、フジテレビ、テレビ東京、関西テレビ、

（イ）　全体の主な対応状況は以下の通り。

20 日	午後	成田結団式前後の現場対応取材（団長、加藤副団長他）
	夜	成都空港での現場対応取材（団長）
21 日	午前	成都市第一人民病院敷地内での取材（団長、先方院長等）
	夜	ホテルでの現場対応取材（団長）
22 日	午前	四川大学華西病院　院長説明取材
	午後	ホテルでの記者ブリーフ（団長、加藤副団長）活動場所決定説明
		テント設営取材
		救急外来活動状況代表取材
23 日	午前	テント前現場対応取材（団長）
	午後	長谷川医師活動説明
24 日	午前	テント前現場対応取材（団長）
	午後	疋田助産師活動説明
25 日	午前	24 日活動状況貼り出し
		病院側受入れ責任者　胡副教授取材
	午後	高田、宮本看護師 ICU 活動説明
26 日	午前	25 日活動状況貼り出し
27 日	午前	26 日活動状況貼り出し
	午後	透析室代表取材
28 日	午前	27 日活動状況貼り出し
29 日	午前	28 日活動状況貼り出し
		都江堰の中徳紅十字会野戦医院、幸福路仮設住宅内診療所等視察を含む
30 日	午前	29 日活動状況貼り出し
	午後	「災害時における日本の急性期医療」講演取材公開

31 日　午前　30 日活動状況貼り出し
1 日　午前　テント前での病院への報告取材公開
　　午後　四川省人民政府への報告取材公開
　　夜　記者ブリーフ（団長、小倉、加藤副団長）
2 日　昼　北京での現場対応取材（団長、小倉、加藤副団長）
　　夜　成田　解団式での現場対応取材（団長、小倉副団長他）

（ウ）　主な個別取材対応（事前にプレス担当を通じ依頼のあったもの）は以下の通り。

取材日	社名	取材方式	取材対応者
5 月 24 日 12：00	共同通信	インタヴュー	小倉副団長
5 月 23 日 12：30	西日本新聞社	インタヴュー	山崎隊員
5 月 23 日 16：00	北海道新聞	インタヴュー	佐々木隊員
5 月 23 日 21：20	山形新聞	電話取材	森野隊員
5 月 24 日 10：00	NHK	インタヴュー	胡秀英副教授
5 月 24 日 12：00	共同通信	インタヴュー	小倉副団長
5 月 24 日 16：40	フジテレビ	インタヴュー	植村所員
5 月 26 日 6：00	めざましテレビ	電話取材	田尻団長
	中日新聞	電話取材	田尻団長

ウ.　中国メディア

CCTV、CCTV２、CCTV 四川、成都テレビ、大連テレビ（電話取材）、四川新聞、香港文匯報、商務週刊、成都商報、中国衛生画報、中国医学論壇報等の取材に対し、団長、副団長で対応した。

エ.　課題と提言

日本のメディアの関心が高く、援助隊の移動にあわせて 30 名程のメディア関係者が同行することも多かった。また、メディア関係者は東京、北京、上海、香港、ソウル等の各地から取材に訪れていたため、幹事会社を決めることができず、大使館、総領事館、事務所の現地支援者の協力を得て、業務調整副団長が窓口として現場及び携帯電話等で対応した。また、メディア対応の方法などについて、JICA 広報室に夜間にも多くの照会をして確認した。以上の状況から、メディア対応の方法・方式などについて事前に研修やブリーフを受けることが重要であるとともに、多くのメディアが予想される場合には出発前にあらかじめ体制を確立していくことが肝要と考えられる。

（３）活動の特徴

副団長　小倉　健一郎　（救急医療）

今回の中国四川大地震に対する国際緊急援助隊医療チームの派遣は、発災より１週間を経過した時期となり、既に被災現場での医療ニーズは低減していた。そのような状況下で我々は多くの重症患者が運ばれていた成都市内の後方搬送病院の一つである、四川大学華西病院での支援活動を中国側より求められた。

援助隊の被災地での医療活動として、後方搬送病院(災害拠点病院)の支援は想定してはいたものの今回初めての試みということもあり、4300 床という巨大病院での活動を如何に行うかが大きなテーマとなった。

今回の後方病院支援においては、隊員をある程度分散させ、それぞれの専門に分かれて活動するというスタイルを採用した。当初は、救急外来、ＩＣＵ、透析、産科(小児科)に分かれて活動を開始し、その後放射線科、薬剤部も追加して支援活動を行った。

言葉の問題、不慣れなシステムの中に入っての活動、各々の部署での受け入れられ方・ニーズの違いなど、配属された部署によって活動の内容や成果は異なっていた。詳細については、各部署の隊員からの報告としてまとめた。

医療チーム全体として、10 日間で延べ約 1500 名の被災者の治療、レントゲン撮影、看護、透析などに関わり、さらには医療スタッフからの相談、講義や講演の要請に応えるなど、病院支援として一定の成果は挙げたものと考える。

搬送された被災患者の中では整形外科疾患が非常に多かったものの、華西病院には中国全土から 30 名以上の整形外科医師が応援に集まってきており、また待機手術のできる患者は主要都市の病院へ転送していたため、病棟・手術室においては医療チームの支援ニーズはほとんどなかった。後方病院支援としては、整形外科などの専門性に特化したチーム作りが有効と思われるが、今回の活動ではＩＣＵ等の看護部門での質の高いケアや放射線技師や臨床工学士、助産師の高い技能が評価されていた。今後の病院支援のあり方、選択肢の拡大につながる経験が得られたものと思われる。

（４）救急外来班

ア．　班の構成

医師	２名	森野　一真、打出　啓二
医療調整員	２名	山崎　裕章、日下部　雅之
通訳	３名	李　忠金、王　俊、呂　旭

イ．　活動場所

第一病棟の玄関前患者待ち受け、救急室１、救急室２、EICU(救急室 ICU)
患者の搬送の際の救急車と成都国際空港における救急搬送用航空機内

ウ．　中国側の人員体制

【医師】

●　勤務体制

（平時）19 名（研修医は除く）＋2 名（研修医）による 5 交代体制

１．8:00ー14:00　２．14:00ー22:00　３．16:00ー24:00　４．20:00ー4:00　５．24:00ー8:00

●　業務内容

・ 病歴聴取とカルテ記載
・ 採血、輸液、検査指示並びに指示書作成
・ 検査結果の評価
・ 緊急処置
・ 入院の決定と当該科コンサルト
・ EICU における患者管理
・ 1F 観察ベッド（隣接はしていない）における患者管理
・ 救急車同乗

【看護師】

●　勤務体制

（平時）看護師：56 名による３交代

8:00ー15:30　12 名、15:30ー22:00 12 名、22:00ー8:00　12 名

（災害時）看護師：各時間帯に 2 名程度追加

●　業務内容

・受付におけるトリアージ、病歴聴取、カルテ記載
・輸液路確保、採血（動脈採血を含む)、酸素投与
・モニタリング（心電図モニター、SpO2 モニターの装着)、心電図
・清拭
・搬送班の手配、救急車同乗

（参考）観察室：5 名（看護助手？）
勤務体制不明

【搬送担当】

●　勤務体制

人員 18 名　勤務体制は不明

●　業務内容

・ 病院玄関前患者待ち受けから救急室までの患者搬送
・ 救急室から検査室、入院病棟までの患者搬送
・ 患者搬送のためのエレベーター管理

【その他】
傷病者の家族は傷病者の搬送補助、薬剤購入とその搬送、紹介状や画像フィルムなどの必要資料の搬送、患者の精神的なケアを担っており、貴重な医療資源になっている。

エ. 活動内容

（ア） 病院玄関前での患者待ち受け

a.救急搬送されてきた傷病者の引き継ぎの補助

b.救急車から病院のストレッチャーへ患者の移動の補助

c.以下の感染予防[1]のためのトリアージや脱衣、救急室への患者搬送補助

（イ） 第 1 救急室（重傷 5 床）、第 2 救急室（その他 12 床）

日本側スタッフは中国側スタッフによる診療[2]の補助を行った。中国において病院内で医師が医療行為を行うためには事前申請が必要とのことであるが、中国政府が国外の医師の診療行為を認めるかどうかは不明であった。同時に今回中国に対する初めての支援であり、我々の診療能力等に関する情報を四川大学華西病院側も持ち合わせておらず、支援の程度に関する方針も決められず、そのような影響を受けざるを得なかった。また、言語の問題もある（中国語による記載）ため華西病院のカルテへの記載や、検査指示を出すまでには至らなかった。これらの制約により我々の活動も制限されたが、隊員と通訳の柔軟な対応によりある程度は診療支援ができたものと考える。看護師の静脈路確保と採血は中国側スタッフの指示を基に行うことができた。

（ウ） EICU（救急入院病棟 9 床）

EICU は緊急入院の対象となる傷病者の治療を行う。EICU に関して救急科責任者との正式な打合せが無かったため、数件の診療補助に留まった。

（エ） 広域航空医療搬送[3]

日本側スタッフは華西病院から成都国際空港までの患者搬送と、空港内での患者移動を行

---

[1] 感染予防：被災者の場合、医師が傷病者の状態を観察し、感染疑いがあれば「汚染区」に移動し脱衣の後に、創擦過によるグラム染色検体採取、創培養の後に創洗浄を行う。その後に救急室に搬送され診療を受ける。感染の疑いが無ければ「非汚染区」に移動し脱衣の後、救急室に搬送され診療を受ける。

[2] 救急外来診療の流れ：病院玄関前トリアージエリアから搬送された傷病者は、受付のトリアージナースまたは医師によって搬入する救急室を指定される。傷病者が搬入されると、看護師がモニタリングを開始し、必要あれば医師の指示により静脈路確保と採血が行われる。動脈血採血は第一選択が撓骨動脈で、次いで大腿動脈である。静脈路確保は中心静脈路も含まれているとのことであったが、今回の活動期間中には行われなかった。

医師は看護師から病歴聴取の結果を受けつつ診察を行い、必要あればレントゲン検査等の検査の指示を出し、カルテに記載する。超音波検査は国家資格を有する医師又は技師により救急室に隣接する超音波検査室で施行された。

検査室への移動及び検査室での傷病者の移動は搬送係と傷病者の家族が担当し、医師・看護師は関与しなかった。

医師は検査結果（採血、レントゲン検査画像など）を評価し、診断の後に当該科へコンサルトまたは入院指示、観察室への移動の指示を出す。重傷の場合は第 1 救急室を経由後、もしくは直接 EICU への入院となる。軽症に対する救急診療は隣接する一般診療外来へ患者が誘導される。

[3] 広域航空医療搬送：中国政府の災害医療政策は、急性期に被災地から直近の拠点医療機関へ重篤な傷病者を搬送することにあった。実際に 3 日以内に大半の重症患者は拠点病院に搬送されていた。全国から救急車を被災地内まで空輸、医療従事者は航空機もしくは鉄道により搬送され、被災地内並びに中核病院における医療支援活動が行われた。

5 月 23 日より華西病院から成都国際空港経由で省外への広域医療搬送が行われた。搬送先は南京、北京、広州、杭州、上海、雲南などであった。1 回の搬送患者数は 32～70 名で、1 日に 1～2 回あった。航空機は民間航空機を改造し、標準的な構成は（2 名×2 幅）×9 列＝計 36 名＋付き添い 36 名である。

った。患者搬送中は各地から救援に来たチームとの病院前救護等に関する情報の収集や交換ができた。

（オ）　医学的交流

中国（特に華西病院）の救急医療体制と日本の救急医療体制、特に、救急室における診療の実際について意見交換を行った。

華西病院では、外傷初期診療の教育プログラムやガイドラインは活用されていないため、外傷の初期診療における迅速簡易超音波検査法は行われていなかった。そこで、5 月 29 日に超音波科の医師とスタッフに Focused Assessment Sonography for Trauma（FAST）の指導を行った。

5 月 30 日に病院職員約 260 名を対象に「災害時の急性医療」についての講義を行った。中国で行われている医療と日本の医療との間で中国と共有可能な日本の経験を伝えることができた。

オ．成果

（ア）　救急室における診療活動

活動実績数を表 1 に示す。

表 1　患者数

救急外来	5 月										各部署総数
	22 日（木）	23 日（金）	24 日（土）	25 日（日）	26 日（月）	27 日（火）	28 日（水）	29 日（木）	30 日（金）	31 日（土）	
総患者数	280	247	278	316	379	300	0	308	379	26	867
うち災害関連患者数	84	43	50	52	78	16	0	31	49	20	339
関わった患者数	10	23	23	38 ＋α	67 ＋α	16 ＋α	0	19	30	20	125
意見交換・相談件数/対象者総数	2/6	3/8	3/12	2/10	2/7	2/8	0	3/10	5/15	4/18	28/99

（イ）　グラム染色並びに培養のための検体採取

汚染区（22 日午後～24 日）と救急室（25 日～31 日）にて、一日平均 5 件であった。

（ウ）　広域航空医療搬送

5 月 23 日

森野、打出、日下部、李（通訳）　直接搬送 4 名、患者移動指導 10 名

5 月 24 日

打出、王（通訳）　直接搬送 1 名

5 月 29 日

午前　森野、打出、日下部、山崎、王（通訳）　直接搬送 2 名

午後　小倉、日下部、山崎、高田、野田（調整）、李（通訳）直接搬送 2 名

カ．　課題

（ア）　支援の時期

可能な限り迅速に緊急援助隊が派遣できるような調整努力が必要であろう。

（イ）　被災国に関する事前調査の必要性

・日中間の医療面の違いを十分理解して、診療支援を行う必要がある。今回の経験は医療チームの病院支援の可能性を検討する上で重要なミッションであったと考える。病院支援を行うにあたり少なくとも以下の項目に関する知識が事前に必要である。

・支援を必要とする被災国の医療システムと法律の理解（主として医療行為をどこまで行うことができるのか、書類申請が必要なのかなど）

・支援される国の保険制度

・支援される国における医療職種の特殊性

　中国には救急救命士という職種が無い。

　看護師が初療の最初の大半を行う（動脈穿刺、中心静脈まで）

・診療体制の特殊性

　病院玄関前トリアージエリア以後の患者搬送員が存在した。

　看護師は患者の搬送、ケアに関しては関わりがほとんどない。

　搬送・移動から伝票、薬剤運び、清拭などなど、家族の介入が高い。

　救急外来に一人の患者に5～6名の家族が付き添い入室する。

・医師の診療の介入可能なレベル

　被災地内と病院内とではおのずとレベルと主体性が変化する

今回はこれらに関する情報がないまま活動に入ることになった。また診療方針への介入は、支援される国の医療事情、診療する担当医の意見を十分に尊重する必要がある。世界標準的診療や先進的な診療に関してはできるだけ代表的な文献や文献にアクセスする方法を提供するべきである。

（ウ）　支援を必要とする被災国への配慮と継続的な支援と研究への発展

今回の震災における外国からの支援の受け入れは中国側にとっても初めての経験であり、中国側への配慮を忘れることのないように心がけるべきである。また、今回の支援をきっかけに日中間はもちろんのこと、ひいてはアジアにおける災害医療支援システムの構築と継続的な支援システムへの発展を期待する。

（エ）　通訳者を交えての診療

国外の活動において言語の壁は大きく、通訳担当者の存在は必須であることは論を俟たないが、通訳者（特にボランティア）は例外を除き医療の現場での診療に携わった経験は無いと考えるべきである。

今回、以下のような問題点があった。

・活動開始前に接遇、病歴聴取、身体診察、諸検査に関して、通訳者へのブリーフィングがなかった。

・華西病院の医療システム（特に救急室）に関する情報共有がなされていなかった。

・医療従事者側が診療単位としてのペア（通常は医師と看護師）を決めなかったため、担当ボランティアが曖昧になり、誰が誰につくのか分からない状況に陥っていた。

・救急外来は一定の傷病者と関わる部門ではなく、次々に傷病者が流れてゆくため、流れに翻弄されることがあった。

・通訳者が興味のある場面や患者に引っ張られてしまい、診療の中断を余儀なくされた。

・通訳者が患者をみて心的外傷に陥る可能性もある。

（オ）　華西病院救急科との打合せ
時間的に救急科との打合せ時間がなく、救急科医師との情報共有に乏しく、細部に関するやり取りが少なかった。このため、医療ニーズの評価が難しかった。

（カ）　他の支援チームとの打合せ
華西病院には複数の応援隊が入っており、これらの隊との打合せはなかった。

（キ）　今回、活動場所が病院内であったため、薬の処方や手術などの処置はできないなど、法律や院内規定により活動に様々な制限があった。被災地近くで診療所を設営して日本のスタッフを中心に運営する場合と比較して、時には想定できない問題が数多く生じた。今後、様々な国で災害が起こることも予想され、その国の事情にあわせて日本の医療チームの派遣体制も柔軟に対応できるように考えなければならない。

（ク）　活動場所が華西病院救急外来に決定し、救急車搬入から診療室、CT、レントゲン室までの搬送に携わった。日本においてわずかな病院研修時と比較すると、震災に関連した感染症に対する院内搬入前の除染は今までなかったことであり、日本に帰ってからの災害時搬入前の対応について、今後検討の余地があると考える。また、フィールドでの活動とフィールド以外での活動に対応できる訓練も必要であると考える。

（ケ）　病院支援に関して
医療調整か専門技術（臨床検査）か、救急外来でのニーズ（病院として、また医療チームとして何を求めているのか）が十分把握できないまま活動を実施しなければならなかった。このことから何をどうしてよいか混乱した。病院支援を行う場合、特に今回のような病院の機能が維持されているような時には、活動開始前に十分協議を行い、チームとしてそれぞれの部署での方向性をしっかり見出しておくことが重要である。
通訳者は、こちらからの依頼を通訳するだけでなく、患者の様態について現地の医師、看護師と患者が話している内容を把握し、医療チームの医師や看護師等に伝えることが必要である。また医療チーム側もテントでの通訳とは違うことを認識し、通訳に患者の状況の把握を依頼することも必要である。
今回の活動で２事例の経験から気づいたことだが、被災患者の家族支援（病院内）も重要な課題として検討すべきである。

キ．教訓
（ア）　事前に支援する国と日本との歴史的関係の理解が不可欠である。
（イ）　事前に支援する国の医療制度、支援する病院の診療体制の理解が不可欠である。
（ウ）　医療チームの活動方針は支援国の需要の上に成り立つべきである。
（エ）　通訳担当者は診療を理解しているとは限らない。
（オ）　通訳はなくてはならない存在である。
（カ）　言葉が通じなくとも思いは伝わる。
（キ）　今回のような病院支援の場合、その病院のカルテを記入することは、よほどその国の言語に精通していなければ現実的には不可能と考えられ、現地の医師との共同作業により診療行為が行えると思われる。その場合の役割分担などについても、相手国の事情に合わせて事前に協議する必要があると思われる。
（ク）　成都市内の病院救急車はもちろん参加しているが、北京、天津の救急車まで参加し、民間航空機による全国の患者広域搬送システムが運用されている。　また 120 救急車システム（日本の 119）には１箇所に救急車が数十台、中規模病院は２台前後、華西病院は約 10 台の救急車があり、医師、看護師、運転手の３名でドクターカーが運用されている。日本では今現在運用されていないシステムであり、日本では医師数が

足りずドクターカーを運用できる施設が限られるため、救命士の処置拡大（CPA 以外の傷病者への点滴等）が必要である。

（ケ）　患者の搬送、救急処置、心のケアに関する知識と技術について、ある程度何でもできるように習得していることが求められる。

（コ）　医療チームとしては、支援方法の組み合わせを開発することが必要である。

ク．その他、エピソードなど

（ア）　広域医療搬送の際、救急科医師並びに看護部長をはじめとする華西病院関係者は日本の医療チームに配慮して、本来患者搬送すべき救急車を空港まで隊員を搬送するために救急車を手配してくれ、北京救急センター医師をはじめとする応援隊からも多大なる配慮を頂いた。故郷を離れて広域搬送される空港で、日本から救援に来たことを告げた私と握手した脊髄損傷の青年は涙を流していた。

中国の歴史の中で意義のある活動を行った日本の医療チームを一目この目で見ておきたいと、わざわざ重慶から応援のメッセージを持って来てくれた方がいた。

吉林省の中国人民解放軍医が最終日に本部を訪れ、挨拶をくれた。

（イ）　航空機搬送のための救急車に同乗した時、「都江堰在住で、街中を歩行中に地震が起こり、崩れた壁が左足にあたり左下腿骨粉砕骨折となった 50 歳男性患者」から話を聞いた。広州に航空機にて転院搬送されるとのことで、「広州には親戚などはなく、病院からの指示で転院させられ、手術予定は未定である」とのことであった。震災で混乱している状況とはいえ、身寄りのない別の土地への転院を余儀なくされる家族の気持ちを思うといたたまれないが、一方、国が主導して、より多くの患者に適切な治療を受けさせることができるようなシステムが構築されていることには感服させられた。

（ウ）　１台の救急車に座ることは可能であるが、歩行不能の患者が４名程度乗車し搬送されたことがあり、災害時の対応について考えさせられた。また地震から１９日後に救助され、自分たち以外の数十名が死亡した現場を目撃した夫婦の心のケアをどうしていくか、考えさせられた。

（エ）　震災後 19 日間山の上で避難生活をしていた患者が転送された。右手と左足に受傷していた。それほど大きな怪我ではないように見えた。19 日間傷口を水で洗っていたとのこと。この山の上には地震後 200 名以上が避難。怪我をしていない人たちは歩いて下山。しかし負傷し下山できなかった人たちはその場に残った（10 名くらい）。そして生存でき救助されたのはこの患者と奥さんだけのようであった。病院に搬送された時には奥さんは泣きどおしであった。「子供が未だ見つからない」とのことを伝えてくれた。しばらく声の掛けることができなかったが、気を取り戻し「病院に入ったことから安心して」を繰り返し伝えたことで安心したのか、顔が穏やかになり少し精神的に安定したように感じられた。

ケ．　華西病院の医療機器事情

（ア）　超音波診断装置供与にかかる調査

①　現状

超音波診断装置を供与する必要性の有無を判断することを目的として、華西病院の超音波診断検査室から情報を収集した。

現在華西病院には 26 台の超音波診断装置を有している。内訳は、超音波診断検査室 16 台、第 3 病院 2 台、第 4 病院 4 台、ICU 1 台、手術室 2 台、救急外来 1 台である。病棟等でのベットサイドでの検査用に別途 1 台有していたが、使用頻度が多く、その移動時の振動等により 3 年間で故障したとのことであった。修理には多額の費用がかかることから現在まで修理には至っていない。現在は、検査室 16 台中のどれか 1 台を病棟等に運び検査を実

施している。
ポータブル型（簡易型）の超音波診断装置は保有していない。病棟等での超音波検査数は年間 2,000 件である。検査部位は腹部で 98%を占めている。
超音波診断検査室には 26 名のスタッフ（医師 19、超音波検査技師 7）が配置されている。
検査数は、26 台の機器と 26 名のスタッフで年間 20 万件から 25 万件とのことである。
有している機器のメーカーが違うが、消耗品の供給、修理の対応等は問題無いとのことであった。
今後の計画として、超音波診断装置 10 台を購入する予定である。しかし、ポータブルの機器は含まれていない。理由は、臨床医がポータブルの画像を好まないとのことであった。また新規購入に合わせて人材も増やしてゆく予定とのことであった。
② 結果
上述の医学交流を通じて超音波検査の必要性が理解されたが、ベッドサイドで実施する機器が無ければ、交流の意味もなさない。ベットサイドでの超音波検査数、消耗品の供給、故障時の対応等現状では問題がない状況である。また供与予定の機器に関しても消耗品と修理については問題ないことから、ポータブル超音波診断装置の供与は適当と判断した。

（イ） 緊急検査機器について
救急外来で使用されていた緊急検査機器は非常に便利であった。看護師や学生でも充分使用できる簡易の機器（ABOTT 社の i-STAT）であった。
この機器で測定されていた項目は、6+検査パックとして電解質（Na,K,Cl）、BUN/Urea、Hb、EG7+検査パック pH,PCo2,PO2,Na,K,iCa,Hct,HCo3,TCo2,BE,iO2,Hb である。

（５）胸部外科 ICU 班

ア．　班の構成

医師：１名　　長谷川　泰三
看護師：２名　　家田　由美子、高田　洋介
通訳：１名　　李

初日は通訳を 2 名体制で開始したが、ICU で活動をする上で、さほど通訳を必要としないことが分かり、2 日目より通訳を１名体制にした。看護師は常時２名体制で日勤帯に活動をおこった。

医師は回診の際に同席し、診断等に関して協議・助言を行い、常駐はしなかった。

イ．　活動場所

120 床ある ICU のうち、胸部外科 ICU に配属された。その中でも震災被災者を中心に構成されている B 病棟で活動を行った。

ウ．　中国側の人員体制

胸部外科 ICU は、A 病棟(20 床)と B 病棟(8 床)に分かれている。看護師は両病棟合計 48 名。勤務毎に受け持つ病棟が入れ替わることがある。

今回配属された B 病棟は、日中は 3～4 名、夜間は２名の看護師で管理している。日中の看護師の人数は、患者数や重症度に応じて変動し、患者が 5 名以下となった場合、夜勤は１名で管理することもある。

勤務体系は以下の通りである。

① 8時から18時まで(11時半～14時は昼休み)。
② 8時から16時まで。その後、深夜２時から朝６時まで。
③ 18 時から翌 2 時まで。

エ．　活動内容

5 月 23 日～5 月 31 日まで活動し、日勤 8 時から 18 時まで勤務した。

- 清拭

・引き継ぎ終了後から、日本側は中国側と協力して、患者の清拭を起こった。顔面の清拭後に全身の清拭を行うが、一般病棟へ転出が決定している患者に関しては、全身清拭は患者の家族が行うため、全身清拭は行わなくてよいとのことだった。清拭に使用するタオルは患者の私物を使用するが、持参していない患者はガーゼを使用していた。ガーゼは小さく、全身を清拭するには不十分な大きさであったため、日本側が持参したタオルを数枚寄贈した。

・清拭に使用する湯は、看護助手がバケツに大量に入れてワゴンで運んでくるシステムであった。看護師はそのバケツから洗面器に湯を移し替えて使用した。湯の温度が清拭中に下がっても、患者は「気持ちいい」と反応していた。元来、暑い地域のため熱いタオルで体を拭く習慣がなく、むしろ冷えたタオルでの清拭を好んでいる傾向にあった。

・　爪切りは看護助手が専らの業務として行っていた。

図１

- 口腔ケア

・　中国側の行っていた方法は、綿球と小鑷子とトレーがセットになった滅菌セット**図 1** に漢方

薬を含む含嗽液を浸し、綿球で口腔内を清拭していた。滅菌のセットを使用する理由として、患者は抵抗力が低下しているため清潔なものを使用する必要があると言っていた。この方法では、十分に汚れが除去されていなかった。日本側が歯ブラシを寄贈し、ブラッシングによる口腔ケアを提案した。また日本側が歯磨きを実践した。

- 陰部洗浄

・やかんにイソジン液の希釈液を準備し、入院患者を順番に洗浄していた。臀部に差し込み便器を入れ、数本の綿棒で擦る方法をとっていた。また、尿道口はイソジン液で消毒していた。患者は抵抗力が低下しているため消毒液をする必要があると言っていた。これに対して、陰部を消毒液ではなく石鹸と湯で洗い流す方法を提案した。自分たちが日常生活で行っている方法と同じでいいのではないかという考え方に一定の理解を示したが、病院全体で行っている方法をすぐに変えることは難しいとのことであった。

- 洗髪

図２

・中国では体を冷やすと体調を崩すと考えられている。また、「気」が頭から入ってくると考えられている。そのため、入院中に頭を洗うと風邪をひくなど、かえって状態を悪くすると考えられているため、洗髪は好まれていないとの情報を得た。しかし患者が希望したので実施した。洗髪はＩＣＵ看護師長自らが指揮をとり実践してくれた。洗髪専用の機械はあるが、あまり使用されていない。洗髪方法は、まずリネンを筒状に丸め、そこにゴムシーツを巻き込み即席の洗髪器を作成した**(図 2)**。

・これは日本で使用している既製品と同じ形状と機能であるが、看護師長は自ら考案したと言っていた。その後、医療チームが持参したシートおむつを使用した洗髪を日本側が行った。洗髪を通して、文化・技術交流を図ることとなった。

- 手浴・足浴

・震災で受傷し、その時の汚れがそのままである患者も少なかった。特に手足の指間の汚れは放置されていたため手浴・足浴を実施した。中国側は忙しく、手が回っていない様子であった。

- 気管切開部のガーゼ交換

・交換方法に日中間で大きな違いはなく、特に問題なく実施できた。ただ、縦切開のため気管切開孔が大きく、一部の患者では感染を伴っていたり、エアー漏れがあったりした。感染創に対しては創内に吸引チューブを挿入し、吸引を行いながら生理食塩水で洗浄をおこなった。縫合糸が外れ、離解している創は、中国の医師にコンサルトを依頼し、縫合した症例もあった。

図３

- その他のガーゼ交換　**図３，４，５**

・仙骨部に褥創のある患者が多かった。また、未処置の浅い傷が四肢にあった。中国では、ガ

ーゼ交換は医師が行うとしていたが、数日にわたり汚染したガーゼが放置されている状況で感染創も多く認めた。中国側が行う創処置は、イソジン液消毒を創内部まで行い、乾ガーゼで創を覆い保護していた。そこで中国側の医師や看護師と相談しながら適時ガーゼ交換を行った。ディスカッションの中で日本の方法を教えて欲しいとの意見があり洗浄とウエットドレッシングを実施した。切除が必要な壊死組織は中国医師に依頼して切除した。ガーゼを固定するフィルム材（３Ｍ社：テガダーム５×１０ｃｍ）は静脈ルートを固定するものがあったため、それを使用した。サイズが小さいため創を覆うためには何枚も必要とした。中国側は一様にフィルム材を貼ると空気が入らなくなるので、創によくないのではないかと言っていた。その都度、医療用フィルム材の効能と、フィルム材で閉鎖するメリットを説明して対応した。創の状態をデジタルカメラで記録した。

- 各種テープの貼り替え

  ・経鼻チューブは鼻と前額部の 2 か所で固定されていた。前額部に固定することにより、鼻翼にチューブがあたり、潰瘍を形成している患者がいた。そのため、鼻翼に圧迫が加わらないようチューブが自然なカーブを描くように配し、頬で固定するように助言した。

- 体位交換

  ・体位交換はほとんど行われておらず、仙骨部に褥創を形成している患者が多かった。また、無気肺を有する患者が数例みられた。体位交換が実施されない背景として、患者が体位を変えることを嫌がり、看護師もそれに同意してそのままにしていた。褥創好発部位の圧迫解除とともに、呼吸器合併症予防のための体位ドレナージの必要性は、あまり理解されていない様子で、中国側が積極的に体位を変えることは見受けられなかった。そのため、看護師長と話す機会があったので、体位交換の必要性と、背部等にあてがう枕もしくはクッションを増量するよう依頼した。また、多忙な中国側を支援するため、体位交換は日本側が中心となって実施した。

- 関節可動域訓練

  ・関節拘縮予防のため、ＩＣＵに入院中であっても関節可動域（以下ＲＯＭ）訓練を早期に取り入れていくことは重要である。中国側によると、ＲＯＭ訓練は理学療法士の仕事であるため看護師は通常は実施しないとのことであった。ただ、震災の対応で多忙であるため、理学療法士は来られないとの情報であった。そのため、日本側が中心となって、ＲＯＭ訓練を開始した。

- 中国側への助言

・日常的に、業務の合間で看護ケアの知識や技術に関して意見交換を行った。中国側も日本の方法に興味があり、皆、一様にメモをとりながら熱心に話を聞いていた。日本側からの提案として、バイタルサインが安定している患者の血圧測定は、2 時間くらいは間隔をあけることを提案。現状は、マンシェットは腕に巻いたままの状態で、血圧測定間隔が 15 分から 30 分に間に行われていた。マンシェットが巻かれた腕は、内出血しており、またマンシェットには皮脂がこびり付き悪臭がしていた。しかしバイタルサインの測定間隔は規則だから測定するとの見解であった。看護師長にも同様の内容を伝え、今後の検討課題とするとの回答であった。そのほかに、体位交換や口腔ケア、ガーゼ交換について提案した。（詳細は各項参照）

オ.　成果

- 通訳を介して会話すること、必要最低限の中国語を勉強していくことにより、患者、看護師とのコニュニケーションが日を追う毎に円滑になり、笑顔が増えて信頼関係が得られたことを実感することができた。
- 言語に関わらず、患者に頻繁に声かけをすることにより、日を追うごとに表情が柔らかくなり、患者自らが生まれ育った環境、被災時の状況、今後の不安などを話す場面が数回見られた。中国側からも「よく話を聞いてくれて患者が喜んでいる」「細やかなケアをしてくれてありがとう」などという声が聞かれた。
- 多忙のために十分に実施できていなかった清潔ケアを実施することで、ケアの質が向上したと考えている。日本側が細部にわたり丁寧に手足を洗ったり、顔を拭いたりする姿を見て、中国側の中でも足浴を行うスタッフが出てきた。また患者からも「気持ちがいい。丁寧にきれいにしてもらい感謝している」と大変喜んでいた。本患者はこのケアをきっかけに表情が格段に軟らかくなり、笑顔が見られるようになった。
- ほぼ全例が気管挿管または気管切開中の患者であり、合併症予防を目的としたケアを考慮。
  - ＊ 口腔ケア：口腔ケア用の薬剤をしみ込ませた綿球での清拭だけであった。そこで医療チーム資機材の歯ブラシを供与し、歯ブラシを使用した口腔ケアを提案・実施した。２日後には中国側の看護師が自ら実施するようになった。しかし洗った歯ブラシがストックに戻されていたため、共有しないように助言した。「口が粘々する」と訴えていた患者には、歯ブラシを使用した歯磨きは爽快感があり、好評であった。
  - ＊ 体位変換：体位を保持するための大きめの枕を、各患者に１つずつ配置することが可能という返答が得られた。初めは日本側で行っていたが、中国側が興味を示したため、文献を用いて方法と効果を説明し一緒に行った。数日後には中国側の看護師から体位変換を申し出るようになった。
- 関節可動域訓練:初めは日本側で行っていたが、中国側の看護師が興味をしたため、絵入りの文献を用いて方法と効果を説明。一部の看護師が自ら実施するようになった。ＩＣＵ入室当初、ほとんど屈曲できなかった患者の膝が約 120 度まで屈曲することができるようになった。
- 創処置:日本人の提案したウエットドレッシングに対し、中国側は抵抗を示したが、

その都度、フィルム材を使用するメリットを説明した。創の状況をデジタルカメラで記録し、計時的・視覚的に比較ができるようにした。創部の回復は明らかで、消毒を使用しないガーゼ交換に対して徐々に理解が得られ、日本側不在時にも中国看護師と医師が洗浄とウエットドレッシングを行うようになっていた。

- 各種テープの貼り替え：経鼻チューブにより鼻翼に潰瘍を形成している状況を中国側も見て、鼻翼に圧迫が加わらないような固定方法を工夫して実施するようになった。

カ．　課題

- 日本の医療レベルとの格差を縮めるのが目的ではないが、患者の予後を左右するようなケアに関してどこまで介入するべきか。
- 上記のようなケアに対して介入する際のアプローチの仕方。

キ．　教訓

言葉は通じなくても、言葉が分からなくても看護の心は伝わる

ク．　その他、エピソードなど

- 一人の患者さんが回復していく中、人工呼吸器を装着されている状態にも関わらず、目が合うたびに笑顔を見せてくれた。一般病棟へ転出となる日、中国側看護師に対し顔色を変えて怒っていたので確認したところ、数日前に私たちの名前を書いてもらった紙が無くなったとのことだった。もう一度書くから大丈夫ですよと伝えると再び笑顔を取り戻し、私の持っていたカメラで一緒に写真を撮って欲しいと訴え、自分はこのメモを見てずっと忘れないから、あなたもその写真で自分のことを思い出してくださいと言われ、うまく会話が出来なくても看護することで気持ちが通じると実感した。
- 通訳の李清さんが、患者を励ましながら足などのマッサージを積極的に行ってくれていた。

ケ．　胸部外科ＩＣＵ班報告

長谷川　泰三（医師）

（ア）　活動場所と内容

①華西第２病院　：ＮＩＣＵにおいて１日間の活動。新生児病棟は約 100 床であるが、活動当時は災害対応を行うため約 70 床程度にコントロールをしていた。災害に関連するベビー用の部屋が設けられていたが基本的にこの病院は外傷患者を扱わないということであったので呼吸障害（軽度）や低出生体重児、新生児黄疸等の内科的疾患ベビーがその部屋に１０人入室していた。患者回診を一緒に回り意見交換を行った。具体的には新生児一過性多呼吸の診断・治療、新生児貧血、頭蓋内出血に関してであった。
災害に関連する患者が少ないこと、治療体制を凌駕するほどの患者も少ないことから１日のみの活動とした。

②透析室：基本的には佐々木医療調整員のフォローという形で入った。しかし佐々木医療調整員が中国側スタッフと良好な関係を築き始めていたため透析室での医師のニーズはその他にはないと判断した。しかし主任医師から

- クラッシュ症候群に対する透析療法
- 四肢切断のタイミング

等に対する意見を求められたため、医師メンバー（森野、打出、長谷川）で後日もう一度訪室し資料の提供および回診を行った。

③救急外来：もともと森野医師、打出医師が活動しているところに顔を出す程度の活動であった（当日ＩＣＵで活動予定であったが調整がつかなかったため救急外来での活動となった）。小児の下腿骨折に対する診察を行った程度。

④ＩＣＵ：胸部外科 ICU での活動。中国側医者とのディスカッションが中心。治療法などの助言を宋先生（日中友好病院胸部外科教授。医療チームのボランティア通訳として北京から参加）とともに行った。

（イ）　成果・考察

医療活動としてはあまり参加できなかったので、日本側の病態に対する判断や治療法を提示するというものになった。中国側が医療チームに求めているのは直接的な治療の介入では無く、治療法や病態生理の知見だと強く感じられた。それに従い助言を行ってはみたものの、それを中国側が行動に移すまでに時間がかかり過ぎる印象があった。その原因としては、①病院の規模に見合った診療体制・レベルが整っていない。つまり医師の人数は整っているかもしれないが各人の医療レベルはあまり高くなく、全身状態の評価が不十分という印象を受けた。②日本人からの助言は、特に上司からの指示ではないと思われているのか、優先順位が低い印象であった。③各検査を部署ごとに行わなければならない分業制である点　④ICU が 11 階にある為、諸検査のための移動距離が長い(例えば内視鏡検査室が２階にある)など、動線に問題がある。

（ウ）　今回の派遣で感じたこと

①入国前、入国後の情報量の不足。
②中国側が何を求めているかをつかみかねた（①に寄るところが大きい）
③活動開始に当たり、どのように対応していくかは隊員レベルではどうしようもなく全員が葛藤した。
④相手国側の要求を認識、理解しながら活動を終えることができたとは思うが、病院内での活動の準備を事前にトレーニングする必要がある。
⑤逆の立場になった時、救援国の受け入れを日本ももう一度阪神淡路の教訓を見直してする必要がある。
⑥発災から時間が経過した救援の場合のシミュレーションをもう一度立ち上げ訓練に導入する必要がある。
⑦今後の日本のフィールドホスピタル展開に関して今回の派遣で参考になる点といえば、ドイツ赤十字が中国の紅十字と念入りに協議した上で入国し中国側で活動した点ではないか。しかし迅速な派遣という前提を掲げる医療チームの活動にそぐわないためこの点からも協議をしていく必要がある。
⑧相手国側の医療知識、医療体制、人種的価値観を理解したうえでの治療行為が特に院内活動では重要であるという認識を再確認する必要がある。思うような活動ができないという精神的なストレスは今回必要以上に感じていた気がする。こういった精神的なストレスは導入研修でも伝えるべきである

（６）臨時 ICU 班

ア．班構成

看護師　２名　　大山　太、宮本　純子

通訳　　２名　　楊　海燕、董　広芳（学生ボランティア）

イ．活動場所　臨時開設 ICU (第４病棟内)

ウ．中国側人員体制

四川省成都市（四川大学華西病院）、天津、ハルピン各病院の ICU より派遣された看護師。（チーフナース 1 名、チーフアシスタントナース 3 名、スタッフナース約 20 名程度（患者 2 名に対し看護師 1 名）、看護助手 2 名、ICU 医師約 7 名

エ．勤務体制　　３交代制　8:00-14:00、14:00-22:00、22:00-8:00

オ．活動内容

（ア）ICU における患者の療養上の世話に関する看護

- 排泄介助、 食事介助、 ベッド周辺環境整備
- 全身清拭、手浴、 足浴、 洗髪
- 体位変換、口腔ケア
- 関節可動域訓練
- 排痰、喀痰補助及び吸引

（イ）ICU における患者の診療の補助に関する看護

- ガーゼ交換・創傷処置の介助
- 採血・ルート確保時の介助

カ．成果

- 中国混合看護チームのスタッフと協力して患者のケアを実践できた。
- 患者家族を含め看護の対象としてケアすることができた。
- 患者家族と共にケアを実践できた。
- ASD（Acute Stress Disorder：急性ストレス障害）様の訴えがあった患者に対し、通訳を介しながらゆっくりと患者の訴えや悩みを聴き、受け止めた。時間をかけ、数日間くりかえしていくうちに患者の表情も穏やかとなっていった。
- 言語的コミュニケーションだけではなく、実際に基本的な清潔のケアなどを通じて患者や家族とのコミュニケーションを図ることができた。
- 中国側スタッフと ROM リハビリなどについて資料を提供しながらディスカッションできた。 創処置について資料を提供しながらディスカッションを行い実践できた。
- 我々の活動を中国側スタッフから直接の言葉で賞賛された。また我々の行動が今後の中国の看護活動に大いに参考になり、日本側スタッフがやっていたような看護を今後したいと言われた。

キ．課題

今後相手国のニーズによっては、テントでの診療だけではなく今回のように後方支援病院において、被支援国医療従事者や日本国以外の支援国医療従事者と共に活動する場合もあると思われる。また、医療チーム機能拡充に伴い、フィールドホスピタルでの活動も増えてく

ることが予測される。そのため医療チームは、特に看護師は外来での看護だけでなく、後方支援病院やフィールドホスピタルの病棟での看護実践を考慮した活動計画と訓練を準備をする必要がある。

また、他国の医療従事者と共に活動していく場合、自分の考え、実践に対して根拠を持ちディスカッションできる能力が必要である。そのためには、自己の看護技術や知識を常に最新のものに更新、向上させる必要性と語学もより高い水準に保つことが重要である。さらに日本国以外の医療従事者と共同で仕事を行う場合、相手国の習慣や国民性、生活水準、医療水準など理解すると共に、それらを尊重した上で我々の提案や要望を伝えるなど、外国人との交渉技術も重要になると思われる。

ク．教訓

（ア） 他国のスタッフと一緒に看護を実践する。

今回、我々は臨時開設の ICU で、中国全土から派遣され参集した医師、看護師と共に活動を行った。そこでの我々の活動は、まず中国側医療スタッフおよび彼らの医療をポジティブな視点で関心を向けることから始まった。それにより彼らの大事にしていることや中国の医療・看護の方法を早い時期に把握することができた。次に我々は中国のやり方に沿って中国側スタッフと一緒に看護実践を始めた。その作業を続ける中で、自然に中国側スタッフも我々日本のやり方も見てみたいと興味を持ち始めて、結果的に我々は日本でやっている看護をほぼそのまま実践できるようになった。それは決して中国側スタッフの医療活動や看護活動を否定したり阻害したりすることが無いよう留意して行った。これらのことは我々にとっては作業上のストレス軽減にもつながり、また患者にとっても結果的にも良い効果をもたらすことになった。そして中国側看護師たちは我々の行動や看護を非常に好意的に、そして関心を寄せてくれることになり、お互いに専門職として技術的な交流を図ると共に日中友好にも貢献できた。

（イ） コミュニケーション

少なくとも中国という国では、看護実践において多少の技術の差や考え方の違いはあっても、看護本来の目的や目標、それを達成する技術の根幹的な部分に大きな差はなかった。そのため、中国側看護師と共同作業をしていても、言葉がなくとも意思疎通できる場面が多くみられた。「看護」というのが一つの共通言語のような印象を受けた。そのため、異国の病院で看護活動する場合、当該国の看 護の「枝葉（看護の重要な部分ではなく、その過程や手順、器具など)」の部分のさえを早期に確認してしまえば、看護の幹は同じなので後はさほどの苦労もなく共同作業が可能であることが解った。

とは言え、やはり言語の壁は様々な場面で残る。今回は的確な通訳を行ってくれた学生ボランティアの力が非常に大きかった。彼女たちの単なる言葉の変換だけではなく、中国側と日本側の発想や考え方の隙間を埋めつつの通訳作業には敬服した。結果的にそれは中国側スタッフや患者・家族との円滑な人間関係を形成するのに大いに寄与した。そしてそれが全体の成功へとつながった。

また、Non-verbal communication(非言語的コミュニケーション)も重要であった。我々が真摯な態度で、真心をこめて看護ケアを実践することが、患者や家族、医療スタッフに好印象を与え、非常に良好なコミュニケーションにつながったようだ。

ケ．その他エピソードなど

（ア） 相手の言語を理解しようとする努力

簡単な言葉（掛け声など）は日中双方の医療者がお互いの言葉を使おうと互いに心がけていた。これが円滑な活動へと結びついた。例えば患者の身体を移動する時の声かけとして、日本側スタッフは中国語を、中国側スタッフは日本語で１、２、３をカウントする場面もあった。また挨拶などの日常的で簡易な言葉を互いの言語で紹介し、使いあう事でコミュニケ

ーションと互いの信頼がより一層深まった。

（イ） 中国側スタッフからの評価

最終日、中国側看護師より「あなた達の看護実践は我々は非常に参考になった。是非あのような看護を実践したいと思う」と評価された。「行っていることは同じようであるが、細やかに丁寧に行っている部分が違う」と中国側スタッフから評価を頂いた。

（ウ） 患者及び患者家族からの評価

多くの患者や家族から「本当にありがとう」「日本の国民によろしく伝えてくれ」との感謝の言葉を頂いた。また、ある患者の家族はタバコを差し出してきた。通訳によると、中国においてタバコを差し出すのは感謝の形だそうである。また、家が倒壊した患者さんから、「まだ家が建つ見通しは立っていないが、新しい家が建ったらぜひ来て欲しい。ごはんをごちそうしたい」という言葉を頂いた。

（7）透析班

ア．班の構成

看護師　　１名　　高野　博子
医療調整員　　１名　　佐々木　恒太（臨床工学技士）

イ．活動場所

第３病棟　２階　透析室

透析機械にはスウェーデン製・ドイツ製のものに加え、今回の地震で日本政府から NIPRO 製品４台、日機装製品が５台寄付され稼働している。全透析機 66 台。個室は３室あり、主に２室が使用されていた。外来患者および入院患者は午前中と午後２クールに分けて透析されていた。夜間透析は行っていないが、緊急の場合はこの限りではない。

ウ．中国側人員体制

看護師長　１名（腎臓内科病棟＋透析室の総統括）
透析室看護師長　１名
看護師　　①7:30～15:30（16:00）、②7:30～10:00、14:00～18:00、③12:30～21:00、④8:00～16:00（CRRT）
病棟及び ICU の CRRT を使用している患者の管理を担当する
①～②合わせて約 10 名の看護師が勤務しているが、その中に天津からの応援１名＋湖南省からの応援３名＋湖南省の研修生１名を含む
透析機・機械工学士　１名
医師　２名

エ．活動内容

（ア）　被災患者の概要

● クラッシュシンドローム＋急性腎不全

①11 歳　女の子　学校の倒壊より救出された。両下腿骨折、クラッシュシンドローム、表情が非常に固く、挨拶は返すがあまり話そうとはしない。父親が常に傍に付き添っている。

②９歳　男の子　北川出身　家の倒壊により２時間左下肢挟まれる。母親によって救出される。非常に明るい性格で、クラスのリーダー的存在。今回の地震がなければ、お祭りの計画・運営を彼が中心で行うはずだった。

③５３歳　男性　徳陽出身　鉱山の労働者　４時間倒壊した家屋に挟まれ隣人に救出された。右手が動かないことが心配だと話す。

④３０歳　男性　綿竹市　２日間挟まれ、救出は午前５時から午後２時までの９時間を要した。武警部隊に助けられた。右下肢切断、右手首切断

⑤３４歳　男性　什邡市　鉱山労働者　アパートで昼寝をしていて地震にあった。倒壊した家屋に２日間挟まれ、警察に助けられた。家族は全員無事、家が全壊したので、今後のことが心配だと話す。

⑥５０代　男性　映秀市　銀行員　３日間車の中に閉じこもっていた（守らなければいけないものがあった）がはい出したところを村の人に救出された。軍隊によって病院に搬送された。家族は全員無事だった。

⑦６２歳　男性　農家　落石に挟まれたが２０分で運転手に救出された。広漢市の病院から四川大学へ搬送された。家族は全員無事、息子は上海にいた。家族は家が崩壊したので、テント生活をしている。

⑧１５歳　男の子　１日半倒壊（学校）した建物に挟まれ救出されたが、すぐに右手を切断。CRRT にて持続的に透析後５月 27 日 HD(血液透析)へ移行。挨拶に対し、返答

はするが、倦怠感・脱力感強く、会話ができる状態ではない。

⑨９歳　男の子　５時間倒壊（学校）した建物に挟まれ救出。下半身を挟まれ、重症なクラッシュ、搬送後 CRRT 導入、5 月 27 日 HD へ移行。HD 直後アレルギー反応あり、一時中断後再開する。―アレルギー反応について後述

⑩18 歳　男性　学校の倒壊により 10 時間挟まれた後に軍隊によって救出される。左手切断、頭部腫脹（全体に腫脹しているが、意識レベルは清明にて脳挫傷はない様子）、会話はできる状況ではない。

⑪３４歳　男性　什邡市　百貨店にいて倒壊、建物に２日半挟まれて軍隊に救出された。右下肢切断、全身浮腫あり

⑫１６歳　女の子　青川　学校の寮が倒壊して挟まれた後近隣の人に救出された。家族と離れていたため、ボランティアの人を頼りにしていた。上海に転院していった。

⑬１６歳　女の子　家族とともに転院してきたクラッシュの子　クラッシュの状態は軽い。髪が長かったが、今回のことで汚れたため、両親に髪を切ってもらったが、かなりのトラ狩りで男の子のように見えた。

（写真）クラッシュシンドロームの患者

（イ）　外来患者概要

全体の約 80%が慢性糸球体腎炎か原因不明の腎不全とのこと。

透析歴は初回の人から 8～10 年と様々であったが、2～3 年の透析歴の患者が約半数を占めていた。腎移植を希望している人は非常に少ないが、透析歴の長い人と若い人では移植を考慮している者が多かった。しかし中国全体の体制としては移植について十分な理解がされていないと思われた。（腎移植については別に記載）

（ウ）　被災患者の状況（観察から）

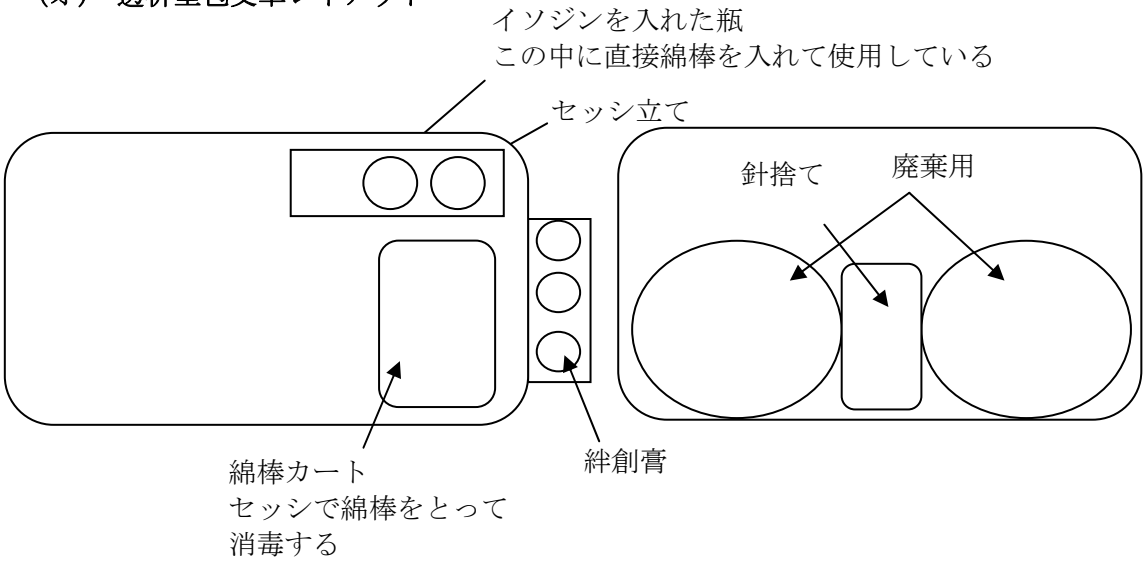
クラッシュシンドロームの患者は挫滅面積や圧迫時間から重症度に分かれるが、カルテが持参されないので、検査データ等の把握ができず全体像はつかめていない。尿量が全く得られていない患者、血尿が持続している患者から尿量が十分であり、色も清明であるが透析を行っている者もあった。ほぼ前例において全身浮腫や局所の浮腫は著明であり、上肢切断や下肢切断されている患者もいた。四肢切断における中国でのガイドラインがないため、切断時期に苦慮していることを透析室の医師から日本側の医師（森野・長谷川）に話があり、森野医師がイギリスのガイドラインを提示している。患肢の包交は汚染がひどい状態であることが多く、交換頻度・観察頻度は限られているように感じた。

その他の入院患者に対しては、モニターを装着している患者が透析を施行しに降りてくるが、モニターを観察している様子はなく、糖尿病性腎症で透析を行っていた患者に狭心症発作の波形がモニターに現れたときも、医師及び看護師が理解していたのか不明であった。また、透析中けいれん発作（全身硬直性）があり、救急処置の訓練をする必要性を感じた。

（エ）　日本政府から贈与された透析機について

NIKKISO の透析機　　NIKKISO の贈送の印　　NIPPLO の透析機

（オ） 透析室包交車レイアウト



透析室包交車は、機能的に作られているが、消毒に関して、カートを使用していることとセッシ立てがあることが疑問であった。2 段目には医療資材をのせていた。

今回の活動で国際緊急援助隊医療チームは施設においての医療支援活動を行い、構成する隊員の専門性を生かして各部門に分かれて活動することになった。人工透析班は華西病院の血液浄化部門において看護師１名、臨床工学技士１名にて医療支援活動を行った。

華西病院の人工透析室は５７床で、今回の震災にあたり日本政府及び企業の無償援助により９台の患者監視装置（透析コンソール）が配備され６６床が最大稼動台数であり、成都市の慢性維持透析患者を始め、今回の震災による筋肉挫滅症候群による一時的な血液浄化を必要とする患者、震災現場近くからの避難の為当院にて維持透析を余儀なくされている患者が血液透析治療を必要としていた。その他 ICU と腎臓内科内併設の Renal-CU でも血液浄化が出来る体制が整えられている。

臨床工学技士として活動初日に中国側エンジニア（透析用逆浸透水生成ユニットの管理と各透析コンソールの管理・定期点検・簡易修理・メーカー対応のみを担当する技術者）と面会し、透析用逆浸透水生成ユニットの稼働状況を確認。震災による水質汚濁等がなく血液透析が問題なく行えることを確認した。

その後、両名で通訳を介しながら被災患者や成都市の慢性維持透析患者に対し震災見舞い・日本からの応援として精神的な側面での関わりとして患者に接する。

日本政府からの透析コンソールが搬入されておりエンジニアと機器の据付を行い、業務関係の調整が行われてから日本政府無償援助で提供された機器からダイアライザー・血液回路

のプライミング作業を開始し、順次他の機器でのプライミングの一部介助から穿刺時の介助など、中国側スタッフと人工透析業務に関わる。患者との信頼関係が築けてから、希望する患者に対し、穿刺業務を中国側スタッフと共同で行った。透析開始後はフロアにてモニタリングしアラーム発生に対応。透析コンソールの修理もエンジニアと共同して行った。

活動最終日に ICU にて PMX－DHP について技術指導との依頼があり ICU に赴き、必要な助言を行った。

看護スタッフとは看護師の動きや穿刺等の技術的な意見交換を行い、また人工透析部門の主治医の泌尿器科医師と内 shunt や透析に関する治療管理について、またダイアライザー等について意見交換した。

オ．成果

今回の活動の成果としては、被災患者（や外来患者）とのコミュニケーションによって信頼関係が築けた点にあると思う。また、その活動を見た看護師たちや看護師長ともよい関係が出来たように思われる。支援開始当初は、看護師長にとって「(日本人を)受け入れた」ことが負担に感じられたように見受けられたが、徐々に表情に変化が見られ（病院上層部からの指示もあったのか？）、最終日には「もっと話がしたかった」「患者とよく会話してくれた」との言葉が聞かれた。　ミッションとしての成果は「病院支援」を実施できた点にあると思うが、様々なニーズに対して十分なディスカッションができて、迷いながらも隊員がそれぞれの隊員を思い合いながら活動できた点にあると思う。

人工透析室での業務は、業務内容の調整が行われるまで直接患者に診療行為は実施しなかったが、高野看護師とともに患者と患者家族に接して良い信頼関係を構築し、相乗的に看護スタッフとも良い関係が得られた。臨床工学技士としての診療業務という点で通常日本国内で行っている活動の 100%は出来なかったが、何か一つでも役に立てていれば成果があったとしたい。

カ．課題

今後、病院支援を行う場合、看護師は今回の様に救急外来・ICU を中心に活動していくことになると思われ、国別の病院事情を把握する必要がある。今回上手に日本のやり方を伝えることができたが、私たちが行わなければいけないことは支援であって指導ではないので、指導的な態度は厳禁であることを十分に周知する必要があると思う。資機材に関しても、病院支援の場合は今回必要と思われた資機材を病院支援用としてオプションで組むことも考えていくとよいと思う。支援に入る国によって、病院支援を想定する場合とそうでない場合があると思うので、出発前にそういった討議も重要なのではないかと思われた。

今後のＪＤＲの機能拡充では、透析室・手術室の展開は想定しなければならず、今回の経験を活かして透析室における看護を考えたいと思っている。できれば、透析室の研修を組んで、回路設定から穿刺、機械設定まで学びたいと考えている。

今回の活動では医療チーム本来のフィールドでの活動とは異なり、被災国管理下の医療施設での活動であり、以下の課題があると思われる。

ｉ）医療活動の前提となる免許有無の問題

この問題は解決されていたが明確。

ⅱ）同一免許でも業務・行為の相違、当該国にて存在しない職種の理解

同じ看護師でも診療行為や患者に対応する行為の相違で、それが理解されないと動きにくいという問題があったと思われる。また「臨床工学技士」という職種・業務がなかなか中国側に理解されず動きにくい場面があり、これらについて事前に説明する文書等があればよかった。あるいは個人的に携行している必要があった。

ⅲ）実務上の問題

今回、人工透析班として当該施設血液浄化部門で活動になったが、特に人工透析室では効率的に業務を行うのにある程度の業務上のルールが存在し、また技術的な側面がかなり強く

出る業務なので当該施設での標準技術手技を確認しておくことが重要である。（その場のルールややり方を知らないのに手を出すと逆に仕事を増やしてしまって迷惑をかけてしまう。）

医療先進国が持っている技術と相違が出た場合の対応も問題であり、特に今回の当該国のように自尊心が強い国民性の場合は、相手の標準的技術を否定し我々が持ち込んでしまうと信頼関係に大きな問題が生じる為、相手の標準的技術を認め受容しつつ活動するとことが必要になる。

キ．教訓

課題にもあげたが、病院支援に関する研修を盛り込む必要を強く感じた。機能拡充班で取り上げることも考慮されていると思うが、それぞれの各論でも組み入れていくとよいのではないかと思う。

以上の課題を解決するために今後受け入れ側と折衝し種々の事柄について交渉できる力が必要と感じた。

ク．エピソード

（ア）　腎移植について

日本における腎移植は、腎移植を希望する患者が日本臓器ネットワークに登録し、待機する。日本臓器ネットワークは、臓器提供の連絡を受けると、ネットワークを通じて、優先順位が高くかつドナーとのクロスマッチを行って決定する。中国の場合は、腎移植を行っている病院に登録して移植待機をする。決定項目及び優先順位についての詳細はわからない。しかし、臓器提供意思カードなどはなく、家族に一任されるため、日本もしくは欧米に比較すると、臓器を提供するドナーは非常に少ない状況にある。

（イ）　中国の保険制度について

中国は日本の国民健康保険及び社会保険と同様の保険があるが、その整備はまだまだ中途段階にあり、保険を持っていない人が 3 割ほどいる現状であった。日本と同様の保険も、患者は病院側には現金で支払い、その後保険会社に請求する形となっている。全く自費で透析を受けている人もいるわけだが、家族・親せき一同患者のために透析を受ける費用を賄っているようである。中には非常にお金に余裕のある患者もいた。華西病院で透析を受けている患者は、透析を必要としている患者の極一部と考えられ、それ以外の患者はどうなっているのかと思うと、透析に対する国の援助の重要性が伝わってくる。

（ウ）　患者と信頼関係が築けてこちらもカタコトの中国語を話せるようになったときに患者から穿刺の希望があって刺した時、「痛くない？（中国語）」と声掛けし「大丈夫」と通訳抜きで患者さんと接することが出来たとき言葉のキャッチボールが成立したのだと思えて嬉しかった。

（８）放射線科

ア．班の構成

医療調整員２名　　藤本　幸宏　(診療放射線技師)
　　金子　万幾子(診療放射線技師)
通訳１名　　雷　鳴　(学生ボランティア)

イ．活動場所

第一病棟２Ｆ放射線科Ｘ線撮影室。

Ｘ線撮影室は全 12 室であるが、災害患者受け入れ体制で撮影室８室のみ稼動使用しており、主に被災入院患者の四肢や体幹部のＸ線撮影を行なっていた７番撮影室、８番撮影室を活動場所とした。

ウ．中国側人員体制

Ｘ線撮影室総人員は１５名で震災後は昼夜２交代業務を行なっており、７番撮影室、８番撮影室合わせて３名程度であった。その他の撮影室および移動型 X 線装置やフィルム管理に３～５名配置され、業務に余裕がある場合は７・８番撮影室に応援に来られた。

エ．活動内容

（ア）　放射線科Ｘ線撮影室の７番撮影室および８番撮影室内で撮影業務全般(患者登録、ポジショニング、患者移動補助など)について中国側スタッフと協力して行った。

（イ）　主に体幹部および四肢を中心とするＸ線撮影で、活動前半は被災患者が多数を占め、骨折や髄内釘、創外固定等の術前撮影や術後変化の確認撮影を行った。ただし活動後半に入ると、一般外来も再開したため、撮影患者の７割程度が被災者で残り３割は災害とは直接関係のない患者であった。

（ウ）　撮影台への患者移動において、四肢の骨折や骨盤骨折、脊髄損傷の患者を複数人で抱えて移動する方法を用いていたが、四肢および骨盤骨折患者のベッド移動に際しては、シーツを用いて体をスライドさせる方法を提案し実践した。

（エ）　膝関節や膝蓋骨のＸ線撮影や手根骨のＸ線撮影に対して、日本での撮影方法を提示した。手根骨のＸ線撮影では、実際に日本の撮影方法を実践しディスカッションを行い、撮影体位などを中国側が記録するなど好評であった。

（オ）　創外固定後の患者の撮影目的やそれに応じた撮影法を説明し指導を行なった。

オ．結果

（ア）　Ｘ線撮影を行なった総人数は 728 名、撮影枚数は 2000 枚程度であった。

（イ）　その内訳の大多数は被災患者であり、主に四肢の骨折と胸部撮影、髄内釘や創外固定等の術前術後観察目的の撮影であった。

（ウ）　Ｘ線撮影装置および周辺機器は日本でも使用されている装置であり、Ｘ線撮影を行うにあたっての問題点は皆無であった。

（エ）　撮影方法については日本と異なる点も若干存在したが、十分理解できる範囲であり、基本的には日本側技師と中国側技師がペアを組みＸ線撮影に携わりながら患者移動方法や撮影方法において日中の意見交換が行えた。その成果として臨床画像の質向上が伺えるとの指摘を得られた。

（オ）　日本側技師ペアでの撮影も十分可能であり、その対応姿勢が放射線科スタッフをはじめ、その他の病院職員にも良好な評価を得られた。また、患者対応では患者および患者付き添い者から良好な反応を得られた。

（カ）　日本側技師の介入により、１～２名／日の中国側スタッフの休暇取得を可能にした。

カ．課題

（ア）　今回はいわゆる後方搬送病院(災害拠点病院)での活動となった。そこでは中国側スタッフと協力しながら災害医療に関わる支援協力を行なう上で医療技術者同志の技術交流を図ることが人的交流を促進する手がかりとなったが、単なる医療技術交流とならないためにも、相手側の医療レベル・医療ニーズを十分に理解した上で、後方搬送病院としての機能向上に向けた医療技術提供を行う必要性がある。

（イ）　活動場所が医療機器の十分に整備された病院内での活動であったことから、携行資機材の利用は殆ど無かった。医療チームの保有する医療資機材の管理・活用方法について再度検討する必要がある。

（ウ）　言葉について。コミュニケーションを図るために、人の呼び方（年齢的地位的）を現地の言葉で把握しておくことは相手に対して大変好印象を与える。（実際、通訳の雷鳴さんが放射線部長などに挨拶に行く前に教えてくれた）また、患者さん相手でも大変便利で、日本人技師は大変親切だったと患者対応での評価も頂いた。それと付随して、座る・寝る・口を開ける・手を握る　などの動作について事前に分かると便利だと思う。

キ．教訓

こちらの意見を受け入れてもらうには、中国側スタッフとの信頼関係が必要である。現地の方法を十分に理解したうえでディスカッションの機会を探る必要がある。

ク．その他

（ア）　他の施設から応援にきた中国人医師からのＸ線撮影についての質問に快く答えたところ、非常に感謝され信頼感を得るきっかけとなった。

（イ）　現地 TV 等のマスメディアによる放映効果が非常に有効であった。

（９）薬剤班

ア．班の構成

薬剤師１名　森田　可南

イ．活動場所

救急外来薬剤部、整形外科、結核、皮膚科、神経内科、感染症、各科病棟

ウ．中国側人員体制

薬剤師数　68 名　（救急外来薬剤部　１名常駐）

エ．活動内容

⑴救急外来

調剤及び在庫補充の補助を行った。薬剤は一部英語表記もあるが多くは中国語表記のみである。

処方箋の書き方の相違、解読困難、中国語表記の薬剤では調剤過誤の危険が高い確率で起こることが予想されたため、主に生食やブドウ糖液等、輸液のみ調剤補助を行った。

⑵病棟訪問・視察

薬剤管理指導は入院患者に対して今後展開していく方向だが、現在は主に退院時にのみ指導を行っているのが現状である。病棟での活動は被災者や介護者に対し、傾聴及びメンタルケアを中心に食事の摂取状況の確認や被災者の訴えから薬剤の使用方法の提案や服用の注意点等について説明した。

＜神経内科＞

・病棟：164 床。被災者 0 名。

ALS 患者に対する告知や気切の選択、パーキンソン症例について意見交換を行った。

・外来：てんかん外来診療に同席。患者数 40 名（てんかん 29 名、重症筋無力症、SLE、ウイルス性脳炎等）。徳陽・北川・綿竹からの患者もおり、8 割は地方からの患者。震災により発作の憎悪、薬の服用を一時中断せざるを得ない例や、余震で危険な中、薬を家に取りに戻った患者もいた。てんかん外来患者数延べ約 1 万人/年。通常 50～60 名程度の診察を行うが震災により患者数は減少、震災による服薬の中断が懸念される。

＜皮膚科＞：被災者 1 名訪問。余震による骨折。

術後、患部にかゆみと背中に発赤が出現。抗アレルギー薬にて改善。

＜整形外科＞：被災者 17 名訪問。

術後の疼痛・疼痛による不眠を訴える患者が数名いた。鎮痛剤は医師から副作用があるため、できるだけ使用しないようにと説明されている患者もいた。術後の疼痛管理により十分な鎮痛を得ることで早期離床にもつながるため、痛みを我慢しすぎないように伝えた。もう少し積極的な疼痛コントロールを提案するが、術後疼痛に有効な管理の厳しい薬剤は在庫が少なく重症患者に使用しているという背景も伺えた。

＜結核病棟＞：被災者 2 名。抗結核薬は症状が改善しても最低でも 6 ヵ月は服薬継続の必要性があることなどを説明。

検査→X 線写真、塗抹。入院中の薬剤管理→1 日分ずつ患者に渡し本人管理とした。

退院後の薬剤管理は地方の医療機関で行うため DOTS 方式について詳細は不明。過去に HIV-結核の二重感染例は 1 例のみ。避難所における結核患者の状況把握はしていなかった。

＜感染症科＞：適正使用のための抗生剤管理方法の把握及び重症破傷風感染の症例 1 例

抗生剤適正使用に関して厳重に管理している。抗生剤を医師のレベルに応じて 3 群に分類。使用可能薬剤以外はレベルに応じた医師の許可が必要。検体の培養の有無、感受性検査結果と処方内容の妥当性を薬剤師が確認、委員会へ通達し管理している。中国ではバンコマイシン耐性の MRSA は検出されていない。

(3)講演
「国際緊急援助隊における薬剤師の役割及び日本における病院薬剤師業務拡張」について臨床薬剤師、実習生、大学院生等３５名にプレゼンテーションを行った。
(4)交流
病棟での薬剤管理指導業務の導入を本格的に指導させる段階にあり、日本の入院時服薬指導や学習方法、退院時指導の薬剤情報について関心が高かった。日本における現状を伝えるとともに、大学での履修科目については帰国後一覧をデータで送ることにした。
(5)薬剤在庫過不足の調査
発災初期、破傷風人免疫グロブリンは在庫不足であった。しかし、病院側の見解ではメーカーからの寄贈もあり現在余っているものはあるが不足している薬剤はない。被災地近くの中小規模の病院では援助物資の不足はあると考えられるが病院同士の連携はない。余剰の薬剤は今後復興した病院への寄贈を検討中。
発災から 2 週間が経過する頃、中国当局で 24 時間以内に援助物資の過不足についてネット上で把握及び情報発信できるシステム構築の案がでていた。

オ．成果
緊急援助における薬剤師の役割について提起し、薬剤管理指導についての意見交換を通じて交流した。

カ．課題
（ア） 過不足薬剤・医療機器や物資の調整、調達および早期段階で過不足がネットワーク上で一瞥可能なシステム構築の提案、サポートをするための基盤構築。
（イ） 被災国の様々なニーズに対し、より柔軟に効果的に対応できる順応性と活動形の拡大。
（ウ） 反省点として、病棟活動を開始する前に派遣前の日本で、もしくは派遣中にチームスタッフから震災時の治療で特に注意すべき点や患者の視点からでも、注意することにより予後が改善する点などの知識をつけてから行くべきであった。

キ．教訓
（ア） 活動場所についての認識を常に念頭において考える。（今回の派遣であれば 3 次救急を担うよう地域の中核病院であることを考えて視察先や質問事項を検討すべきであった。）
（イ） 2 週間という短期間の活動において、現地カウンターパートとともに活動を円滑に行うための信頼関係を早期に築くことが必要である。

（１０）産科班

ア．班の構成

看護師（助産師）１人　疋田直子
通訳１人

イ．活動場所

華西第二病院　産科病棟（5 階：一般産科病棟、6 階：分娩棟、11 階：被災者病棟）

ウ．中国側人員体制

日勤帯　看護師約 4 人（11 階、15 床）、看護師約 10 人（5 階、60 床）

エ．活動内容

- 主に 11 階の被災妊婦の病棟にて活動
- 一般業務（検温、点滴、情報収集、名札作成、患者移送手伝い等）
- 産科看護業務（沐浴、授乳指導、授乳介助、母体搬送手伝い、胎動カウント、ＮＳＴモニタリング、児心音聴取、悪露交換、乳房ケア、乳房チェック、酸素投与など）
- 病棟スタッフと日本・中国の医療についてディスカッション
- 分娩棟(６階)見学、分娩棟スタッフ（助産師）とディスカッション
- 分娩進行者の分娩第Ｉ期の看護、分娩誘発者の観察（分娩棟）
- ＮＩＣＵ病棟見学
- 5 階病棟看護業務（沐浴、ベビーマッサージ、胎動カウント、悪露交換、酸素投与など）
- 帝王切開術後の褥婦とコミュニケーション、乳房ケア・授乳指導

オ．成果

5 月 22 日～31 日までの活動中、のべ 111 人の妊婦・褥婦と関わった（うち 76 人が被災者）。病棟業務を中国側スタッフと行いながら、時間をみつけてはベッドサイドにて、妊婦・褥婦一人一人の話を傾聴した。その成果として、被災された妊婦・褥婦が抱えている悩みや困っていること、現状を把握することができ、必要とされるケアは何かを考えながら、実施することができた。

5 月 23 日に「母乳が出なくてスタッフも困っている」という褥婦に対し、乳房ケア・乳房マッサージを指導したところ乳房状態の改善がみられた。それによって褥婦とその家族からの信頼・感謝だけでなく、中国側スタッフからの信頼も得られた。翌日以降、中国側スタッフより、「○番ベッド褥婦の乳房もみてほしい。」「乳房マッサージをしてもらった後、直子さんがいない時は私たちが引き続きマッサージをするようにしています。」との声が聞かれるようになり、中国側スタッフと連携したケアを行うことができた。

帝王切開後 3 日目、児がＮＩＣＵに入院しており、搾乳方法がわからず、乳房緊満が著明にみられている褥婦とその家族に対して搾乳指導を行った。最初、搾乳が上手にできず、3～4 時間ごとの搾乳の必要性についても理解できていなかったが、繰り返し搾乳方法を説明し、3～4 時間毎の搾乳の必要性を話すことで、退院前には自立して搾乳を行えるまでになった。

カ．課題

今回は、病院内での活動であり、寄付の品々があったため、紙おむつや粉ミルク、赤ちゃんの服や妊婦・褥婦の服などの必要なものはそろっていた。しかし災害現場では、被災後すぐにそのような寄付が届き、皆に行き渡るとは言えないため、限られた物資の中で育児をしていかなければならない。そのため、母乳が出る母親に対しては、母乳育児ができるような

環境を整えてあげることが必要である。また、紙おむつを節約するにはどうしたらよいのか、紙おむつに代わるものは何か、粉ミルクを作るための安全な水をどのように手に入れたらよいのか、哺乳瓶の消毒はどのようにしたらよいのか等、考えなければならない課題はたくさんあると感じた。

私個人の課題として、活動開始後数日間、慣れない環境であったこともあり、入院患者全員を把握できず、浅い関わりしかできなかった。もっと早い時期から多くの患者と深い関わりをし、必要な援助ができればよかったと思う。慣れない環境でも、できるだけ積極的に活動することが必要だと感じた。

キ．教訓

活動する上で、相手国の文化や考え方等を考慮しながら活動していくことが必要である。また、自分の今回のミッションの目的を明確にした上で活動を進めていくことで、活動中の意欲を失わず、充実した活動につながる。

ク．その他、エピソードなど

（ア）　母乳が出る母親でも、初産であるために授乳の仕方がわからない、また、母乳が足りているのかどうかを見極められず、結局ミルクをあげてしまうという例が多々みられたため、そういった指導ができる人材が必要なのではないかと思った。

（イ）　活動中、避難所のテント内で出産したという褥婦に会った。分娩時、運良く医師が立ち会っていたが、電気がない暗闇の中で出産したため、分娩後の診察が思うようにできず、胎盤の一部が残ってしまった。そのため、分娩後 6 日目で入院し、処置が必要になった。被災地にも妊婦は必ずいるわけで、今回のように、分娩時に医師が立ち会える可能性はそれほど高いとは思えない。そのため、分娩介助ができる医師または助産師の存在が必要だと思った。

（ウ）　病院での活動最終日の 5 月 31 日、入院している妊婦・褥婦一人一人へ挨拶をして回った時、妊娠中、分娩誘発時、分娩（帝王切開）後ずっと関わらせていただいた方から、「連絡先を教えてください。私は日本語が話せないし、あなたも中国語が話せない。今は連絡できないけれど、子供に日本語を習わせます。10 年後には日本語が話せるようになっているから、その時は必ず連絡をします。」との言葉をいただいた。

（１１）業務調整員

ア．班の構成

業務調整員　　佐藤　仁
　　市原　正行
　　野田　祐作
　　鈴木　由亮
通訳　　劉　暉
（後方・側面支援）
ＪＩＣＡ中国事務所
　　藤本　正也次長、岡田　実次長
　　植村　吏香所員、桑内　美智子所員
　　邢　軍所員、馬　理所員、李　飛雪所員、周　妍所員
日本大使館　　等々力　研一等書記官、西　淳也二等書記官
日本領事館　　高橋　耕一郎在重慶日本総領事館領事

イ．活動場所

５月２２日１５時頃より、四川大学華西病院　第四病棟前の駐車スペースにエアテント１張及びロッジ型テント２張を設営し、医療チームの指揮本部を立ち上げた。エアテントは主に団長、副団長、チーフナース、業務調整員及び JICA 中国事務所スタッフや通訳など現地支援スタッフの活動拠点とし、ロッジ型テントは携行資機材、食料品、隊員個人の携行品の保管場所及び隊員の食事兼休憩用の場所とした。
※設営場所及び本部テント内レイアウトは「活動サイト図」のとおり。

このほか、指揮本部が立ち上がり本格的に機能するまで、隊員の宿泊場所である四川賓館の一客室を借り上げ、JICA 中国事務所スタッフが駐在し、主に JICA 中国事務所や中国政府との連絡・調整・報告用の拠点とした。

ウ．活動内容

（ア）　本部の設営・管理

指揮本部の設置場所候補として、当初病院エリア入り口から第一及び第二病棟に通じる道路の一画を検討したが、スペースが十分でなく、また広報インパクトも弱いことから、第四病棟前の駐車スペースを拠点と定めた。

今回の医療チームの活動形態は、中国側と交渉・調整の上、患者の待つ現場でエアテント内で診療活動を行う「フィールドクリニック型」でなく、医療チームの支援を必要とする病院の各部門に隊員を分散派遣する「病院支援型」とした。このため、指揮本部は各隊員の活動を支える連絡、報告、調整等に加えて、中国側との折衝窓口、メディア向けの調整窓口の役割を担うこととなった。

（イ）　資機材の管理・調達

チームの携行機材は中国側により直接成都空港から病院の地下駐車場の一画に設けた機材置き場に搬入・保管され、指揮本部が立ち上がり後、必要な資機材を同所に運び出し、設置・活用した。本部テントで使用する資機材用の電源は第四病棟から得られたため、チームが携行した発電機を利用する必要はなかった。

また、テント及び資機材の管理に関して、防犯上の観点から中国側が警備員を傭上・配置したが、テント、テーブル、椅子等を除き、万一に備えて毎日全ての機材を隊員全員で宿舎に持帰り、業務調整員により必要な充電や補充の後、保管を行い、翌日またテントに運び込んだ。

指揮本部の活動に必要な備品、消耗品、隊員用の水や食料等は必要に応じて成都市内で調達した。また、救助チームから引き継いだ水や食料は宿泊ホテル１階の荷物部屋で管理し、適宜隊員に提供した。

＜現地調達した主な品目＞

ホワイトボード、コピー用紙、プリンタインク、クーラーボックス、ポット、水、食料、薬剤

（ウ） 通信・連絡・報告

本部テントにインマルサットM－４を１台設置したほか、病院内で活動する隊員用に班単位で無線機 10 台を、また無線の通じにくい班に現地の携帯電話を配布するとともに隊員の勤務場所、班構成、連絡先をホワイトボードに表示して、随時本部関係者が一覧・共有できるようにした。

携帯電話または無線を通じて各勤務場所に配置された班と連絡をとり、活動状況、スケジュール、成果、課題等を聴取の上取りまとめて、毎日午前と午後に東京に活動報告を行った。

（エ） 通訳の配置・管理

JICA 中国事務所が傭上した通訳者に加えて、大学側で独自手配した通訳ボランティアを各部門に配置された隊員のニーズに応じて人数を配置した。その他、同じ部門でもさらに分かれて活動するために通訳の増員が求められる場合や、逆に所属部門が休日のため通訳業務が不要になる場合等において、適宜、通訳の配置の調整を行った。また、通訳業務に加えて日中間の報告や連絡用の文書作成に際して翻訳作業も行った。

（オ） 車両の手配・管理

資機材の調達、搬送また業務調整員の移動用として 7 人乗りワゴンを運転手付きで借り上げた。また、四川省政府外事弁公室により大型バス１台が無償で手配され、隊員の宿舎～病院間の移動に活用した。

（カ） その他渉外業務

- 指揮本部を訪れる病院関係者、外事弁公室をはじめとする中国側の窓口として、各種の対応を行った。加えて医療チームの活動をメディアを通じて知った一般市民が通訳のボランティアとして志願してくる場合や、医療チームに差し入れや激励・感謝の意を伝えに来る市民への対応を行った。特に、青川や北川で活動した日本の救助チームの報道に加えて、指揮本部のロケーションの良さもあり、感謝の意を伝えに来る一般市民が連日大勢訪れた。
- 活動期間中、常時取材に訪れる日中両国のメディアに対して、原則団長または副団長が対応するが、指揮本部に常駐することの多い業務調整員が窓口として対応することも多かった。
- JICA 中国事務所の支援により、中国側外事弁公室、税関当局、日通上海との連絡･調整を経て、帰国時の資機材返送を行った。また、同時期にミャンマーに派遣された医療チーム向けに、ポータブルのＸ線装置を日本経由でミャンマーに輸送する手続きを行った。

エ．成果

- 現地で手配したホワイトボードを利用して、情報の共有や当日の隊員の動き等を把握・共有するのに有効であった。
- 携帯電話、無線機を配置した事により、病棟内に分かれて活動していた隊員達の、活動状況、緊急連絡等を迅速に行えた。
- 日本から成都入りの際は、携行資機材は受託手荷物扱いとしたため、貨物のような通関手続きを行っていない。一方、日本への帰国時に貨物として返送すると往路と復路で機材の性格が異なることとなるため、税関当局に対する説明・交渉に難航する場面があった。これに対して JICA 中国事務所の担当者から四川省政府外事弁公室への働きかけと交渉が功を奏し、比較的短時間かつ簡潔な手続きにより、日本への返送が可能であった。
- 食材・飲み物、薬、ポット、クーラーＢＯＸを市内で適宜調達して、隊員が活動をしていく上で体調管理やストレスの解消に役立った。
- 通訳者は必ずしも保健・医療分野を得意としないが、日本側と中国側の橋渡し役として勤めた。特に、JICA 事務所手配の通訳者は日本語の語彙や発音に関してほぼ問題なく、意思の疎通に大きく貢献した。また、通訳としての業務のみならず、中国語や中国文化などを教えてもらうことで、日中間の交流や異文化の理解の促進ができた。
- 中国において初の活動となる医療チームについて病院関係者のみならず市民に幅広く知ってもらうため、過去の医療チームの活動の写真を掲示した。これにより指揮本部を訪れたり、通行する市民がしばしば足を止め、写真に見入る光景が見られた。また、日中の交流の場になり、多くの感謝の声をいただいた。

オ．課題

- 携帯電話、無線機の貸し出し、回収、充電等の流れが曖昧で、医療隊員達がどう扱えばいいか判断できない状況があった。活動を開始して早い段階で、全ての機材について利用の流れを全体に周知できるような勧め方が必要だ。
- 医療分野の専門用語については通訳にかなり難しい部分があった。
- 通信機材の一部において電源プラグの変形や、アンテナケーブルのコネクタ部分の破損が見られた。これらは緊急援助隊としての活動の大きな妨げとなるだけに未然にトラブルを引き起こさないため派遣に備えたメンテナンスが重要である。

カ．教訓

- 「病院支援型」という活動形態を生かして、指揮本部としてＪＤＲテントを設置し、病院関係者や訪れる市民に向けた目に見える形での活動は広報の観点から極めて効果的

である。

・　スムーズな通訳のために活動開始前に隊員と通訳者間で使用頻度の高い、または重要な専門用語の訳を打合せ、共有することが重要である。

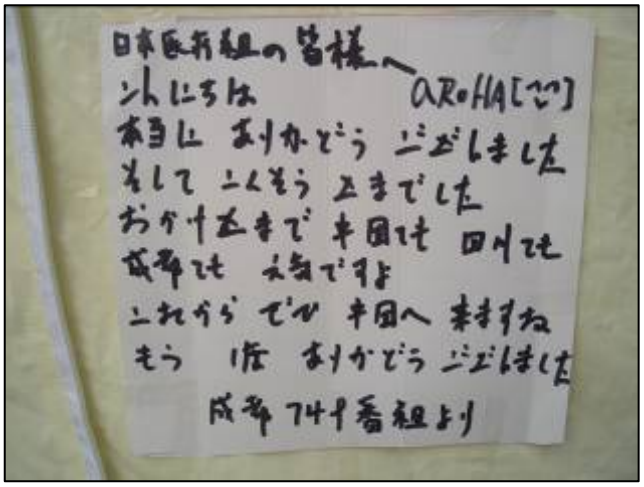
キ．その他エピソード

・　市民からの差し入れ

テレビや新聞等で日本の医療チームの活動を知り、ぜひ隊員で食べてほしいとびわやスイカなどを持ってくれた人もいた。また、テントでの活動を快適にとの心配りで扇風機 2 台を寄付してくれた人もいた。

・　日本のチームへありがとう

メディア向けに医療チームの活動状況を知らせるため、本部テントに毎日張り出していたが、帰国日が決まった旨を張り出したところ、翌日医療チームへの感謝とねぎらいのメッセージが張り出されていた。あとで確認したところ四川大学の学生有志によるもので、医療チームの活動終了を知ってぜひ感謝の言葉を伝えたいとの気持ちによるものだった。



医療チームの本部テントに女の子とお母さんが訪れた。7 歳の女の子で、お母さんは医療チームの活動拠点である華西病院に勤める医師。女の子がおずおずと隊員に近づいて、慣れない様子で「サンキュー」と声をかけてくれた。そのあとお母さんに促されながら「ありがとう」とも。医療チームの活動振りに感謝してとのことで、隊員たちにとってとても印象的な一コマだった。

3. 医療チーム添付資料

（1）全体ミーティング議事録

5 月 22 日（木）

Ⅰ.日程

9：20～12：00　華西病院にて会議

・　病院の概要、震災発生後の病院対応などについて病院長より説明

・　JDR の活動に関する協議

・　院内視察（救急外来、ICU）

12：00～14：00 休憩

14：00～白衣貸与

14：50～各配置場所へ移動

15：00～17：30 オリエンテーションおよび活動内容の確認

Ⅱ.各部署の活動

【救急外来】（15：20～17：30 来院患者は 10 名）

リーダー：森野

メンバー：打出、大山、宮本、森田、藤本、金子、日下部、山崎

1.　配置

病院前のトリアージポスト、除染ゾーン…森野　打出

病院前トリアージ除染ゾーン・細菌検査（グラム染色のための検体採取）…山崎

軽症者用救急診療室…大山、森田、日下部

重症者用救急診療室…宮本、藤本、金子

2.　活動内容

・救急車で来る患者さんを観察（現地スタッフとともに）

・処置、検査、入院の待機場所へ行く流れを現地スタッフとともに観察

・患者数 3 名

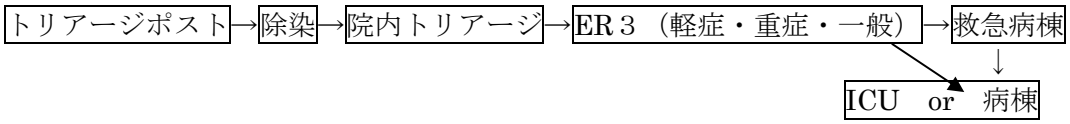
・看護師：軽症外来（点心から搬送された患者の採血や移送

左大腿骨頸部骨折 80 代女性

重症外来 2 名

気管切開した重症頭部外傷（運ばれた患者が待っているのを見るだけ、患者とともの受入れから一連の流れ

3.　救急外来の患者の流れ



4.　特記事項

・震災以外の患者搬入もされている。

【胸部外科 ICU】（定床 8 床）

リーダー：高田

1.　配置

高田、家田

2.　活動内容

・　医師から入院患者（7 名中 6 名）の病状に関するオリエンテーション

・　入院患者７名は被災者のみで、多発肋骨骨折、頭部外傷による意識障害などの患者ケア状況の把握
3.　看護体制
・　勤務時間
　①　8：00～12：00　12：00～18：00
　②　8：00～15：00
4.　特記事項
・　合併症予防を目的としたケアに貢献できる可能性があるかどうか確認
　（例）挿管患者の呼吸ケア、口腔ケアの実施状況の確認

【透析】
リーダー：佐々木
1.　配置
・　透析室…佐々木
・　腎臓内科病棟…高野
2.　活動内容
・　オリエンテーション
　透析対象者はクラッシュシンドロームの患者
・　活動内容の確認
　佐々木…病院スタッフの希望は、透析のプライミング等
　　現地の技術を確認してから安全に配慮して開始していく
　高野…病院スタッフの希望は腎臓内科病棟の支援
　　腎臓内科病棟でオリエンテーション
　　現地のプレスへの対応

3.　勤務体制
・　8：00～12：00　12：00～18：00
4.　特記事項
・　自分たちがやっていることはどうかという質問が多いが、改善点など教育的な支援については状況を判断しながら実施していく

【華西第二病院】小児科・産科（全体 500 床）
リーダー：長谷川
1.配置
小児科…長谷川
産科…疋田

2.　活動内容
長谷川…新生児病棟から各小児病棟を視察
　　助教授回診に参加　クラッシュシンドロームに関するディスカッション
疋田…産科：病棟視察
　　被災妊婦の特別病棟があった、感染対策をしていた
　　昨日だけで 10 名搬入
　　廊下にまでベッドがあった。
　　合併症のある妊婦・出産病棟
3.勤務体制
・　8：00～12：00　12：00～18：00

4.特記事項
・これをきっかけに日中の交流ができればと看護師長からコメントがあった

【本部】
1.活動内容
・テントの立ち上げ…第 4 病院前
・車の調達…7 名乗り 1 台
・会議室用ホワイトボードの調達…午後～翌朝まで 2 台
・本部用ホワイトボードの調達
・本部から隊員への要望
　①活動時間開始～終了の報告
　②移動時などの報告は携帯または無線で本部に行う

Ⅲ. 確認事項
・写真撮影…院内に入るには白衣が必要

Ⅳ.協議事項
＊　病院支援…通訳の人数
＊　土曜日、日曜日…休む必要はない
＊　学生を対象に講演
＊　活動終了時間…8：00～12：00　14：00～18：00
＊　健康管理者…打出、石井
＊　外出…4～5 日はホテル内で。
＊　マスコミ対応…建物内には入らない。
＊　ドイツチーム…フィールドホスピタル 180 床　3 ヶ月で中国に引き渡す。
＊　日報（月日、時間、クロノロジー、活動内容、懸案事項、メンバーの健康状態、明日の予定、その他）

5 月 23 日（金）

1. 活動報告
・　救急外来
　南京までの航空医療搬送に同行（病院～空港まで）
　　10 名に関与　脊髄損傷の患者の移動および移動時の指導
　震災よりも一般の救急患者
　午前中の 11 名　6 名が被災者でほとんどが骨折
　医療調整の移動　放射線技師はレントゲン室へ、薬剤師は救急外来の薬剤部
・　ICU
　午前は現地スタッフと患者ケア
　患者の担当は現地看護師ではあるが、ケアを支援することで負担の軽減
・　透析
　腎内は多忙すぎて活動困難のため HD に移動
　HD は、プライミングなど実施状況の確認
　　水質変化の有無を確認（浄水装置）
　　取材対応
・　小児科 NICU
　重症患者の教授回診で、病状についてディスカッション
　診断について意見を求められたので、違うと思うと応えたが受け入れられた

・　産科病棟
　被災した妊婦のケア
　10 時検温
　産後 3 日目…授乳指導（母親、スタッフ）
　転院搬送のためのネーム作り
2.協議・連絡事項
・　ニーズがないところからは撤退して移動していくこともある
・　本人の希望をかなえつつ調整
・　実施可能な医療行為の範囲を確認
・　写真撮影には十分な配慮をする
・　通訳の増員、配置について
・　ミッションの目的の再確認について

5 月 24 日（土）

1.団長より
1)温家宝総理の訪問について
　・被災者の慰問目的
　・隊員の金子さんと握手し「レスキュー隊に続いて医療チームを派遣してくれて日本政府、日本国民に感謝します。」などの言葉があった。
2.活動報告
1)救急外来
　・患者数：23 名（被災患者 17 名）ほぼ全員に何らかの関与
　・隊員 5 名は救急外来で診療支援
　　＊救急外来での医療支援活動
　　＊救急外来の診療は看護師だけで完結しているため医師としての活動は困難かもしれない。
　　＊転院搬送で、医師、救急救命士が協力することは可能
　　＊患者の転院搬送（南京まで）8:30 出発～11:00 帰院
　　北京の救急車 70 台を航空機で搬送していた
　　＊　医師と看護師は協働しない
　　看護師が手に負えない時に医師が治療する
　　＊　サチュレーションモニターには興味を示している
　・5 月 25 日（日）から大山、宮本は新設の ICU へ
　・放射線技師（2 名）は放射線科で活動
　　＊　平時は土日休診だが、災害時であるため稼動している。
　　＊　患者氏名の確認ができないため現地の技師に協力を求めた。
　　＊　撮影の実施は可能と思われる。
　　＊　金子･･･午前：患者数 42 件そのうち撮影したのが 28 件
　　午後：9 件中 4 件撮影
　　＊　藤本･･･午前：60 件中 28 件、午後：8 件すべて実施
　　＊　病院は、この震災で必要となったためポータル装置を 2 台発注
　・薬剤師（1 名）は救急外来薬剤部で活動
　　＊薬剤部は 4 つの部署に分かれている
　　＊処方箋を読むことが困難
　　＊一日 50～60 件の処方あり
　　＊入院調剤の状況を見学

＊病棟にいる臨床薬剤師との連携の可能性（月曜日以降）

3)透析

・透析を受けた患者の総数 71 名

・供与された血液透析機（計 9 台）

＊ 日本政府から緊急無償資金協力で 4 台

（ニプロ 4 台：1 台は 5/23 納入 5/24 稼動、3 台は 5/24 納入 5/25 稼動）

＊ 民間から 5 台

（ニキソー5 台：5/23 日納入 5/24 稼動）

・佐々木臨床工学技師の活動

＊ 供与された血液透析機器の配管工事の支援 2 件

＊ 日本の臨床工学技師はメカニカルではなくメディカルであると説明をして血液透析のプライミング（回路の組み立てとセッティング）を実施、薬剤投与、接続は現地看護師が実施し、透析中の患者管理を行った。

＊ 供与された血液透析機は、簡便で使いやすいと現地看護師に好評

・看護師の活動

＊ 血液透析実施中の患者のバイタルサイン（血圧や脈拍など）のモニタリング、傾聴など看護ケアを実施

・長谷川医師の活動

＊ 当初、透析室の医師の誤解があったが、活動目的を伝えたところ非常に好意的に受け入れられた。

＊ 透析室の医師より災害医療の経験や知識を提供して欲しいと強い希望があった。（クラッシュシンドロームの患者への血液浄化法の選択、四肢切断の判断基準に関する資料提供、臨床での切断時期の判断などについて協力を求められた。華西大学病院だけでなく中国全体への啓発につながるとの見解であった。）

＊ 具体的な方法としては透析室での患者カンファレンスへの参加という方法があると提案された。

4)ICU　8 床満床

・ 全体の活動の流れは変わらず

＊清拭、口腔ケア、体位変換、吸引などを実施（原則的には吸引は中国スタッフと一緒に）

・ 中国語を練習してベッドサイドでケアを実施。

＊効率的にケアできるように徐々に単独で行動

・ 薬剤投与や記録はできないが、ケアをサポートし現地看護師の負担の軽減に貢献

・ 日中の看護に関する意見交換

＊ 効果的な体位変換（褥瘡予防、肺合併症予防目的）の方法について提案し、実施に必要な枕を準備してもらえるこことなった。

＊ 感染予防のための手洗いについて（手洗いの手技は適切であるが、乾燥方法が不十分であるためペーパータオルの設置を提案し実施された。

＊全患者の血圧測定が一律 15 分毎となっており、不必要な圧迫や皮膚トラブルの原因となりかねないため必要に応じた間隔にしてはどうかと提案。

5)産科病棟

・全入院患者数 16 名（転院が進み廊下のベッドはなくなった）

・沐浴を見学したが、方法が異なるため協力は困難と思われた。

・点滴の介助、検温の実施

・乳房ケア・授乳指導

＊5/23 にケアを行った褥婦の乳房状態の評価（乳房状態が改善、退院へ）

＊褥婦の乳房ケア（搾乳の実施と搾乳指導）

・日中の産科ケアのあり方について意見交換

3.通訳さんから
(ア)最近のテレビで心のケアについて報道している･･･患者さんへの質問については注意をしたほうがいいのではないか。
(イ)救急外来に搬入された 5 分間は問診の時間なので、患者さんへの質問は遠慮したほうがよい。
(ウ)中国語を勉強している長谷川先生に感動した。
(エ)通訳をしていると患者さんから感謝の意を表明される。
4.連絡事項
・ 植村氏、李氏が JICA 中国事務所より着任
・ 新たに参加する通訳、李氏の紹介

5 月 25 日（日）

1.加藤副団長より
・広報関係について
2.活動報告
1)救急外来
①医療チーム
・隊員 5 名は救急外来で診療支援
＊救急外来での医療支援活動
・被災患者の搬入が多かった
・福建省への広域搬送が行われた。
・打出医師が救急外来看護師と
・電子体温計、ペンライト、超音波診断装置を提供。
・医師は 2 名の患者の超音波診断を実施
②放射線技師（2 名）は放射線科で活動
・現地スタッフとレントゲン撮影を実施
・上司の指示があって画像の質が上がった。
・余震で避難しようと飛び降りて骨盤骨折した患者がいた
③薬剤師（1 名）は休日
2)ICU
・ 全体の活動の流れは変わらず
・ 体位変換用のクッションが準備され効果的な体位変換が実施できた。
・ 褥瘡
・ 足浴、手浴
・ 関節拘縮予防のための関節可動域訓練を実施（1 名）
・ 中国側スタッフが常用日中文対照表よくつかう日本語を作ってくれた
3)臨時 ICU
・天津、ハルピン、日本の混成なので情報交換、互いに協力し合いながら実施
・看護レベルには、大きな差はなく共通であることを認識する
・業務分担
＊清拭、口腔ケア、体位変換、吸引、足浴、手浴などを実施
＊多くの謝辞の言葉が聞かれた。
＊廃墟で 5 日、骨盤骨折、帝王切開　死産
・検査データの単位が異なるので留意して活動する

4)産科病棟
・スタッフが十分配置されていた
・　汶川、テントで出産した。子供は NICU に入院中
　面会は週 1 回
・39 週綿竹から。不安から腹緊、退院後に帰る家がないことが心配、明日、現地ナースに相談する旨を伝えた。

3.その他
（ア）明日の早出の確認（5 月 26 日）
透析（佐々木、高野、小倉、森野、長谷川＋通訳　李氏）
放射線（藤本、金子、通訳は現地で集合）

・今後の活動の方向性について
＊　明日、病院長と医療行為の範囲を確認、協議
＊　医師免許については問題ではないのではないか？
＊　外国人でも免許の書き換えが可能
＊　病院側の安全管理上の問題ではないか
＊　巡回診療の実施を打診し検討するという返答であった。
＊　原則的な方針としては、活動拠点は華西医科大学病院
＊　学生対象の講義についての調整も行う
＊　資器材の供与
＊　薬剤は消毒薬もだめかどうかを確認してほしい
・各国の活動について
＊　ロシア･･･膨州市
＊　イタリア（20 人程度）･･･綿竹で移動病院、その後寄付
＊　キューバ･･･四川省第一人民病院
＊　マカオ･･･成都市第三人民病院
＊　パキスタン･･･甘粛省

<u>5 月 26 日（月）</u>

1.活動報告
配置変更について
小倉医師・森野医師は整形外科病棟へ
1)救急外来
・隊員 3 名（打出、日下部、山崎）は救急外来で診療支援
＊　昨日の余震で受傷した患者が搬入されている。
事例）被災地の病院が停電でレントゲンが撮れないため転送
事例）ビルの爆破で骨折などを受傷（2 名）
＊　被災地からの転院搬送も続いている。
事例）3 階から転落し脊髄損傷に（臍下部以下の麻痺）
＊　プラスチックギプスのカットおよび現地医師へのギプスカッターの使用法指導
＊　患者家族の希望で CT 画像診断（2 名）
＊　昨日で国内ボランティアが救急外来から撤収
2)ICU（第 1 病院）
・看護師 2 名（高田、家田）

＊ 体位変換
＊ 関節可動域訓練実施（1 名）
＊ 創傷処置（マイナー）が行われていないため明日から創傷処置を行っていく予定。
＊ 通訳の李さんがケアに参加（マッサージ）
＊ 歯ブラシを使ったマウスケアを実施

・医師 1 名（長谷川）
＊ 栄養管理・水分管理、多臓器不全患者の管理などについて意見交換
＊ 左全肺野透過性低下、縦隔の左方偏位を認めた患者について現地医師と協議し人工呼吸器の設定を変更した。（Peep を 3 cmH_2O から 8 に変更）

3)臨時 ICU（第 4 病院）
・看護師 2 名（大山・宮本）
＊ 清拭、呼吸ケア、体位変換、関節可動域訓練および患者へのリハビリ指導、口腔ケア（患者の希望で歯ブラシを用いて実施）
＊ 天津のナースから日本で行っている方法でケアを実施して下さいと提案された。
＊ ケアを行っている中で、天津のナースとの交流が深まっている。
＊ 徐脈（心拍数 30～40）の患者（小人症）について現地医師に相談。担当医師から循環器医師へのコンサルトし心電図検査が実施された。
的確な判断、真面目で丁寧な患者対応に対して現地医師から評価され感謝の意を示された。

4)放射線科
放射線技師（2 名）
・朝のミーティングに参加
＊ 一般撮影の分野、部長、課長も参加し感謝のことばをいただき自己紹介
・ 現地スタッフとレントゲン撮影と現場での指導を実施
＊ 経験の浅い放射線科技師が藤本さんとともに配置されている様子。患者の移動を手伝わない、説明が不足、撮影後の身支度の援助の不足などについて意見交換を行った。
＊ 日本でのやり方を見ていただき、患者の移動方法が直ぐに現場で取り入れられた。（ストレッチャーからの検査台へ抱きかかえて移動していたが、シーツなどを使ったスライド移動を指導）
＊ 創外固定など装具の確認はせず骨折部だけの撮影をしている。（撮影部位の判断は技師が行う）指導
＊ ぜひ持っている技術を伝えて欲しいという要望あり実施。指導に対して受入れは良好で、指導したことは次からそのように実施されている。

5)薬剤部
薬剤師（1 名）
・神経内科の病棟へ
＊ 平均在院日数 8.9 日なので退院時に服薬指導を現地薬剤師が行っている
＊ 中国の方は、内服よりも注射を希望するので処方する頻度が高い
・皮膚科病棟（被災者 1 名）
・現地薬剤師の要請により、明日、緊急援助隊の薬剤師の役割についてプレゼンテーション予定。

6)透析
・医師 4 名
＊ 切断のガイドライン、クラッシュシンドロームについての意見交換、事例検討 1 例

・看護師
　＊　透析実施中の患者のモニタリングやケアの必要性について透析室看護師と意見交換、指導。
　＊　災害発生直後の対応について意見交換
　今回の地震発生直後の対応について現地の透析室看護師は、透析を中止、患者の安全を確保して避難をした。
・臨床工学士技師
　＊　プライミングをしながら穿刺の方法などについて意見交換
　現地看護師から多くの質問が寄せられ対応した。
　＊　ブラッドアクセスカテーテルの脱血不良時の対応を指導(カテーテルが屈曲しない体位保持)
　＊　ブラッドアクセスカテーテルの接続部をイソジン消毒はしているが、消毒部の清潔保持が不十分であると改善を提案した。
7)産科
助産師１名
・39 週陣痛待ちの患者について、担当看護師への情報提供
　＊退院後帰宅困難者を収容している敷地内テント（2～3 日用）は適切ではないと思われるが、他に病院で紹介するシステムはない。被災により居所がない人の退院後の生活に関するボランティアが相談に応じているので、そちらを紹介することとした。
・乳房ケアを実施した褥婦の乳房状態の評価
・現地の看護師の乳房ケアの実施
・他の産科病棟見学
・悪露交換　胎動カウント
・羞恥心に対する配慮がやや不足しているように感じている
8)整形外科
・整形外科部長と医療支援について協議
　＊　次の患者受入れのため、転院搬送を進め現在は空床がある状態
　＊　腰椎骨折、四肢の骨折患者などが入院
・感染、壊死の患者のガーゼ交換を実施
・骨折後の壊死などの創処置を担当できるよう調整予定
9)本部
・看護部長と面談
　＊JDR 受入れの全体の責任者
　＊学生に対する講演については、胡氏からの連絡待ち
　（こちらの希望は木曜日）
　＊資器材の供与はチームでリストを作成
　活動終了時よりも滞在中に供与したほうが印象がよいとの示唆をいただいた
・　メディア対応
　＊今朝、フジテレビの目覚ましテレビ
　＊余震、ダムの決壊が日本ではニュースになっている
　＊明日、透析室にカメラ（3 台）朝、加藤さんが透析室へ行き調整
・中国スタッフとの交流の中で感銘を受けたところ
　＊　看護部長の判断力、行動力
　＊　患者と家族の絆の深さ
　＊　感謝の言葉を忘れない
・連絡事項
　＊　日本人留学生から通訳ボランティアの申し出があった

＊　透析室にもう一人通訳さんが必要･･･李達章氏
＊　日中友好病院胸部外科から宋之乙氏が通訳ボランティアでチームに参加

・団長より
＊　活動の広さ、奥行きを感じた、病院の受入れ、相互理解が進んでいる
＊　メディア対応の難しさ
＊　活動の奥行きが深まり気づかなかったことに気づくが、プライバシー、衛生面など慣習、文化、背景からくる違いがあることを理解して活動していく必要がある。

・石井ＣＮより
＊　翌日の早出の確認･･･透析２名（佐々木、高野）＋通訳１名（張）
整形２名（小倉、森野）＋通訳１名（宋）
＊　休日の調整について
火曜日…ロジ１名
水曜日…ICU①2 名、外来３名、ICU②、鈴木
木曜日…放射線２名　産科１名

5 月 27 日（火）

1.連絡事項
大使館から西書記官派遣
等々力書記官が明日昼に北京へ
2.活動報告
1)救急外来
・隊員４名（打出、日下部、山崎、長谷川）は救急外来で診療支援
＊　全体に静かな一日で通常通りの活動であった
＊　余震で受傷した患者が搬入された（下腿骨骨折）
＊　超音波診断装置の供与について山崎氏が超音波検査室主任と調整

2)ICU（第１病院）
・看護師２名（高田、家田）
＊　本人、家族の希望もあって現地スタッフと調整し通常は行っていない洗髪を実施。（1 名は現地の主任自ら実施、１名は JDR 看護師が実施）
＊　7 名の意見交換
・医師１名（長谷川）
＊　栄養管理・水分管理、多臓器不全患者の管理などについて意見交換
＊　左全肺野透過性低下､縦隔の左方偏位を認めた患者について現地医師と協議し人工呼吸器の設定を変更した。（Peep を３cmH_2O から８に変更）

3)臨時 ICU（第４病院）
・看護師２名（大山・宮本）
＊　綿陽地区からの転院搬送あり
＊　6 名の患者を担当し、清潔のケア（手浴、足浴、石鹸清拭、洗髪）
＊　ケアすることで患者さんの表情が変化するプロセスを感じ取ることができた。
＊　今日は中国のやり方を見学してともにケアを実施
＊　ハルピンの看護師との意見交換を実施
＊　患者さんに対する関わり方に感銘を受けた。

4)放射線科
放射線技師（2 名）
・通常通りの活動
・通訳なしでの活動、英語でコミュニケーションをとったことでむしろ距離が縮まった印象

があり、昼食を現地スタッフとともに食堂でとった。
・マンモグラフィーの撮影状況について視察
・レントゲン撮影方法についての相談
＊現地放射線技師 4 名と指の関節の撮影で曲げるか、伸ばすかについて検討
＊技術部長を含め 5 名の技師と手首の撮影で 1 方向か 5 方向かについて検討
5)薬剤部
薬剤師（1 名）
・整形外科病棟へ
＊　被災者の方の訪問
＊　7 名の患者さんと
下肢切断　青川からの患者、救助チームが入っていた地域
＊　鎮痛剤の使用法について意見交換
1 級、2 級、3 級　鎮痛剤の管理が厳しい、調達も困難
＊　16 時から薬剤師 35 名を対象とした勉強会
ＪＤＲ
日本での薬剤師の業務拡大についての内容を紹介
6)透析
・看護師
＊　連日と同様に 3～4 名のクラッシュシンドローム患者のケア
・臨床工学士技師
＊　シャントの穿刺 2 名
＊　プライミング、透析管理
＊　血液透析中の管理について意見交換
中国では決められた条件での透析を行っているが､日本ではデータの推移を見ながら実施していることを紹介
＊　アレルギー（嘔気、悪寒、発熱）の患者について医師から相談
日本では経験のない症例（再使用のダイアライザーが影響しているのか？）
・16 時から代表取材が透析室に入り
7)産科
助産師 1 名
・通常通りの活動
（乳房ケアなど）
・NICU で光線療法を受けている子供が嘔吐したと聞いて心配している母親のケア（児の状態を直接みてきて心配ない旨を母親に伝えた）
・分娩誘発中の産婦のケア
・分娩室のオリエンテーションおよび意見交換
・新生児用に電子体温計を病棟に持参
8)整形外科
・7 時 45 分から脊椎グループのカンファレンス、12 名の回診
・患者数が減少しているので、森野先生が救急、小倉先生が本部へ
9)本部
・明日 18 時 30 分から病院長主催で食事会　全員で参加して欲しい
（参加者は国内の支援者）
・帰国の時期は、当初の予定通り
＊病院での活動は 5 月 31 日（土）まで
＊6 月 2 日(月)　8:00 成都ＣＡ４１１３　10:30 北京着　15:20 北京発　19:50 成田着の予定（不確かなので口外しない）
・意見交換、相談など現地スタッフとの交流件数、対象スタッフ数の集計を加える

5 月 28 日（水）

1.連絡事項
・　都江堰の視察
　6 名（団長、森野、打出、日下部、佐藤、石井）
　明日、隊員への視察報告
・　帰国に向けて機材の引渡しの準備
・　Ｘ線装置、生化学分析機器を日本に空輸

2.活動報告
1)救急外来
　特になし
2)ICU（第 1 病院）
　医師
・ＩＣＵ　8 床　5 名
　医師とのディスカッション
3)臨時 ICU（第 4 病院）
　休日
4)放射線科
　99 人の撮影
　現地スタッフの要望があったので藤本氏が日本の方法で撮影
　成都テレビの取材対応
5)薬剤部
薬剤師（1 名）
神経内科視察
6)透析
・看護師
　＊　17 人のモニタリング、ケア
・臨床工学士技師
　＊　シャントの穿刺介助 5 名、穿刺実施 1 名
　＊　内シャント手術、透析機の水処理について意見交換
7)産科
助産師 1 名
・９名患者のケア
　＊産婦のケア（分娩室入室前まで）、回旋異常のため帝王切開となった。
　＊通常通りの活動（乳房ケアなど）

3.その他
・差入れ物を各部署へ寄贈
・明日、四川省の食事会
・ボランティアの方へのお礼の食事会を予定
・ホテルの支払いについての説明
・6 月 1 日（日）の活動予定に基づき通訳さんの滞在期間を調整

5 月 29 日（木）

１.活動報告

1)救急外来
・救急搬送
・超音波科の 12 名を対象にＦＡＳＴの指導（16 時～17 時）
＊超音波科 19 名の医師と 7 名の技師で構成
＊中国では超音波検査の実施には医師であっても資格が必要

2)ICU（第 1 病院 11 階）
看護師
・入室退室患者は内因性疾患の術後患者
・83 歳女性　クラッシュシンドロームの患者が死亡（夫が掘り起し担いで下山、人民解放軍に救助された患者）
・活動の成果
＊口腔ケアを歯ブラシで実施することが定着した
＊膝の拘縮がある患者の関節可動域訓練を実施し 120 度まで屈曲可となった。その様子を見て現地看護師も実施するようになった。
＊HANDY CAP もリハビリ支援に入っているが対象者が多く、ICU などベッドサイドでのリハビリに十分な対応ができていない状況である。
＊浅い傷のガーゼ交換
消毒薬を使用せず蒸留水で洗浄し、蒸留水のウエットガーゼで湿潤環境を保ったことで肉芽増殖を認めた。壊死部については現地医師に提案してデブリートメントを実施してもらい最終活動日の土曜日に評価する予定。
・静脈栄養・経管栄養が行われ、低栄養は認められていない印象
・左肺無気肺の患者の気管支鏡が実施されたが、ポリープの生検が実施され無気肺の改善は認められなかった。
・北京からの救援にきていたスタッフは今月末で撤収、本日、吉林省から看護師 2 名が救援に。
医師（長谷川、宋）
・治療方針のディスカッション

3)臨時 ICU（第 4 病院 8 階）
看護師
・中国スタッフとともにケア中心に関わった
・天津からの看護師からの情報
＊5 月 16 日（発災 4 日目）～5 月 25 日（13 日目）青川へ 200 名で医療救援活動実施
＊テントでの診療活動、巡回診療を実施した
＊重症患者はおらず中軽症患者であった（下痢、熱中症、皮膚病、心理的ストレス）
4)放射線科
休日
5)薬剤部
薬剤師（1 名）
・結核病棟　被災地からの患者 2 名
・DOTS 形式について
＊病院では一日分を本人に渡し本人管理
＊退院後の管理は地方の医療機関で行うので詳細は不明
・感染症病棟
＊医師のレベルによって抗生剤の使用が制限されている

＊検査が行われず抗生剤が処方されている場合には医師に通達される
＊抗生剤の管理については、感受性検査と処方内容が妥当であるか薬剤師が確認している。平時は事前に確認するが、現在は患者が多いいため事後の確認となっている。

6)透析室（第 3 病院 2 階）
・看護師
＊　クラッシュの患者が回復してきている。（尿量の増加、浮腫の軽減、患肢の回復、足背動脈の触知良好など）
＊　16 歳の女性が上海へ転院
・臨床工学士技師
＊　透析介助
＊　透析の手技的なトラブルへの対処
＊　トラブルを解決してからアラーム解除を行うことなどを指導
＊　機械（ドイツ製）のメンテナンスをエンジニアと実施。エンジニアとの信頼関係が構築されてきている。
＊　佐々木氏の所属組織の透析室の写真をお見せし、透析機器や機材、手技などについて質問があり、スタンダードプリコーションを徹底した透析の実施状況に興味を示した。

7)産科
休み

3.その他
・報告書について（骨子を各部署のリーダーに）
・帰国日の宿泊について
・講義　5 月 30 日（金）15 時～17 時　森野、石井
・明日 9 時、病院長がテント視察
・外交部長（外務大臣）10 時～10 時半
・都江堰視察報告
・5 月 30 日（金）ボランティアの方を招いて食事会
・6 月 1 日午前、テント撤収、病院に報告

<u>5 月 30 日（金）</u>

ボランティアの方々への感謝食事会のためミーティングは中止としたため、活動報告書からの要点を以下にまとめる。

１.活動報告
1)救急外来
・3 名の隊員（打出、日下部、山崎）が診療活動支援
・200 名くらいの山の集落から軍のヘリで救助された患者が搬入（2 名）
＊5 月 12 日の地震発生後、歩行可能な人は下山した。10 数名が山に残り、そのうち本日搬入された夫婦以外は死亡した。夫婦の子供は行方不明。
・救急外来副主任と意見交換

2)ICU（第 1 病院 11 階）
看護師 2 名（高田、家田）
・看護ケアの支援活動
＊清拭・気管切開部消毒・口腔ケア・体位変換・挿管介助
・意見交換
＊　創傷ケアや気管切開部の管理について
＊　栄養管理

＊　気管挿管中の患者の苦痛について協議し、鎮静剤を投与することとなった。
・活動の成果
＊より効果的な体位変換、口腔ケアの方法が定着した。

医師（長谷川、宋）
・左肺挫傷、左全肺野無気肺の患者の病態評価、治療方針に関するディスカッション
＊気管視鏡の実施を提案し受け入れられたが､本来の目的であった検査治療は行われず、むしろリスクを高める処置の実施となった。
＊最終的に現地医師は左肺全摘術を実施することとした。

3)臨時 ICU（第 4 病院 8 階）
看護師 2 名（大山、宮本）
・看護ケアの支援活動
＊清拭・手浴・足浴・陰部洗浄・吸引・創傷ケア・関節可動域訓練・体位変換
・勉強会の実施
＊褥瘡ケアについての資料を配布
・看護ケアについて意見交換

4)放射線科
放射線技師 2 名（藤本・金子）
・X 線撮影の実施
・撮影方法、撮影時のポジショニングの指導
5)薬剤部
薬剤師（1 名）
・救急外来での調剤補助
・整形外科病棟視察、被災者の慰問（10 名）
6)透析室（第 3 病院 2 階）
・看護師 1 名（高野）
＊透析実施中の患者ケア（バイタルサインなど患者の状態をモニタリング）
・臨床工学士技師 1 名（佐々木）
＊　透析準備、実施に関わる介助
＊　透析機器、透析中の患者管理に関する指導

7)産科
助産師 1 名（疋田）
・新生児ケア（沐浴）の介助
・褥婦のケア（乳房ケア、授乳指導、検温）

<u>5 月 31 日（土）</u>

・明日の予定
明日 9 時 15 分出発
院長、各部署の責任者が出席
式次第･･･挨拶、機材の引渡し
その後撤収 12 時までに

午後 5 時 30 分　四川省政府外事弁公室　宿泊のホテルで報告、挨拶
中国側の招待で夕食

20 時 30 分～記者ブリーフ

・　帰国日の予定･･･変更なし
・　北京での予定
　　大使公邸を訪問予定（1 時間）昼食
・　ホテルの清算は、明日中に済ませる
・　チーム予算の変更について

１．全体の活動の振り返り
1)救急外来
打出
・最後までフィールドにこだわる気持ちはあったが、調整はしてもらったので満足はしている
・相手国のニーズに応える活動ができたのではないかと、被災地であっても成都であっても結果的には被災者に貢献できると思えるようになった。
森野
・副産物として病院支援の問題点を探る好機となった。
・どんな支援ができるかということを模索して、少しずつ明らかになった。
・中国政府の災害対応、広域搬送が 3 日でできたということは日本も参考になる
日下部
・病院研修のような時間となった。
・広域搬送に参加して、ドクターカーシステムは素晴らしいと思った
山崎
・できることをやりましょうと言ったが、うまく見つけられない葛藤があった。
・とりあえず目の前の出来ることをやった。
森田
・言語の違いから調剤には介入が困難であった。
・不足な薬剤の調達支援も考えたがニーズはなかった。
・緊急援助隊ではなく長期支援ができればと思う
金子
・機器や装置と変わらないので抵抗なく現場に入れた。
・指導まではできなかったが、情報交換はできたので有意義であった。
藤本
・後方支援、今後の検討材料

ＩＣＵ第 4
大山
・不満はない、理由は、ＪＤＲ本来の目的　日本の税金、国民の代表として日本の気持ちを伝える
・テントでの医療活動という範囲だけではなく、広い視点で捉える
・ニーズがあれば何でもやる
・日本の看護師の実践を見習う、感じてもらえた
・現地のナースとの友好が成果
・患者が泣きながら感謝
・通訳の学生さんが意味を解釈して伝えてくれた、心のつながり
宮本
・テントと病院で何が違うのか？
・看護師としてできることがあると感じた

・通訳が活動しやすい環境を作ってくれた
・ケアで気持ちがいいということを患者さんに感じてもらえることで、言葉意外に気持ちを伝えられると思った。

ＩＣＵ第一
高田
・人工呼吸器管理の患者が多い環境であったが感謝を伝えられた
・治療と看護は密接で、治療方針に関しては葛藤があった。
・自分たちが受けいれなければならない現実
・最新のケア方法を伝えることができた。影響が残せたらと思う
・好意的に受け入れられた
・方法は異なるが人道援助という本来の目的は達することができた

家田
・イメージしていたものとは異なったが、自分の気持ちを切り替えるかと考えた
・他国の大学病院で 2 週間実践できる貴重な経験
・災害支援という目的なので、技術や知識の供与は期待してはいなかったが、看護を中心に実践した
・押し付けるのではなく、自分ができるケアを実践してモデルを示すようにした。
・現地のナースが関心を持ってくれ、現地のナースが自ら実践してくれるようになった。

透析
佐々木
・施設、設備があっての仕事
・手を出さないほうがいいのではないか、一緒に仕事をしたいという葛藤
・現地の看護師が徐々に受け入れてくれ実践につながった。
・今後の課題を整理していきたい

高野
・何ができるのかでスタートした 20 日のディスカッションがあったので最終までモチベーションを持続できたと思う
・看護師としてすべきことを実践モデルとして示すことができた。

産科
疋田
・ＪＤＲの主旨を考えると産科にいきたいという思いを理解されているのか心配だった
・被災した妊産婦を中心に自分ができることを実践しようと考え活動した
・助産師のニーズを検討し、最善の支援をすることができたと評価している
・日本人は親切だということだ
・子供に日本語を勉強させる、日本語でメールを送らせると

長谷川
・2 回目の派遣、1 回目はフィールド、今回は院内
・戸惑いが強く、撤退したいといった自分が今思うと恥ずかしい
・辛抱強くやってきて、何がというのは？達成感ははっきりしないが、やってよかったと感じている。
・今後の発展につながるミッション
・今後の人生設計にも参考なった

・患者　25 歳の肺、生命を救おうと思って頑張って、摘出にならずにすみそう
・ＪＤＲ　日本の国を代表しているという責任感、マスコミなどを含めて自己管理が必要

小倉
・　難しいミッションだと感じた、どうやってオペレーションしようかと考えた
・　一人ひとりが、不平不満を言わず活動してくれたと感激、感謝している
・　ロジスティックの方に感謝
・成果、中国の人々から感謝されたことだと思っている

石井
・　はじめに温度差があった
・　今後に発展に
・　災害医療は経験

鈴木
・　この活動がよかった
・　被災地、被災者に携わっている方にためになった
・　事前（派遣前に）に調整できることはなかったのかな

野田
・　できるだけスムーズに活動をして欲しい
・　今回のことを次に生かせる
・　被災者の方と直接関われなかったが、多くの出会いがあった

市原
・　実は病院支援について、長く関わっているひとには積極的意見が多い
・　研修内容に加える必要を感じた
・　被災国から求められる形態にしていく
・　医療活動終了した時点が気を緩めがち

佐藤
・　幅広く、先を見越して動ければよかった
・　いい経験ができた

加藤
・　外交的成果･･･成功だった
・　JICA としての成果･･･活動の成果
　　第一人民病院を選択しなかった、ベストの支援
　　苦難の道（ニーズない情報、メディア、）
・　まとまり･･･いろんな問題がある中で、どう調整するか、悩んだが
・　日本のマスコミはネガティブな印象
・　中国のマスコミは美談
・　中国だからではなく、災害の起きたところには行く人道支援の真意が伝わった

田尻団長
・　JDR、ODA の専門家ではないが、できることを行った。日本、中国の国民の反応が評価となると思われる
・　中国側の感謝、極めて重要。

- 活動サイトが決まらず心配したが、華西病院での活動は、成果を挙げた。
- チームワークがいい、貢献している、余震があるのにボランティアで来てくれて、と中国側スタッフが感動、患者との間で友情が生じた。

（２）現地活動報告書

平成 20 年６月１日

中華人民共和国外交部
四川省人民政府

国際緊急援助隊医療チーム
団長　　田尻　和宏

報　告　書

2008 年 5 月 12 日 14 時 28 分に発生した中国西部大地震につき、日本国政府は中華人民共和国政府と協議の上、国際緊急援助隊派遣法に基づき、同年 5 月 19 日、国際緊急援助隊医療チームの派遣を決定した。

今般、同援助隊の活動終了に当たり、以下のとおり報告する。

記

１．派遣期間：　2008 年 5 月 20 日より 6 月 2 日まで
２．派遣チーム名及び人数：国際緊急援助隊医療チーム 23 名（メンバーリスト別添）
３．活動概要：

医療チームは 5 月 21 日、協力候補の成都市第一人民病院を視察し、病院の現状の説明を受けた。その結果、被災地からの搬送患者数が少ない等の理由から中国側と協議し、再検討を依頼した。翌 22 日午前、中国側より提示のあった四川大学華西病院を訪問し、震災負傷者に対する病院活動概況の説明を受け、同病院を活動場所とすることを日中双方で確認し、22 日午後より活動を開始した。医療チームは病院側のニーズと隊員の専門性を勘案し、適宜、中国側と配置等の調整を行いつつ、救急、ＩＣＵ、血液透析、産科、放射線科、薬剤等で病院スタッフとともに活動を行った。

活動期間中、病院スタッフとともに携わった救急外来者数は 250 名を超え、入院患者数は 280 人日、レントゲン写真数は 700 に及んだ。また、30 日午後に実施した「災害時における日本の急性期医療」講演を始めとして、レントゲン撮影方法、超音波エコーの使用方法、緊急医療隊における薬剤師の役割などについて、各配属先での技術交流、経験やノウハウに関する情報交換も多数実施された。これらの活動及び交流を通じ、相互理解が増進され、救急医療分野における日中協力が促進された。

また、活動期間中、5 月 24 日、温家宝国務院総理が華西医院を慰問に訪れた際、日本の緊急援助隊医療チームに対して、「救助チームの派遣に引き続き、医療チームを派遣する等、中国が非常に困難な時期に助けてくれて感謝する」旨の言葉があった。楊潔篪・外交部長、王毅・外交部副部長、高強・衛生部副部長からも日本の医療チーム派遣への謝辞が述べられた。

医療チームは病院内に事務・後方支援・広報のためのテントを設置したが、多数の市民が訪れ援助隊の活動に関心を示すとともに、通訳ボランティアの申し出や日本の援助隊に対する感謝と激励の言葉を多数いただいた。

最後に、今回の地震に見舞われた中国政府および中国国民の皆様に対しお見舞い申し上げるとともに、震災で亡くなられた方に心より哀悼の意を表します。また、多大な支持・協力をいただいた中国外交部、衛生部、四川省人民政府（外事弁公室、衛生庁）、中国紅十字会、成都市人民政府（外事弁公室、衛生局）、四川大学華西病院等、各方面の関係者に対して心より感謝申し上げる。

４．主な活動内容

(1)四川大学華西病院内各部門での活動（病院スタッフとともに実施）

１）救急外来（隊員６名）

・延べ約 253 人の災害関連患者（脊椎骨折、脳挫傷等、骨折、外傷の重傷者など）に対し防疫、救急診療、救急看護を行う他、広州や福建省など地方への患者の空港搬送に同乗。

・外傷患者の初期診断における超音波エコーの活用方法を実演・説明。

・「薬剤師の災害救援医療チームにおける役割」を医療スタッフ 35 名に講義。

２）ICU（第１病棟１１Ｆ：隊員３名、第４病棟８Ｆ：隊員 2 名）

・ 延べ約 88・日の患者を担当。

・ 体位変換の方法、合併症予防（肺、関節拘縮、床擦れ）創傷ケア等についてのアドバイスを実施。

・カンファレンス参加、各患者の症例検討、および患者回診。

３）放射線科（隊員 2 名）

・ 延べ約 700 件の患者の一般撮影を担当。

・ 日本における放射線技術についての意見交換、撮影技術紹介等を多数実施。

４）透析室（隊員２名）

・ 延べ約 99 人・日の患者をケア。

・ 日本政府の緊急無償援助による人工透析器 4 台と日本の民間支援による新規人工透析器 5 台の計９台を中心に、透析器の回路組み立て、洗浄等機材の管理・運用を行うとともに、日本の透析器管理の方法等を説明。

５）産婦人科（隊員１名）

・ 主に被災者対象病室を中心に延べ約 96 人・日の患者をケア。

・ 乳房ケアと授乳指導を患者に対し実施。

・ 日中双方の産婦人科の現状について意見交換を実施。

（２）四川大学華西病院での講演

5 月 30 日（金）午後　「災害時における日本の急性期医療」講演を実施。200 名以上参加。

（３）都江堰医療関係施設等視察

5 月 28 日（水）午後　都江堰の中徳紅十字会野戦医院、幸福路仮設住宅内診療所等を視察

以　上

別添：国際緊急援助隊医療チームメンバーリスト（略）
　　四川大学華西病院内各部門での活動実績一覧表

日本国際緊急援助隊医療チーム活動実績一覧表

		5月22日	5月23日	5月24日	5月25日	5月26日	5月27日	5月28日	5月29日	5月30日	5月31日	各部署　総数
救急外来	総患者数	280	247	278	316	379	300		308	379		
	内　災害関連患者数	84	43	50	52	78	16		31	49	20	339
	関わった患者数	10	23	23	38+&	67+&	16+&		19	30	20	125
	意見交換・相談件数/対象者総数	2/6	3/8	3/12	2/10	2/7	2/8		3/10	5/15	4/18	28/99
ＩＣＵ（第１）	入院総数／入室数／退室数	7/0/0	7/1/1	8/1/0	7/0/1	8/1/0	7/3/4	8	7/3/4	8/4/4	8/0/3	
	看護師担当患者数	0	7	8	8	8	8		7	8	5	59
	意見交換・相談件数/対象者総数	0	3/3	3/6	5/11	5/16	5/21		5/26	3/29	5/34	34/136
	医師担当患者数					2		5	4	4	4	19
ＩＣＵ（第４）	入院総数				9	10	12		14	15	15	75
	看護師担当患者数				3	2	6		6	6	6	29
	意見交換・相談件数/対象者総数				1/3	4/1	2/1	2/4	2/4	2/1	1/1	13/15
放射線科	撮影患者数			119	87	159	127	99		90	47	728
	相談件数/対象者総数			0	1/1	1/3	1/2	2/8		2/4	1/1	8/19
薬剤部・処方件数（業務時間内分）				救急処方		病棟支援	講演	病棟支援	病棟支援	病棟支援	透析・ロジ	
透析	臨床工学士プライミング数	0	0	2		6	8	8	6	4	6	40
	ＭＥ意見交換・相談件数/対象者数	0	1/5	0		1/2	0	1/1	2/2	2/2	3/9	10/21
	看護ケア患者数/相談数	2	10	7		10	13	17	15	10	15	99

	医師検討症例数					1		1				2
産科	入院総数／入院数／退院数	0	23	16	13/0/1	12/0/3	9/0/0	9/0/0		6/0/0	7/0/1	
	助産師　担当患者数	0	23	16	5	20	6	9		6	26	111
	意見交換・相談件数/対象者数	0	0	0	1/1	0	0	1/1		0	1/1	3/3
整形外科（医師）						20/創1名	12					32

6 月 1 日病院長から提示されたデータ

救援者　　日本、香港、台湾、アメリカ、など 11 カ国の国と地域
　　国内 30 医療施設の 358 人の専門家の支援

華西病院に搬入された　　2572 人
　　1713 人入院
　　1114 重症
　　102 名がＩＣＵに入院　生命維持
　　71 名　透析を受けた
　　1234 名手術を受けた
　　11 名死亡　　60 歳以上が 7 人、77 歳 1 名、84 歳以上 3 人

（3）供与資機材リスト

医疗物资

機材名（日本語）	器材名称（中文）	器材编号	数量（包）	备注
医療資機材	医疗物资	G 0205 ～ G 0207	3	详见附件
医療資機材	医疗物资	R 0202 ～ R 0211	10	详见附件
医療資機材	医疗物资	L 0101 ～ L 0112	11	详见附件、无 L0108。
折畳担架	折叠担架	M 0101 ～ M 0102	2	
車椅子	轮椅	M 0201 ～	1	
折畳診察台	折叠式诊疗台	M 0301 ～ M 0302	2	
超音波診断装置	超声波诊断装置（套）	X 0107 ～	1	
心電図モニター	心电图诊断装置（套）	X 0108 ～	1	

生活用品

機材名（日本語）	器材名称（中文）	器材编号	数量（包）	备注
日用品･文房具	日用品、文具	Y 0301 ～ Y 0304	4	
ブルーシート	防水布（蓝色）	B 0902	5	每包 6 张
折りたたみ式ベッド	折叠床（行军床）	B 0402	18	每包 3 张
折りたたみ式テーブル	折叠桌	B 0701	5	每包 5 张
折りたたみ式イス	折叠椅	B 0601	8	每包 4 把
毛布	毛毯	B 5201	1	每包 10 条
シーツ	床单	B 0801	2	每包 10 条
発電機(100V)	发电机	A 4203 ～ A 4204	2	
投光器	探照灯	A 2007 ／ A 2017	2	
コードリール	卷线盘	A 1613 ～ A 1614	2	每包 2 台、A1613 内装 3 台
ガソリン缶	汽油罐（不锈钢空罐）	B 4102 ～ B 4103	2	每包 2 台
浄水器	净水器	B 1101 ～ B	1	每包 1 台

簡易トイレ	简易厕所	B 1000 ～ B 1001	3	每包 2 台
雨合羽	雨衣	B 1401	1	27 件
長靴	雨靴	B 1501 ～ B 1502	2	20 双
クーラーボックス	冷藏箱	B 1201 ～ B	1	
圧力鍋	高压锅	B 1301 ～ B	1	
野営セット	野营用具（套）	B 5501 ～ B 5505	5	
食料セット	食品（套）	C 0201 C 0214	14	
食料セット	食品（套）	C 0701 ～ C 0714	14	

帐篷类

機材名（日本語）	器材名称（中文）	器材编号	数量（包）	备注
アキレスエアーテント	充气帐篷	B 0203 ～ B 0204	2	
ロッジ型テント	帐篷	B 0300 ～ B 0301	21	

（4）資機材の供与に関する受領書

寄贈

四川大学華西病院長　殿

2008 年 5 月 12 日に発生した中国西部大地震に対して、日本より派遣された国際緊急援助隊医療チームは、四川大学華西病院に対して下記の物資を供与いたします。

私たち医療チームは、一刻も早い被災地が復旧・復興されると共に、被災者の方々の生活の安定と幸福をこころよりお祈りいたします。

記

1. 医療物資
2. 生活用品
3. テント

詳細品目と数量は別紙のとおり

2008 年 6 月 1 日

田尻和宏

国際緊急援助隊医療チーム

団長　田尻　和宏

捐赠

四川大学华西医院院长先生

2008年5月12日中国西部发生了大地震，日本派遣了国际紧急救援医疗队，并向四川大学华西医院提供如下物资。

我们医疗队衷心祝愿灾区尽快恢复生产、重建家园，也虔诚地祈祷广大灾民生活稳定和幸福。

附记

1．　医疗物资

2．　生活用品

3．　帐篷

详细清单和数量另附

2008年6月1日

田尻和宏

国际紧急援助医疗队

团长　田尻　和宏

受領書

国際緊急援助隊医療チーム

団長　田尻　和宏　殿

四川大学華西病院は、国際緊急援助隊医療チームより寄贈された下記の物資を受領しました。

寄贈物資は今後、被災者の治療や支援を目的に活用いたします。

記

1. 医療物資

2. 生活用品

3. テント

2008 年 6 月 1 日

四川大学華西病院院長

石　応康

接收函

国际紧急援助医疗队

团长　田尻　和宏　先生

四川大学华西医院收到国际紧急援助医疗队捐赠的物资如下。

捐赠物资今后将用于灾民的治疗和救助。

附记

1．　医疗物资

2．　生活用品

3．　帐篷

2008年6月1日

石应康印

四川大学华西医院院长

石　应康

付録　報道記事

緊急援助隊及び日本からの支援に関する中国国内での主要報道状況

No.	月日	時間	メディア名	報道対象	報道タイトル	概要	全文訳
1	5/15	11:06	新華網他	救助チーム	外交部発表：中国政府は日本政府による被災地への救援チーム派遣に同意した	中国外交部スポークスマンによる日本政府からの救援チーム同意に関する速報。	
2	5/16	―	新京報他	救助チーム	中国が初めて国際的な援助人員を受入ー日本救援隊が始めて被災地に入ったー民生部高官曰くこれは「重大な進歩である」	中国政府が最初に国際救援チームの受入を決めたのが日本であり、日本の高度な技術力に大いに期待できるという内容。	添付①
3	5/16	3:53	新華網他	救助チーム	外国から初めて受け入れた日本の救援人員が成都に到着しこれから青川県に向う	5/16 早朝に日本政府が成都に到着した直後から随行を開始した新華社記者による速報。	
4	5/16	―	信報	救助チーム	日本救援隊が中国に到着	同上	
5	5/16	12:28	中国新聞網他	救助チーム	初めての日本の救援人員が青川県関庄鎮に到着	成都到着後、400km はなれた青川県に日本の救援隊が到着したことを報じる内容。	
6	5/16	15:54	新京報他	救助チーム	日本の救援隊が 7 時間をかけ、ようやく青川に到着	同上	
7	5/16	18:33	新華網他	救助チーム	日本の救援隊が青川県市街地で救援活動を行う	日本の救助チームが青川県到着後に母子の捜索を開始したことについての報道。	
8	5/16	―	中国青年報	救助チーム及び物資等の支援	私達から全世界に感謝の言葉を言わせてほしい	他国からの救援状況と併せて、日本についても歴史的問題等はあるが、今回の救援については感謝すべきという内容。	添付②
9	5/16	―	中国青年報	救助チーム及び物資等の支援	世界各国から絶え間なく被災地への援助が届いている	緊急援助物資の供与を含み、日本政府が 5 億円の支援を行うこと、その準備のために、JICA 中国事務所及び大使館関係者も成都に入って準備を行っているという内容。	

10	5/17	―	新華社他	救助チーム	すでに６カ国の外国救援隊が汶川地震被災区で救援活動を展開	大きい写真入りで救助チームによる活動状況を紹介。	
11	5/17	10:34	新華網他	救助チーム	日本の救援隊が２体の遺体を掘り出し遺体に黙祷を捧げる	母子の遺体に対して救助チーム全員が整列して黙祷している写真入りで活動状況を紹介。	
12	5/17	17:06	ブログ(香港フェニックステレビ記者)	救助チーム	日中は「新時代」を迎えたのか？	日本の救助チームに同行していた香港フェニックステレビ記者の個人ブログにおける日本の救援チームの活動状況及び日本が地震多発国であることの紹介。	
13	5/17	18:55	新華網他	救助チーム	命がけの３人の男達ー日本の救援隊は四川地震の被災地で困難を知りつつ前進する	日本の救助チームに同行していた新華社記者による救助活動の紹介。	添付③
14	5/19	―	China Daily(英字紙)	救助チーム	国際救援チームが協力して生存者を捜索	同上	
15	5/19	7:05	人民網他	救助チーム	「私達は一縷の希望も捨てない」ー日本の救援隊が四川被災地で発言	日本の救助チームが青川県と北川県で行った徹夜による救助活動の紹介。	
16	5/19	2:15	新華網他	救助チーム	日本の救援隊は中国側人員と協力しながら継続して困難な捜索活動に取り組む	日本の救助チームによる北川中学での救助活動の紹介。	添付④
17	5/20	17:44	中国新聞網他	医療チーム	中国政府はドイツ、イタリア、ロシア、日本の４カ国からの医療チーム受入に同意	中国政府が日本を含む４カ国からの医療チーム受入に同意したことを報じる速報。	
18	5/21	―	中国青年報	救助チーム	もしできるなら、彼らへ最後の敬意を	日本の救助チームが発見した母子２人の遺体に対して黙祷を行ったことについて感銘を受けたことを紹介する内容。	添付⑤
19	5/21	16:59	新民網他	救助チーム	日本警察庁が被災地で救援活動を行った警官を表彰	帰国後に警察庁から参加した救助チームが表彰されたことを紹介する内容。	

20	5/21	19:16	新華網他	医療チーム	日本の医療隊が成都に到着	23 名の医療チームメンバーが成都に到着したことを紹介する内容。	
21	5/21	―	中国青年報	医療チーム	ロシア及び日本の医療チームが成都に到着	同上	
22	5/21	13:57	中国新聞網他	救助チーム	日本の救援隊が帰国し歓迎を受けた生存者を救出できず遺憾	日本の救助チームが帰国し成田空港で歓迎されたことを伝える内容。	
23	5/22	7:37	信息時報	救助チーム	日本の救援隊 : 私達も多くの感動を受けた	日本の救助チームが四川省副省長と面談したことを伝えつつ、日本側も感銘を受けたという小泉隊長の言葉を紹介。	
24	5/22	16:10	紅網	救助チーム	日本の救援隊よ、遺憾に思うことはない	日本の救助チームが生存者を救出できなかったということを遺憾に思うというニュースを引用しつつ、遠い青川、北川で命の危険を冒しながら夜を徹して行った救助活動をたたえる内容。	添付⑥
25	5/22	10:48	新華網他	救助チーム	日本の救援隊が遺体に黙祷する様子を、私は横で涙を流しながら見ていた	日本の救助チームが母子の遺体に黙祷する姿に感銘を受けたことや、住民が食料やお湯を差し入れたり、成都に戻った際にも成都市民から拍手で歓迎された話などを紹介。	添付⑦
26	5/23	8:21	金羊網他	救助チーム	日本の救援隊員が帰国し、英雄として迎えられ、涙を浮かべて被災地のことを語った	日本の救助チームが日本に帰国後に空港で在日中国人に歓迎されたことや各隊員のコメントなどを紹介。	
27	5/23	15:34	中国中央テレビ	医療チーム	怪我をした女児が日本語で日本の医療隊に感謝の言葉を述べた	医療チームによる活動において、患者の女児が日本語でありがとうと言ったり、医療チームの看護師が患者を励ましている様子などを紹介。	
28	5/24	8:57	世界新聞報	日本からの支援全般	日本は全力を挙げて中国の救援を助けた　中日の戦略的互恵関係は強化された	日本政府のみならず民間など各界からの手厚い支援状況を紹介。	添付⑧

29	5/25	1:37	新華網他	医療チーム	温家宝首相が中国で救援活動を実施中のキューバと日本の医療隊員を激励	成都入りした温家宝首相がキューバと日本の医療チームと面会した様子を紹介。	
30	5/25	ー	新京報	医療チーム	日本は震災後の心理ケアにおいて長年の実績を有している	JICA 中国事務所から提供した資料を基に、阪神大震災時の兵庫県における精神面でのケアの重要性について紹介。	
31	5/31	ー	人民日報	医療チーム	共同の使命のためにー四川地震被災区における外国からの医療隊の活動を振り返ってー	各国から来た医療チームの活動状況を紹介。	添付⑨
32	5/31	ー	人民日報	救助チーム	20 年間において最も迅速であった出発ー日本から四川被災地の救援隊隊長として現地に入った小泉崇隊長を尋ねてー	帰国した救助チームの小泉団長を記者が訪ね、現地での住民との交流や緊急援助隊の概要についての説明を紹介。	添付⑩
33	6/1	ー	世界知識（雑誌）	日本からの支援全般	【特集】日本の救援隊が中国の地震被災地に入って	今回の日本からの支援を振り返り、中国国内でも非常に感謝の声が大きいことを踏まえ、今後の日中関係改善に向けた期待感を紹介。	添付⑪
34	6/3	ー	人民日報	ー	野戦病院を訪ねて	ドイツの野戦病院形式による医療活動を紹介。	添付⑫
35	6/4	ー	人民日報	医療チーム	日本の医療チームが中日友好に貢献ー駐日中国大使の発言ー	医療チームの帰国時の空港での歓迎の様子や医療チームによる貢献について紹介。	添付⑬
36	6/5	ー	国際先駆導報	医療チーム	現代のベチューン：被災地での医療援助　ー言葉と文化のカベを乗り越え、外国からの暖かい援助が被災地を慰めるー	各国の医療チームの紹介をしつつ、日本の医療チームの活動をたたえる病院婦長の言葉などを紹介。	添付⑭
37	6/5	11:34	新華網他	日本からの支援全般	特別寄稿：日本における四川被災地への熱い友情に感動する	日本におけるさまざまな募金活動の様子など、今回の地震被害に対する支援を紹介。	

38	6/10	一	国際先駆導報	日本からの支援全般	評論：日本は中日関係の公式を理解する必要がある	清華大学の劉教授の論文として「日本のまごころが対日感情を温めた」ことを紹介しながら、このような状況になることは数年前には誰も想像もしなかったことであるが、今後の中日関係においては日本の政治が右傾化すれば必ず悪化することを踏まえて日本側は行動すべきという内容を紹介。	添付⑮（関連の日本の記事）

記事詳細

添付①

中国、初の国際救援隊員受け入れ

日本の緊急援助隊が現地入り　民政部高官は「大きな進歩」と評価
（新京報、本誌発　署名入りを除いて李静叡記者、白飛記者、陳俊烈記者、郭少峰記者が担当）

中国外交部は昨日、日本からの緊急援助隊を受け入れることを正式に発表した。これは地震発生後救援の意思を表明した各国の中でも、中国が最初に決定した相手国であり、中国政府にとって初の国際救援隊受け入れである。
現在成都に駐在する民政部救災救済局王振燿局長は昨日、本紙の電話取材に応じ、今回の措置は「重大な進歩」であると述べた。

救助チームは「生命探査装置」を携帯

中国外交部が日本の国際緊急援助隊受け入れに同意を表明したのを受け、日本の二階正弘内閣官房副長官は直ちに日本政府が当日午後四川の地震被災地域に救助チームを派遣することを表明した。
昨日午後６時前後、日本政府が派遣した第一陣救助チーム３１名が成田空港から北京へ出発、第二陣の３０名あまりの隊員も当日夜北京へ出発した。あわせて７０名近くの救助チーム隊員は北京で合流し、今日中に四川大地震の被災地域現場に出発する予定である。
今回の救助チームは消防庁、警察庁、海上保安庁などの所属メンバーから構成され、日本国際協力機構（JICA）などの職員も同行した。

生命探査犬３頭も同行

JICA 中国事務所責任者の１人である植村吏香氏によると、今回の緊急援助隊救助チームは全員地震救助の専門メンバーで、医者は参加していないとのことである。第二陣の救援隊は 3 頭の生命探査犬も同行する。緊急援助隊救助チームはさらに「生命探査装置」などのハイテク設備も携帯している。
地震が頻発する日本は、現在世界最新レベルの緊急援助隊を有しており、災害救援は SAR（捜査および救助）、専門救助、医療、生活の自給自足管理、連絡などのメンバーで構成され、設備も整っている。

新聞キャプション
5 月 15 日、設備を手に日本の救助チームが四川へ出発　日本で撮影

解説

日本の緊急援助隊の災害地域受け入れをどのように認めたか

中国側は「距離が近く、速い」を念頭におく
先だって行われた中国政府の定例記者会見においては、民政部の王振燿局長は被災地の交通道路が遮断され、災害地域への到着を難しくしており、「現在国際救助チームの入国と災害地域入り受け入れ体制を整えるのが困難」であると述べた。

しかしその前に、現場の状況は複雑で混乱しており、最も必要としているのは救助メンバーの人数で技術ではない。日本の救助チームが現在加わることは「ある角度から言えば、最も危険な状況に置かれている人にとっては有利である」。

実際、新中国成立から今まで、国際社会からの人的援助を受け入れたことはなかった。昨日の外交部の記者発表会では、なぜ日本の救助チームが最初に災害地域入りした国際救援隊となるのかと質問した記者がいた。外交部の秦剛スポークスマンはそれに答え、中国側が日本の緊急援助隊が災害地域入りするのに同意した際、主に「距離の近さ」と「速さ」という 2 つの要素を考慮したと述べた。

外交部の秦剛スポークスマンは昨日、日本以外にも国際救援隊を受け入れるかどうかについては、「中国の関連部門が被災地の現状と、救助活動の進展および現地の受け入れ条件と照らし合わせて、真剣に検討している」と述べた。

北京大学日本人協会会長をつとめたことのある加藤嘉一氏は昨日、ブログの中で「地震発生からすでに 70 時間が過ぎ、現在多くの人が救出されているが、まだ救助を待っている被災者の多数は倒壊した家屋のがれきに埋まっている、だから最新技術を有する日本緊急援助隊を必要としている」と分析していた。

別添②

わたし達から世界にありがとうの一言を

王沖

中青在線－中国青年報　2008-05-16

四川大地震が発生した時、北京オリンピック聖火リレーでの騒ぎはまだ完全には静まっていなかったし、カルフールへの抗議行動にも終止符が打たれておらず、我が家の近くにあるカルフールの客入りも依然としてまばらだった。

このとき、カルフールはいち早く行動し、200 万元を寄付してから、また 100 万元を追加した。ネット掲示板では、これは危機管理広報で、わずかばかりの金銭で我々を買収しようとしている、という書き込みもあった。しかし、私はそういう風には思わない。親会社がダライ・ラマに資金援助したかどうか、また我われの抗議運動が情理にかなっていたかどうかにかかわらず、この時、友好の手を差し伸べてくれた彼らには、「ありがとう」というべきであろう。

フランスのサルコジ大統領はかつてオリンピック開会式に出席しない可能性もあると述べた。地震発生後、サルコジ大統領は胡錦濤主席に手紙で、個人的に中国の災害状況を非常に気に掛けており、中国はこの災害に打ち勝つことができると信じていると述べている。大統領のやさしい心遣いに、私たちみんなで「ありがとう」と言おう。

日本、この近隣の、私達が長年歴史的に恨みを持っている国は、地震後迅速に反応し、政府各方面の援助の他、民間も行動を起こした。ヤフー・ジャパン掲示板のある書き込みが中国のサイトに転記され、私は深く感動した。それはこのように書いてあった。「相手が反日であろうとなかろうと、緊急事態においては互いに協力すべきだ。今は無責任な発言などする時ではない。我々は皆でお互いに助け合うことを希望する」と。また、「少しでも早く救援隊を派遣してほしい。地震後 48 時間以内に救助することが肝心である。（日中両国の）考えや体制が違ったとしても、生命の重さは同じなのだから」ともあった。この、日本が差し伸べた友好の手に、私たちみんなで「ありがとう」と言おう。

アメリカもまた友好の手を差し伸べた。クラーク・ラント在中国アメリカ大使から国際赤十字を通して 50 万ドルが寄付された。寄付よりも感動させられたのは、ラント大使の言葉である。ラント大使は「我々は運命をこの災害で残酷にも変えられてしまった人々に深く同情する。そしてブッシュ大統領も友人として援助の手を差し伸べる」と述べた。この時、イデオロギーの紛争はもうすでに重要ではなく、重要なのは例えばラント大使の語った、中国人民にとって、困難が極限となったこの時、「我われはあなた達を心配し、あなた達のために祈る」という言葉である。これにも私たちは「ありがとう」と言おう。

メールボックスの中で天地を覆い隠すほどの義捐金情報に直面し、政府によるものであれ、企業からのものであれ、とにかくすべて残らず整理して編集部に渡した。皆にこれらの慈善行動を知ってもらうことが、私の「ありがとう」を表す最も良い方法である。

5 月 14 日、CNN.com インターナショナルにアクセスしたが、トップの写真は温家宝首相が被災地の子供達を見舞う写真で、関連記事も中国の災害救助の事実が客観的に述べられていた。数日前、我われは「人として、あまり CNN 的であってはならない」と述べた。今日、我われは「人として感謝と恩の心が必要である」と述べるべきで、「ありがとう」と言わねばならない。

この災害に援助をしてくださった各国の一人一人に対して感謝の意を表そう。

5 月 15 日午後この原稿を書き終えた時点で、外交部サイトに記載されている、国際社会から四川大地震災害に次々寄せられた慰問を表す情報はすでに 14 にもなり、まだどんどん増えている。そのうち一部はどこの大陸に位置するのかはっきりわからない国もあり、またほとんど聞いたこともないような国もある。しかしこれが我われの心の底の黙々とした一言を邪魔することはない。ありがとう！

添付③

2008 年 5 月 17 日　18:55　新華網報道（仮訳）

“命を懸ける 3 人の男性達”―日本救援隊は四川地震被災地で困難を知りながら前へ進む

四川省北川５月 17 日発（記者　白潔）17 日夜 23 時、墨のように真っ暗な夜の激しい雷雨の中、60 名の日本の救援隊員を乗せた車は余震の危険にさらされながら、石が落ちてくる道路を揺られ、地震の被害が劣悪な四川省北川県に入ってきた。このとき、すでにこの巨大な災害が発生してから 130 時間がたっていた。

この隊は、５月 12 日に汶川で大地震が発生してから、一番最初に被災地に入った外国の専門救援隊であり、新中国が成立して以降、自然大災害発生時に受け入れた、初めての外国からの専門救援人員である。

昼間、先進的な機具を携えて、彼らは青川県での捜索活動のために結集していたが、生存者はまだ発見していなかった。真夜中過ぎ頃に、彼らは、北川県の曲山鎮にある廃墟となった中学校で徹夜の捜索を開始した。一説によると、ここにはまだ 1500 名の学生が埋まっており、中国の救援隊は 700 名の生存者を救出したが、まだ 70 余の遺体を回収したのみであるそうだ。

“希望はまだある”

日本の救援隊は 16 日午後青川に入り、16 時間継続して活動した後、翌 17 日早朝に２体の遺体を発見した。「非常に残念です。生存者が発見できるのであれば、たとえ１名でもいいのですが。」海上保安庁の大川雅史は非常に厳粛に語った。

お昼頃、日本からの救援隊第１陣が第２陣と合流し、北川に向かって出発した。第２陣は、新たに、セメントなどを切断できる大型機械や３匹の捜索救助犬を持ってきた。

救援隊には２名の女性看護師がいる。川谷陽子はきっぱりと言った。「もっとも重要な任務は生存者を捜索することです。」

村岡嗣正は消防庁からの参事助理だが、16 日はすでに徹夜で作業を行った。「私達は少しでも早く現場に行って、自分達の経験や能力を活用し、先進機器を使った救助活動をしたい。まだ希望はあるかどうかについては、私達はまだあると信じているし、最大限の努力をしたい。」

その他の隊員も全力を尽くすべきだと語った。隊の皆の信じる心は少しも揺るぐことなく、同じ気持ちで一貫していた。

国内で 12 年間、大災害時の捜索活動経験のある大川雅史は、中国に来ることになって、非常に光栄であると語った。「これこそ、私達の仕事の栄誉です。」

これらの隊員は、警察庁、海上保安庁、消防庁、日本国際協力機構及び外務省などの各機関からなっている。イラン大地震やインドネシアの地震や津波被害の捜索活動に参加した者もいる。かれらは日本語しか話さず、英語は少し理解できる状況のため、数人の中国人通訳が配置されている。

退却と言わない隊員たち

日本の隊員が第１捜索現場は青川県解放街であった。青川県の中医病院の家族寮に、宗雪梅という女性と彼女が生んだばかりの生後 75 日の赤ちゃんが埋まっていた。

隊員は、16 日午後に現場に到着と、すぐに埋まっている２人の場所を特定し、警戒範囲を狭めつつ、休みない捜索活動を開始した。

さらに、夕方頃、生命探索機がすでに生命反応を示さないということが判明したが、日本の救援隊は夜通しの捜索を決定した。－生きていれば会いたいように、死んでいても遺体と対面したい。－

「現在、生存者の希望は低くなっているかもしれません。しかし、こうであっても、以前同じような状況で生存者がいた例はあります。」小泉隊長は語った。

救援隊員は３班に別れ、交代で活動しながら、継続して母親と赤ちゃんの具体的な位置を確認しつづけている。「日本でもこんなに悲惨な捜索現場を見たことはありません。」隊員の中島康は言った。

記者が捜索現場で見たのは、オレンジ色と青色の２色の服を着た救援隊員が瓦礫の中で機械を使ったり、手を使ったりと奮闘する様子であった。彼らの周囲は瓦礫や崩れかけた壁で一杯であった。捜索過程において、余震がたびたび発生したが、聞こえたのは、建築物の残骸が粉々に落ちるがらがらという音だけであった。

17 日早朝 4 時、部品を換えに来た救援隊員は地面の上で横たわって眠った。記者は「なぜもっといい場所を探して寝ないのか」と聞いたら、「私達は捜索を行っている者であり、どんな状況においてもいつでも命令にそえるよう待機しておく必要がある。」１名の隊員は厳粛に言った。

早朝 7 時 25 分、母子 2 人の遺体はついに捜索隊員の手によって掘り出された。日本の救援隊は全員が遺体に黙祷を捧げた。

「日本隊員の労苦に感謝」

55 歳の張香玲は娘の遺体を見た際、「日本隊員の労苦に感謝します。」と述べた。これが彼女が娘と会う最後の機会となった。

周辺の群集も言った。「あなた方がより多くの希望を持ってきてくれたのを歓迎します。」

16 日の夜、周辺住民は政府が配給したインスタント面とお湯を自ら救援現場に持ってきて、日本の救援隊員に晩御飯として差し入れた。これはこの 1 日で彼らが食べた唯一の暖かい食事であった。17 日の日中は、彼らは 2 回の野菜粥を食べ、夜はお弁当を食べた。

日本国際協力機構中国事務所の藤本正也副所長は、この災害で 2 つのことが印象に残ったという。1 つは中国政府の反応が迅速でニュースの発信も非常に早かったこと、もう１つは中国国民が地震後に表した団結精神であり、非常に感銘を受けたという。

日本以外では、ロシア、韓国、シンガポールの 3 カ国が専門救援部隊を派遣し、被害が大きかった地区で捜索活動を行っている。

中国外交部スポークスマンは、汶川地震が発生してから、いくつかの国が派遣救援要員を被災地に派遣する意向を示したことに対し、「私達は近隣国かつ迅速性の観点からどの国に依頼するかを決定した。私達はこれらの国の政府と人民が中国の人民に示した同情と支援に対して深く感謝する。」

以上

添付④

2008 年 5 月 19 日　02：15　新華網報道（仮訳）

日本の救援隊員は中方と協力しながら苦労して捜索活動を継続

四川省北川 5 月 19 日発（記者　白潔）日本の救援隊は 18 日に 2 手に分かれて、北川県曲山鎮と任家坪にある北川中学校で救援活動を開始した。これらの場所は、午後に生命反応があったところである。しかし、この十数時間苦労して捜索救援活動を実施してきた結果、いまだ生命反応ははっきり証明されていない。日本の人員は捜索をあきらめず、夜 23 時に発掘現場に向かった。

情報では、日本側の 60 人の救援隊員は 19 日に全て曲山鎮で捜索活動をするとのことであった。

連続十数時間の奮闘にもかかわらずまだ生存者は発見できていないが、日本の救援隊員は非常に真面目で勤勉、わずかな希望もあきらめない活動態度であり、記者は非常に深い印象を受けた。

日本の救援隊は 17 日夜に青川から北川に移動して捜索を継続しており、18 日真夜中に北川県任家坪に到着した。到着後、すぐに大雨が降ってきた。当地の指揮官は大雨が捜索活動の難しさと危険性を増大させる恐れを指摘していたが、日本の隊員はすぐに捜索活動を開始した。彼らは雨の中、北川中学に入り測定を始め、夜通し協議を行い、捜索計画を検討した。捜索人員は数日来ずっとバスの上で着替えや寝泊りをしており、多くの隊員の両目は真っ赤で充血していた。

汶川“5.12”大地震により、北川中学では 1500 名の教師と生徒が生き埋めになり、そのうち 700 人は助け出されたが、その他は未だ廃墟に埋まっている。そのうち 1 棟の 5 階建ての教師棟は、地震によって全体が下に崩れ落ち、地上には 3 階分しか残っていない状態であり、1，2 回はほとんど完全に潰されていた。日本側の救援隊が到着する前、既に 70 以上の遺体が掘り出されていた。

18 日、日が明るくなってから、30 数人の日本側人員が生命探索機や画像探査機など、いろいろな救援機器を携えて北川中学校の現場にやってきた。もう一隊の捜索人員は北川県市街地の曲山鎮で捜索を続けていた。塩陽、北京、棉陽などの消防隊や四川省軍区の官兵や十数名のボランティアが捜索現場で日本側を助けていた。

曲山鎮の破壊程度は壮絶であり、捜索人員の想像を超えていた。旧市街地は瓦礫の山となり一つとしてきちんと建っている建築物はなくなっていた。おおよそ 1 万人が生き埋めになっている。新市街地は満身創痍であり、至るところに瓦礫や廃墟が見られ、その山の傍らで、北川中学の新校舎の 3 階建て教師棟が完全に山から落ちてきた巨大な岩に覆われて押しつぶされていた。もし、頑強に立った旗掲揚台でたなびいていた国旗やまだ壊れていない学校のプレートがなかったら、ここに以前学校があったことなど想像もつかないだろう。

日本側救援隊隊長の小泉崇は、北川県の市街地においてこの地震で受けた損害は非常に甚大であり、救援隊の想像をはるかに超えていた、と述べた。

午後 4 時頃、2 名の隊員が前後して生命反応を確認した。北川中学の崩壊した教師棟の東側で、日本の救援隊員が生命探索機を使ったところ、微弱な信号が確認された。中国側の消

防隊員の協力の下、日本側の捜索隊員は 2 階の床部分に穴を空け、捜索隊員がその中に入って、すでに崩れ落ちた１階部分を継続して捜索している。曲山鎮の別の隊員は、映像、音響、データ機器などを順番に使いながら、ただ１つの可能性も捨てていなかった。

生命探索機などの機材は温度や周囲の環境、音など、たくさんの要素により誤作動する可能性もあるが、捜索人員はまだ真剣に１つの可能性がないかを探っている。

「私達は全力で捜索します。なぜなら生命は非常に貴重なものであり、皆なんの罪もない命なのです。」救援隊に同行した日本大使館の１等書記官又平広氏は記者に語った。

以上

添付⑤

もしできるなら、彼らへ最後の敬意を

文　本紙記者・包麗敏

中国青年報オンライン－中国青年報　　2008-05-21　　[印刷]　[閉じる]

その遺体は乱雑な廃墟の傍らのきれいに整理された地面の上に静かに横たわっている。彼女はしっかりとくるまれ、きれいなオレンジ色の船形の容器に入れられている。荒れ果てた瓦礫の中から掘り出されたばかりにもかかわらず、彼女の体には少しの血痕も見当たらず、乱れたあとすらなかった。

もし彼女だけを見たのなら、彼女の周りの見渡す限りの雑然とした粉砕の世界などとても想像がつかないだろう。

彼女はそこに横たわり、20 数名の日本救援者からの最後の敬意を受けた。彼らはオレンジ色の制服と黒の革靴を身につけ、彼女のそばで 2 列に整列し、胸を張り背筋を正し、両手を下げて、うやうやしく立っている。その時、20 あまりのヘルメットをかぶった頭を彼女へ深々と下げ、黙祷を捧げた。

5 月 17 日 7 時 25 分、地震発生 6 日目、日本の救援者達は 16 時間の捜索救助の後、四川青川県喬荘鎮の、ある倒壊したビルの廃墟からこの女性の遺体を掘り出した。

異国から来た彼らは彼女とはまったく知り合いでもなければ、この時、彼女の名前すらも知らなかったが、彼らは彼女に黙祷を捧げた。そうなのだ、彼ら 20 数名はひと山や、一列に並べられた死者のためではない、ただ彼女一人のために黙祷を捧げているのだ。

これは緊急救援活動の合間のとても簡単な儀式であり、黙祷時間も数秒に過ぎないかもしれないが、彼ら異国の人々はこのような儀式で、緊迫し多忙な心を一時中断させ、落ち着いて 1 名の死者への哀悼の意を示し、厳粛に別れを告げた。ブン[4]川の大地が一瞬にして引き裂かれた時から、我々は絶えず別れを告げている。毎分、毎秒、生命が終わり、我々から去っていく。彼らの砕けた体はセメントのかけらに埋まり、衣服、教科書、かばん、ペン、出していない家への手紙など、彼らのものが至るところへ散らばっている……これらには彼らの血が付いている。彼らのばらばらになった体さえ、散らばっているかもしれない。

4 さんずいに文――訳注

彼らはあんなにも慌しく、みじめに、悲惨に行ってしまった。我ら生存者は、彼らを廃墟から掘り出したあと、泣き叫ぶ以外にどんな方法で彼らに別れを告げることができるのだろうか？

こうした報道シーンや記事はめったにない。ただ、まばらに知るのは、都江堰市のある倒壊した学校で、人々が爆竹を鳴らし、亡くなった子供を送っていることくらいだ。

綿竹市のある倒壊した幼稚園で、掘り出された子供達の遺体にかけてあげるビニールシートも木綿も無かったとき、ある生地商売を営む女性店主は店から一反の赤色ラシャを持ってきてかけ、死んだ子供達への最後の尊厳を保った。

什ホウ[5]市のある倒壊した小学校では、河南省からの救援者が廃墟の中から探しあてた遺留品のかばんを、遺族の元へ届けるために、きちんと並べた。土ぼこりにまみれた色とりどりのかばんが小さな命の慰めになっていた。

我々もすでに知っての通り、捜索救助者は捜索の過程でできるだけ遺体を完全な状態で維持し、全力を尽くして家族の希望通り埋葬し、写真を撮るなどして死者の資料を残している。

これら以外に、今、我々は別の方法を知った。隣国の日本の救援チームから学んだ、廃墟のそばで死者へ黙祷を捧げるという方法だ。

これらは並外れた努力であり、死者をさらに敬った試みだ。一分一秒を争う大救援のさなか、悲惨な現実に立ち向かうと同時に、亡くなった命と向き合うことを、慌てすぎたり、ぞんざいにすべきではない。

もしかしたら、生命に対して敬意を表す最もいい方法は、全力を尽くして捜索救助することに勝るものはなく、死者の為に黙祷するよりも、これらの時間を生存者の救援に使う方がいいのかもしれない。また、幸い死神から逃れた生存者のために、差し迫って必要なテント、衣服と身の回りの品と食品を提供することの方が、不幸にも亡くなった人に提供する死体収納の袋より大切かもしれない。

このような考え方があるために、「酔風清揚名」というあるネットユーザーが、震災三日目に中国の掲示板「天涯」で志願者を組織し、被災地へ行くことを提案し、「我々は応急手当や、応急修理の経験はないが、彼らの顔の血痕や体の泥を拭き、清潔なビニールシートで遺体を包み、最後の尊厳を保つことはできる。」と、呼びかけたが、一人として支持者はいなかった。

さらにこの考えに基づき、「老虎指紋」と名乗る別のネットユーザーが、震災四日目に天涯掲示板で写真の中の遭難者の死体が袋に入れられていないのではないかと質疑をかけた時、多くのネットユーザーから厳しい指摘を受けた。

確かに、被災地で救助を行う前線の人々は、想像を絶する緊迫と疲労に耐え、昼夜兼行で、時には寝ずにいる彼らに、落ち着いて死者に別れを告げるよう求めるのは、過酷すぎる要求かもしれない。しかし、いかに死と向き合い、とどのつまりは、いかに生存者の命題にのぞむかは、一種の生命に対するシンボルであり態度でもある。死者への同情は、すなわち生存者への尊重なのだ。

---

[5] 方におおざと――訳注

いま、この隣国からの 20 数名の捜索救助メンバーは、我々に専門の救援設備を持ってきただけでなく、生命の尊さについての啓発もしてくれた：可能であれば、なるべく時間を作り、敬虔で誠実な儀式によって、厳粛に生命へ最後の敬意を払っていただきたい。

写真＝新華社記者　李涛

添付⑥

日本の救助隊よ、遺憾に思うことはない

著者：雷錘哲

一昨日、日本国際緊急援助隊の藤谷浩至副団長は、安全の面から中国側より捜索活動を停止するよう提案があったと述べた。今回最初に中国に到着した海外緊急援助隊は、青川、北川など災害が深刻な地域で 3 日間の救援活動を続け、犠牲者 15 名の遺体を発見した。「生存者を 1 名も救出できなかった」ことに、勝谷報道官の言葉と表情には無念さがにじんでいた。(5 月 21 日『新京報』

今回の四川大地震の救援活動では、日本の国際救急援助隊が最初に現地入りした海外救援チームであることはよく知られている。地震発生から 2 日後、日本の総務省消防庁はすでに救援隊員を四川の災害地域に派遣して救援活動を行いたいと表明していた。15 日 11 時、中国政府は日本の救援を受け入れることに同意した。日本の海外緊急援助隊は招集、準備にたった 6 時間をかけてすぐ出発するという、日本の国際救援活動でももっとも迅速な行動をとった。さらに 16 日からは、地震が発生した関庄鎮、青山県城、北川県城で、余震や地滑りの危険を冒しながらも 90 時間以上にわたって、中国の救援隊員と昼夜の区別なく捜索活動を続け、犠牲者 15 名の遺体を発見した。これは、1 つには危機が訪れたときに、被災者に救援の手をさしのべることは、人類共同の感情であり、この感情こそが人類の平和、世界が 1 つになる重要な基礎であるということと、2 つめには一衣帯水の隣国として、突発的な自然災難は、我々を一層近づけ、相互依存の関係を築けるということ、そして 3 つめに日本人の死者に対してはらう尊敬の念は、我々も教えられることがある、ということを間違いなく証明している。

だから、たとえ生存者を救出できなくても日本海外救急援助隊が中国に残念な気持ちを残したとは思わない。彼らの行動は人類の純粋な心である「いたわり」を感じさせ、国際主義の「優しさ」を体現していた。さらに、60 名の救援隊員が飛行機で日本に帰国するのと入れ替わりで、日本の医療チームが被災地域に到着し、新たな救援任務についた。たしかに中日間は「しこり」があるが、今回生死を共にし協力することで、両国国民の友好感情は昇華され、人類が追求する調和のとれた幸福といった流れにまとまってきている。

日本の救助チームは遺体に黙祷、涙あふれる光景

原稿：新華社デイリーテレグラム　4版

新華社記者による被災地手記

小泉崇、田中一嘉、大川雅史、大河内克郎、川谷陽子・・・・・・もしこの大地震がなかったら、私のように彼らと5日5晩を共にした私を含めた中国人は、このような普通の日本人と接する機会はなかっただろう。

現在、被災地における緊迫した日々は過ぎ、彼らはすでに日本に帰国した。しかし彼らの廃虚での姿、犠牲者に対する深い黙祷は今でも私の目に浮かぶ。

中国人は、この60名の日本救助チームが四川大地震で最初に被災地に到着した海外救援隊であり、中国の史上初現場の救助活動に参加した国際救援隊であることを永遠に忘れないだろう。

日本隊員のプロ意識は落ち着きを与えてくれた

5月16日早朝3時から、この初対面の外国人達に同行し、被災地の青川、北川県をまわった。実を言うと、地震災害の現場を見たことがない筆者は、同胞の遺体を目にして泣き、恐れもした。しかし日本隊員のプロ意識は私とその他随行メンバーに落ち着きを与えてくれた。

日本の救助チーム第一陣が青川へ向かう途中、酒家崖を越えるとき、80%以上の道路はU字型に大きくカーブしていた。車の外では、救援隊員、物資を運ぶ車の流れが途絶えず、一目では見通せなかった。車の中では、中国側担当者と日本の救助チームがそれぞれ焦りを見せ、絶えず身を乗り出していた。海上保安庁の大河内克郎氏は車を降りたり乗ったりして何度か走っては戻ってきた。とうとう、普段なら4、50分で抜けられる山道を3時間かかって通り抜け、車は県の都市部に入った。

青川県都市部解放街青川中医院家族寮で、救助チームは現場到着後直ちにがれきに埋まっている人がいると確定されているおおかたの位置を確認し、警戒区域を定め、時を移さず救助活動を開始した。夕方になる頃、生命探査装置はすでに生命の存在を表す反応を示さなくなっていたが、日本救助チームは徹夜で捜索活動を続けることを決定した。

16時間の努力もむなしく宋雪梅さんと彼女の赤ちゃんを救うことはできなかった。17日7時30分頃、救助チームメンバーは親子の遺体を発見した。31名の日本救助チーム隊員が2列に整列し、2名の中国犠牲者に対し黙祷を捧げた。このとき、私も涙を流した。

「やるべきことはやった」

17日昼、第一陣・第二陣の救助チーム隊員は青川で合流し、次の捜索地点である北川県へ前進した。夜中11時に北川中学校に到着したとき、土砂降りの雨が降り出した。絶えず稲妻が真っ暗な都市を切り裂いていた。この時点の北川は非常に危険で、上流の堰止め湖の水位が急上昇し、決壊の危険に晒されていた。さらに余震が絶えず発生し、地盤がゆるんだ山が地滑りを起こす可能性もあった。中国側の担当者が安全を考え、明るくなってから捜索

活動を再開することを何度か提案したが、日本の救助チームは電動機と生命探査装置を持って雨を冒して北川中学校で捜索活動を繰り返し、さらに連夜現場の構造図を書いて捜索方法を確定していた。

最終的には生存者を救出することができなかったとしても、路上で服を着たまま突っ伏していた隊員や、彼らの真っ赤な充血した目、全国の哀悼日に悲痛な面持ちを浮かべているなどの光景には感動させられた。

「彼らは本当に努力した、彼らの捜索への道は他の隊員よりさらに遠く、捜索の難しさもさらに大きくなった」。と、同行した中国側担当者は語っていた。

さらには、田中一嘉氏による「私たちはさらに多くの命を救うことができず、悔やまれてならない」ということが心に刻みついた。
「がれきに埋まっている人、特に壁の割れ目に挟まっている学生を見たときには、本当に心が痛んだ。こんな小さい子どもなのに！」といいながら、彼の目は真っ赤になっていった。

時間の経過につれ、日本救助チームの使命は終了し、被災地の捜索活動終了を決定した。「やるべきことはやった」。救助チームの小泉崇隊長はこう述べた。彼の厳かな表情は今での私の目に浮かんでくる。

今回の捜索の中で、中日のメンバーは言語こそ違え、協力し合い、日本側の救助チーム隊員はたびたび北京からの消防隊、綿陽殻の消防隊など多くの捜索チームと力を合わせ、共同で犠牲者 22 人の遺体を発見した。

日本救助チームは救助機材を中国側に寄贈

小泉崇氏は特に中国の青年ボランティアについて言及した。青川県喬庄鎮の夜を徹した救出過程の中、北京から来た 3 名の青年ボランティアが自分の車で救助チームを捜索現場と駐在地の間の送迎を手伝った。「このように中国の人と捜索活動を共同で進めたことは特に強調しておきたい」と小泉隊長は語った。

記者はまた、北川住民の代国章氏について触れたい。彼は地震で両親を失ったが、日本の救助チームが北川曲山鎮で捜索活動することを聞きつけ、すぐに自ら指揮部に赴き、廃虚の中で日本救助チームのために道案内することを申し出た。

青川中医院捜索現場で、大地震の被害にあったばかりの一般市民である中国人が、政府が配給したインスタントラーメンや熱湯をそれぞれ運び込み、日本の隊員に送り届けた。「彼らは危険を冒して私たちの親族救助を手伝いに来てくれた、私たちの行動は当然しなければならないことだ」彼らの素朴な言葉からは善意がにじみ出ていた。このインスタントラーメンは、日本の救助チームにとっては、中国で救助活動を開始して 10 数時間後に初めて口にした温かい食事となった。

北川を離れる前に、日本救助チームは救助専用の発動機、照明灯、救助専用工具や専用テント、折りたたみ式テーブルや雨具、電池など救助機材を中国側に寄贈し、中国側の救助活動の助けになるよう願った。

深夜、成都市民は日本隊員を見送り

19 日深夜、成都に戻ったばかりの日本救助チームは、意外な光景を眼にすることになっ

た。成都市民が街道の両側に立って列を作り、下車した隊員にどこからともなく熱烈な拍手を送り、それぞれ携帯電話を取り出して写真を撮り、北川から帰ってきた勇士を歓迎したのである。

まだ疲労が身に残り、オレンジと紺の救助服を着替える間もなかった日本救助チームにとってはこのような礼遇は思いもかけないもので、両側の市民にお辞儀を繰り返して感謝の意を表していた。

20 日深夜、同じように感動を呼ぶ一幕が霧雨が降りしきる成都の街角で繰り広げられた。少なからぬ市民が再び成都の四川賓館の門に集まり、帰国の途につく日本救助チームを見送った。

5 月 16 日早朝 3 時から 21 日 1 時 50 分まで、日本の救助チームは中国で 119 時間滞在したことになる。

まさに田中一嘉隊員が述べた一言に尽きる。「今回の救助で、中国人との距離が縮まった。中国に深い感情を抱いた！」。

（白潔記者）新華社成都発 5 月 21 日

添付⑧

全力で中国の救済活動を支援する日本　中日戦略互恵関係を強化

http://news.QQ.com　2008 年 05 月 24 日 08:57　世界新聞報

中日の救助チーム、黙祷の時刻に共に犠牲者に哀悼の意を表す

日本の『読売新聞』5 月 17 日のトップニュースを飾った写真は、日本の救助チームが四川青川県で発見された母子の遺体に黙祷を捧げている写真だった。27 歳の宋雪梅さんと生まれてたった 75 日の赤ちゃんががれきに押しつぶされ、日本の救助チームは夜を徹して捜索を続けたが、救出はかなわなかった。

このような結果に終わっても、犠牲者の親族は日本の支援に心からの感謝を表明した。日本の救助チームは現在四川大地震の被災地で引き続き活動を行っている。

四川大地震は日本を「揺るがした」

5 月 12 日の晩から、四川の汶川で発生した地震のニュースは、頻繁に地震に見舞われる日本という島国でまれに見る震撼させた。

日本の福田康夫首相は、訪日した中国の胡錦涌主席に別れを告げて一週間も経たぬ 12 日に駐日本中国大使館に連絡し、胡錦涌主席と温家宝総理にお見舞いの意を伝えた。福田首相は、必要があれば「日本は準備ができており、中国にできる限りの支援を行う」意を表明した。

日本の高村正彦外相は 13 日の記者会見で「日本政府は中国に 5 億円（中国人民元の約 3300 万元に相当）にあたる資金と物資の援助を行う」と直ちに表明した。同時に、町村信

孝内閣官房長官は同日、日本は中国に援助を提供する各準備ができており、中国側から要請があれば、国際緊急援助隊派遣を含む一連の援助を行うと明らかにした。

続いて、中国の四川大地震のニュースは、日本のテレビや新聞のトップニュースに繰り返し取り上げられるようになった。5 月 12 日の晩から、日本の大地震研究期間の専門家は各メディアの取材要請を受けてそれぞれスケジュールが一杯になり、取材対応に追われた。『読売新聞』は専門家の言葉を引いて、今回の地震を引き起こした断層は阪神大震災の 6 倍以上にあたる 250 キロメートルにわたり、地震が引き起こしたエネルギーは阪神大震災の 30 倍になると指摘した。

日本の各界は中国の大地震に深く関心を寄せ、支援を行った。「門前市をなす」とも言えるくらい、この数日駐日本中国大使館の門前は人が一杯で通れないほどだった。日本の政界、財界、民間団体および在日中国人・留学生が組織する募金活動代表がひっきりなしに訪れ、募金をそれぞれ崔天凱大使に手渡し、大使を通じて被災者に心からのお見舞いの意を伝えた。

5 月 15 日までに、日本の各界から駐日中国大使館に集まった募金は、2 億円（約人民元の 1300 万元に相当）に上り、これ以外にも中国と経済協力を行っている日本の多数の多国籍企業からは、直接中国支社を通じて募金・物資を届けられた。日本の三大銀行の 1 つであるみずほ銀行は、直接震災専用通帳番号をテレビの広告で流し、中国の被災地に募金を呼びかけた。

同時に、地震被害で辛酸をなめ尽くした日本国民は、四川大地震の被災者に心からの関心と同情を寄せた。高校の教師である杉村静夫氏は『世界新聞報』の駐日記者の質問に答えて「四川には 3 度いったことがあり、2001 年には成都に一週間滞在し、都江堰にも行った。行ったことのある地域が被害を受け、非常にやりきれない気持ちだ。特に子どもたちががれきの下に埋まったと聞いて、本当に悲しい。私たちは震災で犠牲となった人々に心からの哀悼の意を捧げる。日本は 10 年以上前に阪神大震災があり、多くの国際援助の中、再建できた。今後中国被災地の再建に対して、何か手伝えることがあれば、一教員として、できるかぎり子どもたちのために力を貸したい」と述べた。

注目を集める日本国際緊急援助隊の中国入り

日本が派遣した 2 陣からなる国際緊急援助隊救助チームもこの 2 日間メディアの注目を集めた。5 月 15 日、救助チーム第 1 陣が成田空港を出発し、初めて中国入りする国際救助チームとなった。報道によると、日本の国際緊急援助隊の中国入りは警察、消防隊員などからなる「救助チーム」と、医療担当者からなる「医療チーム」、および技術者からなる「専門家チーム」があるという。

今年 28 歳になる日本海上保安庁の特殊救難基地に勤務する江口氏は、今回救助チームの一員として参加することができ、『世界新聞報』の駐日特派員記者に、「中国に赴き救援活動に関わることができて、非常に感動している。最初に救援活動を選んだのは、阪神大震災の時に、外国からの救急隊員が、救助犬を連れて廃虚の中で生存者を発見したのを目の当たりにしたからだ」と語った。これは当時 10 数歳だった彼に強い信念を持たせた。江口隊員は「このように人を救うことができたら、どんなにいいだろうという信念で、海上保安庁の救

難基地にとどまり続けた」と語った。

今回救援活動に参加するメンバーは、日本国内の災害救助のエキスパートであり、日本全国で待機している 4000 名の救助チームメンバーから選抜されたものだ。

さらに、日本の救助チームが携帯する「最新兵器」にも期待が集まる。そのうち、今回初めて使用される「生命探査装置」はがれきの中に差し込み、人が呼吸する二酸化炭素と尿のアンモニア成分を感知して、生存者の存在を探知する装置である。「生命探査装置」はまた電磁波を使って人の活動と呼吸を探知でき、モニターには被災者との距離が表示される。

3 頭の救助犬も救助チームの話題の 1 つだ。報道によれば、2004 年日本で起きた中越大地震の際、優れた救助犬によって、地震発生から 92 時間後に、廃虚に埋まっていた 1 人の男児を奇跡的に救出したという。

救助チーム隊長で、外務省国際緊急援助室の小泉崇室長は出発に先立ち、中国政府の期待を裏切ることなく、人命救助に全力を尽くすと表明した。

強化される中日戦略互恵関係

中国は、日本政府が提出した国際緊急援助隊派遣の提案を速やかに受け入れ、日本人は中国政府による日本への期待を感じ取った。河野洋平衆議院議長は「中国政府は震災発生後日本の海外緊急援助隊の支援を受け入れ、日中両国の戦略的互恵関係が胡錦涛の訪日成功からさらに強化された」と述べた。

著名な西園寺一晃氏は、『世界新聞報』の駐日記者を通じて中国の被災者にお見舞いの意を伝えた。西園寺氏は手紙の中で「日本の民間では、友好団体、青年団体、学生組織、各メディアが募金活動を開始し、その中には老人と子どもの姿が多く見られる。日本でこんなに速く、こんなに幅広い支援を得られたということは、胡錦涛主席が訪日で得られた成果の 1 つである。胡錦涛主席が友情と誠意を携えて日本を訪問され、多くの日本人の中に友情の火を灯した」と述べた。

リンク/LINK　中国の人命重視は西側から好評

日本、シンガポール、韓国などからの救援隊や世界各地から大量の援助物資が四川の被災地に到着するにつれ、中国と海外の、災害救助におけるインタラクティブ性が国際社会の注目を集めるようになった。

『ニューヨーク/タイムズ』の先日の記事では、中国政府が日本と台湾からの救援隊を受け入れたことは、双方の緊張を緩和する「戦術道具」と見なしていた。さらに中国政府のこのような「選択的対外開放」を「救援外交」と呼んでいた。災害救助協力は国家・地域の関係を促進するのに悪くないが、西側メディアの首をかしげるような論調は、まだ彼らが中国への深い偏見から抜け出し切れていないことを示しているとアナリストは指摘する。

まず、中国は外部からの物資援助に開放的であり、あらゆる国家からの救援物資と資金をすべて受け入れ、いわゆる「選択的な」問題ははなから存在しない。また人的支援では、現在日本、シンガポール、ロシアと香港、台湾からの救援隊を受け入れ、中国周辺地域から最

高レベルの団体を受け入れているといえ、これはすべて災害救助の実際の必要性と客観的条件から考慮されたものである。

西側のメディアは中国政府が外部からの参与と救援を認めたのは政治的目的からだとしており、この見方は実のところいくらか視野が狭い。実際、中国政府が災害救済協力を通じて外との関係を改善したと言うよりは、中日両国、台湾海峡両岸の関係が改善された中で、災害救済協力の上でさらに融け合い、スムーズになり、中日両国民と両岸の感情が深まったと言う方が正しい。

アナリストは、「巨大な自然災害に対して、同情が生まれ、助けの手をさしのべるのは人類が共有する反応で、人道主義は政治、国家を越える全人類的な共同価値観である」とも指摘する。

この点については、北京外交学院国際関係研究所の王帆所長も、『世界新聞報』の取材にこたえたときに同じ見解を示している。王所長は「自然災害が発生した際に力を尽くして人道主義的救援を提供するのは、国際社会の共通認識となっている。さらに大事なのは、中国政府と民間が迅速に災害救助に全力投入し、人命の尊重と重視が各国から高く認められ、好評を得たことである」と述べた。王所長はさらに「温家宝総理は高齢をおして、地震が発生してから数時間のうちに現場に着いた。胡錦涛主席も被災地入りし、これはすべての国の政府ができることではない」と指摘した。

添付⑨

共同の使命のために
―四川地震被災地外国医療チーム

記者　陳一鳴 曹鵬程 張暁東

5 月下旬から、四川省成都、彭州、孝徳、広元、綿陽、都江堰などで、7 つの外国医療チームが中国と一緒に心をつなぎ、手を携え、共に 1 つの崇高な使命を担っている。：被災した大衆のために傷病の苦しみを解き、心の痛みを慰めている。

言葉が通じないので、もしかするとこれらの外国医療関係者と中国の負傷者との間で意思疎通の障害があるかもしれない、しかし毎回辛抱強く診療し、ひとつひとつ光り輝く笑顔、毎回交わされる深い握手……国境を越えさせたこの世の大いなる愛が、難関を共にくぐり抜け特別な時間が思いきり勢いよく流れていく。

「これらの医療チームはそれぞれロシア、日本、イタリア、ドイツ、イギリス、フランスとキューバから来ており、彼らは被災地区の人々へ人道主義救援を提供し、全中国人民の称賛と尊重を勝ち得ました。」と、四川省外事事務室のある責任者は記者の取材にこのように話した。

「とても怖い、手足の切断手術をされるの？」ある足首に傷を負った小さい女の子は泣いて聞いた。居合わせたロシアの医師は通訳を通じ、小さい女の子の話す意味を理解し、慈愛を込めてこう答えた：「私の子供よ、あなたの傷は決してひどくはないわ、また子鹿のように駆け回ってジャンプすることができるわ。」5 月 21 日、2 台のカマス大型輸送車はロシアの医療チームのすべての設備を彭州の職業中学(高校)の運動場へ運んだ。記者が現場で目にした、10 余りの高くそびえ立つ大型テントは、手術室、検査室、病棟と医療器材の保存所になり、67 名の医療関係者は各所長を務め、傷病者のための心理的カウンセリングを含めた多種にわたる専門医療サービスを提供した。

「中国四川の被災地の人々が必要なだけ、私達はここで働きます。中国人民は私達にここが自分の家だと感じさせたからです。」と、キューバの医療チームリーダーのロドリゲスはしみじみと語った。四川省人民病院で仕事をして 5 日ほどで、この医療チームの 30 数名の医療関係者は何度も中国の同僚と難病症例の立会診察を行い、300 人近い人の診療にあたり、何度か大規模な手術にも参与した。

日本の派遣した医療チームは 20 日成都に到着し、21 日に設備を据え付け、22 日には正式に仕事に就いた。その主な任務は華西病院に協力して応急手当てをするものだった。「ここ数日、私は華西病院の中国の同僚が生命を救うために寝食を忘れ、一生懸命働いているのを目の当たりにして、感激の気持ちでいっぱいでした。日本は地震の多い国であり、地震被災者への応急手当ての豊富な経験を持っています。中国へ来た、もしくは日本に残ったかに関わらず、日本の医師すべてが中国の同僚とこれらの経験を分かち合うことを非常に願い、この突然やってきた災難に中国人民が打ち勝てるように助けます。」と、日本の国立長野病院の看護婦長高野博子さんは語った。

26 日午前、広元市中心病院。起きたばかりの多くの患者が、病棟の中にたくさんのフランス人がいるのに気づいた。18 歳の青川高校三年の学生曹静は、余震が発生した時の落下物で中頭部を打ち脳震盪を起こした。担架の上に横たわっていた彼女は突然嘔吐し、あるフランスの医療チームメンバーが急いでボウルを取り出し、女の子の左側にしゃがんで、彼女の頭部を手でしっかり支え、彼女が吐きやすいように、そっと彼女の体を傾けた。イギリスの医療チームが 24 日成都に到着した後、当日に綿陽市中心病院に駆けつけるのに都合がよかった。たった 2 日という時間に、彼らは 7 例の骨の外科手術を行い、受け入れた患者の中にはある 91 歳のおばあさんも含まれていた。26 日、この医療チームは成都市第二人民病院に移った後、皮膚移植手術を含む、3 例の手術を行った。

28 日はドイツの医療チームが都江堰で傷病の大衆に応急手当てを行って 3 日目だった。

記者は、百人近くの患者が移動病院の診察区で静かに診察を待っているのを見た。ドイツの移動病院は手術室、産室、急診室、放射室、実験室と薬局で構成され、設備の技術価値の高さと内部運営方式の科学で有名である。「私達の医療チームは 11 人で構成されていますが、医師は 2 人だけです。中国の医師の医術は巧みで完璧なので、私達が多くの医師を派遣し診察する必要がないからです。医療チームは中国の医師が移動病院の各種設備に熟知できるよう助けるだけです。この病院は今後現地の赤十字会へ交付し使われますからね。」と、医療チームの専門家トーマスは話した。

綿竹市孝徳で仕事をするイタリアの医療チーム高級医師マリア・カローラは感慨深くこう話した。「中国人民が天災を前に出した勇気とパワーは私を震撼させ、中国人民の強靭さに感動しました。中国政府がタイムリーに、力強く災害救援を組織し、同時に国際社会も次から次へと手を差し伸べた、これらすべてが被災した民衆を不安から迅速に抜け出させることができたのでしょう。これは傷病者に対する最も良い治療であり、私達の仕事にもきわめて良い基礎となりました。」

取材中、記者がこれら故郷と家族から遠く離れている白衣の天使に一度ならず聞いた。「ホームシックになりませんか？見渡す限り傷だらけの災害現場は心の負担ではありませんか？」との問いに、彼らの回答はほとんどすべて同じだった。「負傷者を世話することは私達の天職です。被災地の民衆の苦痛を取り除くのは私達の最大の楽しみです。」

異なった言語は、同じ心の声を表現した――災難に打ち勝ち、生命を心から願おう！天災は一生命が脆く弱い、ちっぽけなものであることをはっきりと示したが、みなぎりほとばしるこの世の大いなる愛はきっといかなる災難にも打ち勝ち、更にすばらしい明日を創りあげるであろう！

《人民日報》（2008-05-31 第 03 版）

添付⑩

「20年来で最も早い出発」
―四川被災地区救援チームリーダー小泉崇さんを訪ねる

人民日報日本駐在記者 于 青

「日本は国際救済活動に参加して 20 年来ですが、今回の中国四川へ向かう救援隊の出発が最も早いものでした。5 月 15 日昼ごろに日本政府が派遣の決定を下した後、第 1 陣の救援者は午後 6 時 10 分に民用航空の旅客機で出発しました。」と、日本の四川国際救援隊リーダーを務めた外務省国際協力局国際緊急援助室室長の小泉崇氏は語った。

普通の情況では、言葉が通じないのはとても不便ですが、あなた達は救援の際、地元の人とどのように意思疎通を図ったか？とある記者が尋ねたとき、小泉崇氏は、次のように語った。「災難を前にしては、いかなる言語もすべて表現力のないものです。生存者の緊急措置をとる現場で、言語は目つきや手振りでの意思疎通の早さには及ばないようです。私達は、北京、大連、綿陽の救援隊と一緒に現場で緊急措置をとり、互いに緊急措置器材を貸しあい、終了後には互いに握手をしたり、一緒に写真を撮ったりと、全く言語を使わずとも、何の障害もありませんでした。北京から来たある 3 人の青年ボランティアが、ずっと私達に協力してくれました。あるレストランの支配人は、お粥とザーサイを食べさせてくれたにも関わらず、申し訳ない、今これだけのことしかできませんと言ってくれました。捜索救助を終え地震被災地を離れるとき、地元の人は横断幕を掲げ熱烈に拍手をして私達に感謝の意を示してくれました。」

小泉崇氏はまた次のように話した。「日本政府の国際緊急援助室は現在 6 人おり、主に日本政府が実施する人的な緊急援助と物的な緊急援助活動の調整を担当しています。日本が派遣する国際緊急援助隊には何種類かのタイプがあります。救助チームは警察、消防、海上保安庁、外務省、日本国際協力機構などの派遣人員で構成されます。四川へ向った救助チームはこれらのタイプに属しています。医療チームは医療部門が派遣した医師、看護婦、薬剤師と外務省、日本国際協力機構の人員で構成され、現在四川の被災地で活動する日本医療チームはこのタイプに属します。また異なる情況下では、日本はさらに被災地へ専門家チームを派遣し、災害コントロールや災害拡大防止などの指導と提案にあたることもあります。

関連する法律に基づいて、国際緊急救援隊は 24 時間以内に必ず出発しなければなりません。今回、四川へ向かった救援隊は、知らせを受けてからわずか 6 時間で出発し、大多数の救援メンバーは空港で集合の際にはじめて知りあったのです。

《人民日報》 (2008-05-31 第 03 版)

添付⑪

特集
日本の救助隊が　中国の被災地域へ

林暁光

2008 年 5 月 12 日午後 2 時 28 分、マグニチュード 8 クラスの地震が中国四川省で発生した。この瞬間、地に亀裂が入り、家屋は倒壊、おびただしい人命ががれきの下に埋まってしまった。

中国で発生した地震の情報が日本に伝わった途端、マスコミは即時に大量のニュースと写真を報道し、多大な犠牲を払い、甚大な被害の様子を伝える画像は、地震による辛酸をなめ尽くしている日本人に我が事のように感じさせた。日本人の行動は早かった。訪日した胡錦涛中国国家主席を見送って一週間もしないうちに、日本の福田康夫首相は 12 日の在中国日本国大使館を通じて、胡錦涛主席と温家宝総理にお見舞いの意を表明した。福田首相はもし必要があれば「日本側は準備ができており、中国にできる限りの手助けを行う」と伝えた。13 日、日本の高村正彦外務相はできうる限り中国の国民を援助し、まず 5 億円の緊急援助を行うと発表した。日本の国民は様々な方法で中国の被災地域、被災者のために惜しみない援助をしている。チェーン店のコンビニエンスストアやスーパーはレジに募金箱を設置し、テレビは募金専用電話番号（この番号にかけると 1 回ごとに自動的に 105 円＝人民元に換算すると約 7 元募金できる）を発表し、各新聞とトップページは募金ホットラインを設け、さらに多くの人が街頭募金をするなど…。

同時に、日本は速やかに救助経験が豊富な救助隊を組織し、先端技術を駆使した地震救助専門機材を手にして四川に赴き、外国救助隊としては最初に地震被災地域に到着した。この日本救助隊が 2 列に並んで被災者に粛然と黙祷している写真は、同じようにやるせない思いを抱いている中国人の心を打った。救助隊の仕事の力点が変わるにつれ、日本の救助隊も帰国することになった。続いて日本政府は、20 人で構成する医療チームを中国の被災地域に派遣して被災患者への医療活動を行うことを発表し、救援活動を徹底的に行う決意を見せ、またも中国人から好評と感動を得た。

中国人は日本人の善意を深く感じ取り、在中国日本国大使館に電話をかけて心からの感謝を述べた人が少なからずいた。日本に対しては常に鋭い言論を浴びせ、感情的であるインターネット上でも、「ありがとう、日本」の言葉で一杯だった。「ありがとう、中国人は永遠に忘れない」という心からの言葉は、今まで根深かった相互不信感を溶かし、中国の恩を感じ、知り、報いる気持ちを海を越えて届けた。日本のマスコミが中国人の感動を国内に伝えると、日本人もまたそれに応えた。日本のマスコミとネット上には「不可思議な変化」、「中国の対日感情がにわかに和らぐ」などと正面からの評価が多くなされた。

二国の感情の融和とそれぞれの善意の表現は予想を超えるもので、中日関係を見直し、見つめる上で全く新しい視野とチャンスができたことになる。

2006 年以降、中日両国の指導者は相次いで「氷を砕く旅」「氷を溶かす旅」「春を迎える旅」「暖かい春の旅」と銘打った相互訪問を行い、中日政治関係は大幅に改善され、両国国民の感情をやわらげ、これは日本政府が今回こんなにも迅速に救援を提供し、救助隊派遣をすることにつながった。両国民の感情が接近することは政治関係の発展にもよい基礎と世論を作り出すことになる。

過去何度か「中国脅威論」「中国崩壊論」が日本で盛んになったことがあった。10 年以上が過ぎて、中国は「崩壊」しなかっただけではなく、日本にとっては「脅威」となるどころか、対中貿易成長によって徐々に不景気から脱出する一助となり、中国市場は日本経済復活の「てこいれ」の役割を果たした。また大地震後、日本が援助してくれたことに対する中国の心からの感謝は、中国人はやみくもに他を排斥したり、また狭いナショナリズムを持っているわけでもなく、「水の恩を受けたら、源へ恩を返す」ことは中国文化の伝統が誇る神髄

であると日本人が認識することになった。逆に言えば、中国人が日本、あるいは日本人を見直す機会であったとも言える。日本人が中国の震災に対する救援の意思は、日本人も人々の苦しみを悲しみ、困っている人を救うという、人類共同の感情と価値観を持っていると言うことを示した。

長年にわたって、日本は対外援助、質の面の防衛を進め、国際安全の義務を負い、政治大国の役割を果たすことが「普通の国」が進む必要な道だとしてきた。しかし日本の努力は国際社会では賛否両論で、国際救助活動に加わることはその他の形式の国際行動ではかつて得られなかった賛同を得た。このことで、日本の国民は「『普通の国』とはいったいどんな国だろうか？思い上がって隣国を軽視し、摩擦と対立を起こすことか？それとも人の災難に救いの手をさしのべ、雨雪のごとく恨みを溶かし、静かに恵みをもたらす同情の気持ちを相手の心に注ぐことか？」と考えざるを得ないだろう。

今回の地震の救援活動は、両国マスコミと一部の国民が攻撃し合うかつての「悪循環」を変え、思いやりを示してそれを受け入れ、また善意に報いる「好循環」を作り出した。この小さな流れに沿えば、必ず大きな流れになる。この新しい循環は小さな善意一滴一滴を集めて作られた細い流れで、必ず中日戦略互恵関係を深めていく歴史的な潮流になるだろう。

*事務所注：筆者の所属先は明記されていないが、中央党校国際戦略研究所教授と思われる。

「野戦病院」を訪問

徐元鋒

「中独赤十字社の野戦病院」手術室内の風景。

写真＝朱エイ[6]

四川省綿陽市安県高川郷茅香村から来た黄奕は、地震後命拾いをした。彼の命を救ったのはまさに中独赤十字社の野戦病院の医師達である。

今年 15 歳の黄奕は先天性の心筋炎を患い、ブン[7]2 川大地震発生の後、驚きがおさまらない家族は彼を連れて 10 数時間何度も山を越え、安全な睢水鎮へ移った。移動の途中、黄奕の心臓病に発作がおこったが、幸い医師に発見された。5 月 27 日、黄奕は都江堰市の中独赤十字社の野戦病院へ搬送され、ここで彼はタイムリー且つ有効な治療を受けた。

ボーイング 747 大型輸送機に載せた病院

これは被災地の傷病者が送り込まれる配慮と愛に溢れた野戦病院で、中国赤十字社とドイツ赤十字社の協力プロジェクトである。

5 月 23 日、ボーイング 747 大型輸送機はドイツベルリンから飛び立ち、成都双流空港に降りたった。この飛行機は人口 25 万人に医療を提供できるすべての医療設備と薬品を積載し、同じ飛行機で 11 人のドイツ赤十字社の人員も到着した。設備の重量は 49 トン、体積は 300 数㎥に達し、総価値は 73.2 万ユーロである（約 800 万元人民元）。ドイツ赤十字社はこのために 150 万ユーロを寄付し、これは病院を 3 か月運営するのに十分な金額だ。その後、この病院は無償で中国残され永久に使用される。

野戦病院というよりは、むしろ「移動病院」といったほうが正確だろう。もしあなたが都江堰市普什寧江集団の門の前に来れば、さらに「移動病院」の中身を理解することができるだろう――長さ約 400m、幅 30m の道路の上に横 1 列に並んだ大小さまざまな 25 個のテン

---

[6] ひへんに偉の右つくり―― 訳注

[7] さんずいに文―― 訳注

トの中のすべての設備は解体し移動させることができる。これは、病院がいつでも必要に応じていかなる場所へも移動できることを意味している。

病院は外来診察、内科、外科、婦人科、小児科と薬局で設立され、レントゲン室、検査室、病棟及び重症患者のための救急治療室もあり、いわゆる「規模は小さいが、全機能完備」なのだ。私達が手術室のテント前に来てみると、このテントは大きくその上安全で、丈夫なだけでなく、テントはガスパイプで支えられ、中には放熱の空調設備があることがわかる。紹介によれば、野戦病院のテントはすべて天然材料で製造されており、防火、汚染もなく、真空断熱層がある。配備する酸素製造機は直接空気を酸素に変えることができ、酸素濃度を調節することもできるので、かさばる酸素ボンベの替わりになるのだ。テントの中は、手術服とスリッパが整然並べられ、洗面所も固定されている。27 日、ここでは 1 度簡単な手術行っている。

ドイツ人がボランティアに感動される

ドイツの専門家はもともと、野戦病院を建てるには少なくとも 5 日は必要と予想していた。しかし、中国側の従業員はわずか 2 日余りで設置場所を選び、テントを張り主な設備の据え付けなどを完成した。ドイツ筋のある人は感心のため息をもらし、こう話した：「私達は世界で最も効率のいい仕事を目にしました！」

クラウスさんはドイツのある工事会社の責任者であり、赤十字社のボランティアでもある。都江堰に来てから、彼の唇に瘡ができた――「私があまりに焦りすぎたのかもしれません」と、彼は説明した。パキスタン、インドネシア、イラン……クラウスさんは世界の数多くの国の災害救助に参加したことがあったが、中国に来るのは初めてだった、しかし
彼は「一度もこんなに良い協力を得たことがありません」と思った、その他の場所では 1、2 日でようやくやり終えることができる事を、ここでは 2、3 時間で解決できてしまうのだ。

王平と彼の率いた「兄弟愛救助チーム」も、ドイツの人々に深い印象残した。この 70 人あまりのボランティア隊列の成員は全国 10 余りの省から来た人々で、彼らの中には公務員、大学生、個人経営の主人などがおり、みな苦しみや辛さを堪え忍んだ。これらのボランティアが、午前 7 時からテントを掛け、夜の 11、12 時まで働いた。暑い日には体はサウナで蒸されたようで、もともと彼らは 26 日に撤退するはずだったが、ドイツ側は彼らから離れられず、彼らに更に 3 日いるよう願い出た。仕事の中で、双方は「戦闘の友情」を結んだ――ドイツ人たちはボランティアにりんごとパンを贈り、ボランティアはビールとたばこでお返しをした。

上海華山病院は中国赤十字社に属する病院で、今回彼らは医療関係者を派遣し中独の赤十字社野戦病院の建設計画と運行に参与した。ドイツの「輸入品」の設備と薬品に直面したが、中国側の人員はどのように操作し、使うのかすぐに掌握した。

被災地の庶民のために傷の痛みや苦しみを解きほぐす

ドイツ赤十字社のスウェンジャー報道官は記者にこう伝えた、ドイツの任務は、病院を建てたら中国側に手渡し、病院の管理と具体的な応急手当ての方法に至っては、中国が提案を必要としない限り、ドイツはあくまで「片側に立つ」立場でいる。

ドイツ赤十字社の理念は：被災地の需要に対し、最も短い時間で、最も基本的な医療を提供する。彼らはこの点をやり遂げた。

野戦病院の高バン仲[8]院長は記者にこう伝えた、都江堰市の 3 つの 2 級 1 等病院は地震でかなりのダメージを負い、ほぼ麻痺状態になった。これは、都江堰市の被災者の基本的な医療を保障しがたいことを意味した。120 台のベッドを提供でき、25 万人に対応できる野戦

[8] きへんに傍の右つくり―― 訳注

病院をばらまくことは、当市の医療需要を緩和するだけでなく、ブン[9]川などの被災者にもサービスが可能になる。更に重要なのは、これらのサービスはすべて完全無料なのだ。「運行の効果は予想外に良く、都江堰市の被災者の基本的な医療の需要を満たしました！」と、都江堰市衛生局肖紅局長は野戦病院の独自効果を評価した。

27 日午前 10 時、診察に訪れる大衆はすでに長蛇の列をつくり、現場は忙しかったが秩序整然としていた。

観鳳村の曾凡栄は地震で足を捻挫し、家で薬用酒を塗ったが役に立たず、医師は検査後彼女に大して差し障りはないと伝え、紅花油を渡した。

翔鳳社区の陳友兵は股部を怪我し、番号が呼ばれるのを待っていた。彼は、ここの医療関係者は態度がとても良く、これも地震後の少しの慰めになったと語った。

峨郷の賈正鴻は腰を怪我し、同郷からこの病院を聞きつけ、今日早速診察に来た……

5 月 26 日診察当日、野戦病院は 252 人の患者に応急手当てをした。これも一部の人の野戦病院に関する不必要な懸念を取り除いた。肖紅局長は、当面は都江堰の人が子供の出産や、盲腸炎の手術で、数十 km 離れた成都まで行く必要はないと語った。

ドイツ赤十字社の寄付がこのように人気を得たことを知り、ドイツ引率者のトーマスさんは非常に喜びほっとした。彼も初めて中国に来て、短い期間中国を旅し、地元の人の親切で客好きな一面と災難に忍耐強く頑張りぬく精神に触れ、彼に深い印象を与えた。ある人がトーマスさんらをカナダのベチューン医師のようだと称賛した時、彼は困惑して頭を振った。通訳からベチューン医師に関係する紹介を聞いて、彼は納得し笑った。

《人民日報》（2008-06-03 第 16 版）

[9] さんずいに文―― 訳注

中日友好に貢献した日本医療チーム

東京 6 月 2 日発新華社（記者劉贊)崔天凱駐日大使は 2 日夜、成田空港で中国四川省の地震被災地から帰国した日本の医療チームを出迎え、中国の震災救援活動への尽力に感謝し、彼らが中日友好のために貢献したと称賛した。

崔大使は医療チームを出迎える式典で次にようにあいさつした。四川大地震の発生後、日本政府は素早く中国に震災支援を提供し、日本各界の人々も相次ぎ支援の手を差し伸べた。日本の救援隊は被災地に最初に到着した国際救援隊であり、隊員たちは緊迫した被災地で、1000 人余りの負傷者を治療した。医療チームの高度な医術技術と崇高な人道主義精神は現地の人々の胸を強く打ち、中日友好に忘れ難い 1 ページを刻んだ。

崔大使はまた、次のように述べた。胡錦涛主席が先ごろ日本を訪問し、両国首脳が戦略的互恵関係を全面的に発展させていくことを確認した。日本の医療チームによる中国の震災救援活動支援は両国関係が良好な発展を遂げていることを示すもので、両国首脳による共通認識を実行に移すための重要な一歩でもある。

日本の医療チーム田尻和宏団長は、次のように述べた。今回四川で従事した医療救済活動の時間は短かったが、メンバーは現地の医療スタッフとよく協力し、多くの負傷者を治療し、負傷者と家族の高い評価と感謝を得て、現地の人々と友情を結び、日中両国の理解や相互信頼を深める貢献ができた。メンバーはこれに対し深く喜び安堵している。活動中、温家宝首相と楊潔チ外交部長がもっぱら医療チームのメンバーを見舞い、大いに奮い立たせてくれた。中国政府と関連部門が日本の医療チームを支持してくれたことに感謝する。

その夜、中国人留学生と華僑・華人が自発的に空港へ駆けつけ、花束と 「日本の医療チームに感謝する」と書かれた横断幕を掲げて、帰国した医療チームを出迎えた。

日本の医療チームは 2 日午前、四川の地震被災地での医療活動を終え、成都から飛行機で北京を経由し帰国した。日本の医療チームは 5 月 20 日に成都に到着し中国の震災救援活動を支援していた。医療チーム 23 人で構成され、そのうち医師が 4 名、看護婦が 7 名、薬剤師が 7 名と調整員が 5 名であった。

「現代ベチューン」 被災地医師記
言語と文化の障害を越え、インターナショナリズムの温情が被災地を流れる

◎ 本紙記者　徐松　成都より

5 月 21 日、2 名のロシア医師が負傷者を移動エアー病棟へ移す。

「おじさん、怖い、本当に怖いよ。」
「心配しなくていいよ、おじさんがいるよ、すべてがよくなるよ。」
ロシア医療チームの中国系医師干俊達は、11 歳の男の子賀華偉のために行った手足切断手術の際起きた一幕を永遠に忘れられない。小さい男の子は突然干俊達の手を引っ張った。

5 月 20 日、強い地震の一週間後、第 1 陣の外国医療チーム――ロシア医療チームは地震の被害が深刻な彭州市に巨大な野外移動病院を建てた。続いて 22 日、日本医療チームは成都の華西病院に到着し、全面的に中国の医療スタッフが展開する負傷者への応急手当てに協力した。

イタリア、ドイツ、韓国、イギリス、フランス、パキスタン、インドネシア……異なる国からの医療志願者達は絶え間なく被災地へ駆けつけ、彼らの姿は被災地の前線で活発だった、「現代ベチューン」は被災地の人々が彼ら外国の白衣の天使に与えた特別な呼称だ。

ここでは、人々は言語と文化の障害を越え、インターナショナリズムの温情が被災地に流れている。

中国人のねばり強さと恩返しの心に驚嘆

10 数日間、朝な夕な顔を合わせているなかで、外国の医療チームと被災地の民衆は誠実な友情を結んでいった。外国の医療メンバーは中国人のねばり強さと恩返しの心に驚嘆し、被災地の民衆も外国の医療チームの助けに感謝の念を心に抱いた。

彭州市の小学生趙永欽は自分の感謝の思いを込めて 1 通の手紙を書いた。「……中国人民は忘れることはできない。……ロシアの皆さんどうぞ体に気をつけて！被災地の老人や同郷の人々は永遠にあなた達を覚えている！」

趙永欽の手紙はロシア医療チームのメンバーを深く感動させた。アレクサンダー・イワヌス副隊長は《国際先駆導報》に、ロシア救援隊は趙永欽から、恩返しをしてもらい、友情をも得たと伝えた。

日本医療メンバーの仕事熱心さに感服

今回中国に来た救援の外国医療メンバーの多くが各自分野の専門家だ。彼らの到来は、中国の医療・看護に従事する人のストレスを緩和しただけでなく、更に重要なのは、彼らのずば抜けた医療の技術、絶え間なく仕事に励む態度が、中国人を敬服させた。

華西病院の透析センターの文艶秋看護婦長は《国際先駆導報》にこう伝えた。「ここへ配置され透析患者の世話に協力してくれる日本から来た高野博子看護婦長の、患者に対する自然ににじみ出る親切や関心にはここの一人一人の医療関係者の勉強になる。」

「親切でプロ意識もあり、入念な意気込みは、まるで自分の家族を世話するようだった。多くの細い部分で、普通の看護婦なら見落とすことにも、彼女はすべてに目が行き届く、患者は皆彼女と腹を割って話し交流したいと願っている。」と文艶秋は語った。

日本医療チームの帰国が間近な頃、華西病院は日本側の医療関係者を招いてセミナーを開き、学生達にその技術と経験を伝授してもらった。

医療チームは日本メディアの「非難」について釈明

日本医療チームは被災地の負傷者の人々に応急手当てを行うために力の限り貢献した。南西地区で最も多く地震の負傷者を受け入れた四川大学華西病院は、日本の医療メンバーらを4つのグループに分け、急診、整骨科、重症患者のための救急治療室と血液透析などの異なる科へ分散させ、中国側の医療人員といっしょに協力し負傷者を救助にあたった。

被災地の第1線に向かわなかったために、日本の医療チームは当初国内メディアから「遠まわしな批判」を受けた。これに対し、日本の医療メンバーは《国際先駆導報》の取材でこう説明した。「成都に留まって病院で活動することは中国側と検討した上で共に決定した。1つには被災地の前線で負傷者を受け入れる仕事は最終段階に入っており、圧倒的多数の負傷者はすでに後方の各地病院に送られている。2つには華西病院は多くの重症患者を受け入れているので、日本の医療関係者はここで更に自分の優勢を発揮できる。」というものだった。

高野博子看護婦長は《国際先駆導報》に対しこう語った。彼女は中国の同僚が救助のために寝食を忘れ、一生懸命働く姿を目の当たりにし、深く感銘を受けた。中国の負傷者を救助し貢献できることを、彼女は非常に誇らしく感じた、と。

気前よく医療物資を寄付

調査によると、大多数の外国医療チームが使命を終え帰国する前に、全てもしくは一部の医療物資を被災地の人々へ寄贈した。

ドイツ医療チームは総重量50トン、価値にして150万ユーロの医療物資を持参し、今回持参物資が最も豊かな外国医療チームとなった。

「ドイツ人は仕事ぶりが謹厳なことで有名となり、仕事熱心で、医療技術ずば抜けて高く、応急手当てを行う際の少しもおろそかにしないプロ精神が、我々中国側スタッフを大いに感動させた。」ドイツ医療チームへの協力を担った都江堰市人民病院高傍仲院長が語った。

「応急手当ての任務終了後、我々は診療所の一そろいの設備を現地に残す。中国の医療関係者らが使用し、中国の人々のために更にいいサービスをしてくれることを望んでいる。」とドイツ医療チームの引率者トーマス・モークは《国際先駆導報》に語った。

特別記事：日本で感じた四川被災地への熱心な救援

2008 年 06 月 05 日 11:34:21　新華社ネットより

新華社ネット特別記事：四川大地震は中国人に甚大な被害を与え、中国人と海外華僑の心をつないだ。同時に、一衣帯水の日本も四川大地震被災地に大きな関心と心からの同情を寄せ、日本各界は相次いで行動を起こし、救いの手をさしのべた。

5 月 31 日、筑波大学の中国人留学生と筑波日中友好協会のメンバーは街頭に出て、四川大地震被災地の子どものために募金をよびかけた。写真は日本人の子どもがお小遣いを募金箱に入れているところ。新華社　任正来　撮影

すべてのチャリティーに日本の芸能人が参加

本多定雄氏は民間の日本人で、中国残留孤児の民間組織代表であり、地震被災地の孤児に目を向けている。偶然記者と出会ったときに、四川大地震のことになると、本多氏の目からは涙があふれ出た。本多氏は、何万もの犠牲者を思うと涙が出てきて、特に両親を失った孤児を心配している、もともとは幸せな子どもで、かわいがってくれる父母がいたのに、一回の自然災害で気の毒な孤児になってしまったと語った。

また、四川大地震被災地域の孤児にできる限りのことをする準備をしているとも語った。

現在本多氏は孤児救済のチャリティーコンサートのために忙殺されている。コンサートは6月23日に教会で開かれ、有名な日本に住む中国人歌唱家である呉月華氏が招かれて参加することになった。本多氏はまた日本の作曲家に四川大地震被災地の孤児を勇気づける曲を作曲してもらう準備を進めている。

被災地募金のため、在日華僑・華人は様々なチャリティーイベントを行い、様々なチャリティーに日本の芸能人が参加している。記者が見た5月25日六本木ヒルズアリーナで行われてチャリティーコンサートには、中国の歌手孫国慶、アグネス・チャン以外にも、日本のスターであるすがはらやすのり、アメリカで活躍している日本人歌手TOSHIもチャリティーに参加した。すがはらやすのりは深い面持ちで、日中両言語で『朋友（友よ）』を伝い、歌を通じて人の純粋な友情を伝え、日本の友が中国の朋友の困難に温かい手をさしのべて欲しいと願った。熱唱するすがはらやすのりの目には涙が光っていた。

TOSHIは日本で非常に有名で、ここ数年は常に心を慰める曲を作り出している。今回のコンサートでは、『EARTH IN THE DARK～青空にむかって～』を被災者に捧げ、「人生にどんなに難しく、どんなに悲しくても、心に青空があれば、希望が見える」と歌った。

多くの日本人聴衆は行動で災害救済チャリティー活動への支援を無言のうちに示していた。5月22日神奈川県高津市で行われたチャリティーの現場では、担当者の急用により、記者が代わりに募金箱を持っていたが、80歳を過ぎた白髪の女性が、かすかにふるえる両手で、お金でふくらんだ封筒を募金箱に入れ、封筒には金額25万円と記入されていた。記者は名前を尋ねたが、その女性は頭を振って答えたくない様子を見せた。多くの募金をする日本国民はこのように、静かに被災地を支援していた。

中国の四川大地震発生後、和歌山県の中国人留学生は自発的に組織を作り、街頭やキャン

パスで被災地の幸せを願う署名を行う募金活動を繰り広げた。写真は募金する日本の子ども。新華社発

政府公務員の街頭募金

多くの日本人は駐日中国大使館と日本赤十字協会を通じて被災地に寄付している。記者は、ニトリ株式会社の代表取締役似鳥昭雄社長が自民党の二階俊博総務会長、武部努前幹事長とともに、大使館を訪れ 1 億円を寄付したのを見かけた。似鳥昭雄社長は、彼の会社の利益は大部分中国との取引で生まれたもので、一部の製品は四川の工場で生産されたのもあり、1 億円の寄付は中国への恩返しだと述べた。

幸福の科学出版社は中国の古典文化を紹介する数多くの本を出版しており、本地川瑞祥社長は特に中国の孔子と庄子を尊敬しており、日本文化は中国の恩恵を受けているので、日本人は中国人に恩返ししなくてはならないと考えている。四川大地震の被災地域住民にテントが不足していることを知って焦りを感じた本地川社長は、5 月 29 日に駐日中国大使館に赴き、150 のテントを寄付すると申し出た。

日中環境協会も民間の団体で、島村宜伸前農林水産大臣が会長を務めているが、地震発生後に島村会長は日中環境協会を代表して 3 台の海事衛星電話を寄付し、現在は小学校再建援助について検討している。

企業や団体以外にも、多くの個人が自発的に大使館を訪れた。地震発生後、駐日中国大使館を訪れ寄付した日本の友人の流れはとぎれることなく、2 日前、記者の友人である田中邦弘氏が中国人とともに大使館を訪れ、10 万円寄付していた。6 月 4 日までに、大使館を通じて集まった寄付金は 8 億 4000 万円以上にのぼった。華僑・華人による募金以外、大部分は日本の友人からの募金である。

さらに高く評価されるべきなのが、一部の友好団体と政府機関が街頭で四川大地震の被災地のために募金を呼びかけたことである。日本中国友好協会は日本共産党に属する友好団体だが、専門チームで御茶ノ水駅で寄付を呼びかけた。名古屋市の行政機関は 5 月 17、18 日の 2 日、100 名以上の行政担当者を駅や繁華街の募金活動にとりくませた。駐名古屋中国領事館の李天然総領事は、名古屋市行政機関の公務員が街頭で中国の募金活動を行うのは、史上初だと語った。

5 月 31 日、筑波大学の中国人留学生と筑波日中友好協会のメンバーが街頭に出て、四川大地震被災地の子どものために募金をよびかけた。写真は日本の子どもがお小遣いを募金箱に入れているところ。新華社発

積極的な態度を見せる政府とメディア

日本政府の態度は非常に積極的で、日本は中国に救援隊を派遣した最初の国家である。救援の中で、日本の国際緊急援助隊は中国人と深い友情を結んだ。

5 月 30 日、記者は日本の救助チーム隊長で、外務省国際緊急援助室の小泉崇室長を取材し、小泉室長は「5 月 15 日午後に、中国に行き災害救助活動を行うという通知を受け取ってから、遠くは沖縄から、日本全国の救助チームメンバーが集結した。2 隊に分かれ、第 1 陣は 6 時間以内に出発したが、この速さは日本で新記録である。日本の救助チームは中国が最初に受け入れた海外救援隊であり、日本の救助チームも初めて中国に行くことになったので、最初は意思疎通にやや困難が見られたが、すぐにスムーズな協力をすることができた」と語った。青川県で行方不明の母子を捜索している現場では、小さな女の子が救助チームにチョコレートを差し入れて励まし、多くの市民も感謝の意を表していた。北川県では、救助チームは北京消防隊と共同作業にあたり、ボランティアともよく協力できた。生存者を救出できなくても、日本の救助チームは全力を尽くした。小泉室長は、「当初の目的は人道的救援だったが、その結果日中両国民の友情を深めることができ、この点については嬉しく思っている」と語った。

今回、日本の報道が友好的であるのは特筆しておくべきである。過去中国で何かあれば日本メディアはあら探しをしていたものだが、今回は全く異なり、中国の地震災害と中国が軍・民が災害救助に奮闘していることに対する客観的・正面からの報道が多く、マイナス面の報道が少ない。日本の共同通信社はホームページで日本赤十字会の通帳番号を知らせ、寄付をリードした。6 月 3 日までに、日本赤十字協会を通じた寄付額は 18 億 4000 万円に上った。

博愛には国境はなく、中国が甚大な自然災害に見舞われたとき、常に自然災害に面している日本の友人は国境を越えたいたわりの心を示した。地震災害という苦難を越え、日中両国民の感情がさらに寄り添った。　（新華社ネット東京駐在何徳功記者）